

まあ、いいか、でいいか

〜「人生九〇年」時代を前にして

堀内正範 著 元『知恵蔵』編集長

目次

はじめに あなたは「現役長生」？「引退余生」？

一 シニア期マラソン人生の金と銅 4

二 「丈人力」という潜在力を活かす 9

三 長寿を愛しむ三つの秘策 16

その一「非を飾る」世相を斬る

一 「好事門を出でず、悪事千里を行く」世相 25

二 かあさんは許さない 29

三 中堅社員の高齢者批判 36

四 「貯蓄ゼロの日」へのカウントダウン 43

その二 家庭内リストラは「MYチエア」から

- 一 「MY・・・」がないマイホーム 56
- 二 「家庭内リストラ」のコア（核）用品 67
- 三 次世代に暮らしの知恵を伝える 74

その三 やや高安心の国産・地産品が再登場

- 一 「MADE IN JAPAN」の時代 84
- 二 途上国産の百貨商品に囲まれて 95
- 三 やや高安心の国産・地産品が再登場 100
- 四 「新・日本型マネジメント」に活路 105

その四 洋風を回避して和風へ回帰

- 一 「四季」意識の共有が和風回帰のキイ 111
- 二 衣食住の和風ステージを共作共演 126
- 三 中心街は「モノと暮らしの情報源」 141

その五 高齢期二五年の居場所づくり

- 一 ここが「エイジング・イン・プレイス」 151
- 二 「三世代ふれあい館」なんていいね 167
- 三 生活支援コーディネーターを支援 173
- 四 手づくり、まちづくり、仲間づくり 180

おわりに 人生の「達人」としての八面玲瓏

- 一 まあ、いいか、でいいか 188
 - 二 住民・市民・国民として 199
 - 三 そして国際人として 224
- 付 三世代年表 生年別の人口(男・女)、流行語、流行歌

はじめに あなたは「現役長生」？「引退余生」？

一 シニア期マラソン人生の金と銅

「人生六五年」時代から「人生九〇年」時代へ

*内閣府が新たな指摘と要請

六五十二五〇九〇。

「人生六五年」時代から「人生九〇年」時代へ。

つい最近までは六〇歳（定年延長して六五歳）まで働いて、あとは年金暮らして自適の「引退余生」を送る。そういう暮らしがふつうだったのに、「人生九〇年」へと一気に二五年も延伸して、「現役長生」の暮らしが要請されている。

平和な日本で、みんな等で等しく務めてきて、その成果として得た長寿の期間。

六五歳からの二五年を、みなさんはできればそのまま現役としてすごして、国力の萎縮（デフレーション）を起こさないでください、ということか。

こんな重量級の課題を指摘し要請を出したのは、他でもない内閣府である。

誇るべきこの新たな課題に、国民一人ひとりがみすから回答を出さなければならぬ。

といったところで、九〇歳なんて遠い先のこと。

六〇歳の還暦より前の人なら率直な実感として、

「まあ、いいか」となる。

還暦の六〇歳の人にとっては、「人生九〇年」は三度目の三〇年。二度あることは三度ある。六〇年まではさして長くはなかった。三度目の三〇年もおよそ長さの見当がつく。ただし、今回は途中下車があるところが違う。

今年中にみんなが六五歳以上の高齢者になる「団塊の世代」（一九四七〜一九四九年生まれ）の約七〇〇万人の人たちは、年金生活にはいったばかり。ほどほどの貯蓄もあるし。こちらは、「まだ、いいか」となる。

国がその対策の指針とする「高齢社会対策大綱」の見直しは、つい先ごろあったばかり。ところが、こんな自分の人生にかかわる大事な決定を、高齢者のみなさんは知らない。

二〇一一年一〇月に、民主党政権の蓮舫高齢社会対策担当大臣（蓮舫議員が兼任の「高齢社会対策担当大臣」だったことを、どれほどの人が知っていただろうか）のもとで、学識経験者による検討会を立ち上げて報告書を作成、その後、内閣官僚の検討を経て、二〇一二年九月七日（このときは中川正春担当大臣のもと）に閣議決定した。内閣はもちろん民主党の野田（佳彦）内閣である。小泉（純一郎）内閣以来、一年ぶりの「大綱」見直しであった。

その間、衆参両院議員が何をしてきたかはご記憶にあるはず。

まことに熱心に、日々、「団塊の世代」の年金分も含む「社会保障」費の財源となる「消費税増税」というおカネのほうの議論をしており、肝心の高齢社会のありようについては、まったくくないといっているほど関心が薄かったのである。

だからマスコミ報道も閣議決定のその日かぎり、内容については多くの国民の知るところとならなかった。無理もないことだが、若い厚労省クラブの現役記者も、高齢社会対策については「認知症」ほどには肝心な問題として認知していないからだ。

「まあ、いいか」といって放っておいてもいいが、知って準備しておくに越したことはない。どこからでも遅くはないのだが、高齢期への助走期間である五五〇六四歳から見定めに入っても早くはない。「引退余生」期に到達して一度エンジンを下げてしまった「団塊の世代」の人より、そのまま突っ走ればいい五五歳あたりの人のほうが一気に行けそうだとすれば、すでに「現役長生」をめざしている先輩シニア・ランナーのみなさんの後ろ姿を追いながら習得せねばならないことは習得することになる。

「老人」って呼ばれたくないね

*一〇年余つづく「高齢社会対策」の延滞

みずからを高齢者と認めている人でも、いま通用している意味合いで「老人」と呼ばれると、

「違和感がある」

「呼ばれるにはまだ間がある」

と感じる人は少なくないだろう。

だれもがよく使う「老人」ということばに対して、ひとりの人の感覚の違和であるとともに、多くの人にも同様の違和感が起きているのは、社会のしくみの方に原因があるからだ。急速にすすんだ「高齢化」に対する国の対策が遅延しているからである。本来なら「老人」と呼ばれると、敬意が感じられるような滋味のある日用語なのであるが。

国の対策が遅延している？

そんなことはない。

社会保障も、「消費税増税」による財源の確保も、国は他をさしおいても「高齢化対策」をやっているのではないか、という厚労省官僚からの善意の反論が聞こえる。

その通りです。

しかし、ここでいう国の「高齢化対策」というのは、医療・介護・福祉・年金といった個人に対する「高齢者対策」のことではなく、高齢者意識の醸成や、高齢期の暮らしに便利で使い勝手のいいモノの製造やサービスや、安心して過ごせる居場所や、世代交流のしくみづくりといった「高齢社会対策」のことである。

一一年ぶりに見直された「新大綱」には、高齢者のだれもが知らねばならない重要な指摘と

要請がなされている。冒頭の「目的及び基本的な考え方」を読めば一目瞭然である。

わが国は「人生六五年時代」からすでに「人生九〇年時代」になっていると指摘し、高齢者意識を改めて、みんなが社会参加することによって社会構造の変革を起こしてほしいという要請がなされているのである。

実はこの「人生六五年」から「人生九〇年」へという一足飛び二五年の延伸のなかにこそ、一〇年余の「高齢化対策」の延滞（強くいえば不在）を見ないわけにはいかない。

本来なら「人生七〇年時代」、「人生八〇年時代」といった途中の段階での「高齢社会対策」の検討と呼びかけがありえたわけで、まことに残念なことだが、ここに学者と内閣官僚にはわかっていながら、歴代内閣のリーダーには認知がなかったことの明確な証をみる。

新世紀この一〇年余の経緯を見つづけてきたジャーナリストの立場からではないが、政治の側に「高齢者（高齢政治家）」「高齢社会」に対する軽視（強くいえば黙止）があったことは、はじめに強く指摘しておきたい。

単調でありながら長く尾を引いた政界の「世代交代」の大合唱。無理解と遅延はなおも継続しており、そのしわよせを受けているのは、ほかならぬ高齢者のみなさんなのである。

のっけからこの問題にこれ以上に深入りするのはやめるが、のちの章（p・219）に引き継いで論じることにした。

二 「丈人力」という潜在力を活かす

「丈人力」とは

*人生の「自己目標」を実現させる力

はじめにここで、長い人生への励ましとなることばを提供しておこう。
思い起こしていただきたい。

あの「三・一一東日本大震災」の被災地で、とっさの励ましのことばとして飛び交っていたのは「頑張ろう！」だった。

「頑張ろう」はその後、「復興へ頑張ろうみやぎ」（宮城県）や「がんばろう東北」（東北楽天ゴールデンイーグルス。星野（仙一）監督や田中（将大）投手らと優勝までの頑張りを共有）、「がんばっぺ福島」や「がんばろう俺！」まで、復興活動のキャッチフレーズになっている。

それにもうひとつ、被災地の現場では「大丈夫？」「大丈夫！」もまた、お互いの心を支えあつて飛び交ったのだった。

「大丈夫」のなかには、被災地での美智子妃の「よく生きてくださいましたね」とともに「大丈夫！」という励ましのことばも記録されている。大きい声を必要としなくても、静かに心の深みに伝わる励ましのことばとして。

この「大丈夫」の「大」を横に置いて、男性をいう「丈夫」のうちの「夫」から二をはずしてみる。芯にあるのは「丈人」である。「大丈夫！」といったときに、心の内に包みもつ気概が「丈人」のもの。「頑張ろう！」が外向きなものに対して、「大丈夫！」はどちらかといえ、内にある力を呼びさまし励ましてくれることばといえよう。

いまや街に出れば、若者に混じって元気に活動する高齢者の姿を数多く見かける。この元気な高齢者については、いろいろな立場から実にさまざまな表現が用いられている。

「シニア」「アクティブ・シニア」「現役シニア」「スマート・シニア」「アクティブ・アダルト」「支える側の高齢者」「健丈な高齢者」「スーパージョニア」「新老人」「創業者」「熟年者」・・・など。世代としては「熟年世代」「プラチナ世代」「グラント・ジェネレーションⅡGG」や「アクティブ・エイジング」という捉え方もある。

そのうちのひとつに本稿での「丈人」を加えたい。「丈人」と「老人」を、漢字の古語同士として対比のうえで用いることができるところを特徴として。

高齢期を前にしてなお活力のあるシニアなら、「人生九〇年」にむかって青少年期・中期の長い期間をかけて培ってきた専門知識や高いレベルの技術、ほどほどの額の資産を保持して暮らしている。

この「知識・技術・資産」が高齢者の潜在能力（「三本の矢」。安倍首相の三本目の矢はあやうい）といえるだろう。フレイル状態（筋肉が衰えて活力に自在性が失われる段階）までは間

がある元気な高齢者として、保っている潜在能力を用いて何かをやってみたいと思う。これは自分と家族にばかりでなく、みんなのためにも活かしたいと自然に思う。

もしここに新世紀の初めに、国会が衆議してまとめた「日本高齢社会グランドデザイン」が掲げられていれば、その達成のために率先して参加したし、するだろう。

ことし戦後ツ子の「団塊の世代」、この活力あるニューフェースのみなさんの参加をえて、昭和生まれの高齢者「昭和丈人」層がもつ潜在力を発揮することによって、史上初の「日本高齢社会」が達成にむかう。

「長生してよかった」というシーンが、これから次々に展開することになる。必ず。

みずから決めた人生の目標を、どこまでも発展・熟達・深化させようとして、体内から湧いて出る強い生活力あるいは生命力が本稿のいう「丈人力」である。成し遂げようとする目標が大きければ大きいほど、体内からふつふつと力が湧いて出る。発揮する場がないから日ごろ気づかないだけで、高齢期にいるだれもが保持している潜在力といえよう。

「がんばらない」と「がんばる」と

*交々に用いる「老人力」と「丈人力」

世紀をまたいだせいかずいぶん遠い記憶のように思えるが、働きづめに働いてきて、以後を

どう暮らすかに思い悩んでいた高齢者を慰労してくれたことばがあった。

「老人力」（建築家の藤森照信さんと画家の赤瀬川原平さんによる命名）である。

先の大戦後の復興と成長と繁栄を成し遂げて、

「やれやれ、よくぞここまで」

とためいきまじりに高齢期を迎えようとしていた人びと。

その功労者を、「日本列島総不況」（経企庁長官だった堺屋太一さんの命名）が襲ったのは前世紀末のころだった。

働きづめに働いてきて、人生の晩期を迎えている自分の姿をすなおに見極める。

来し方の人生を納得した上で、がんばりすぎずにクールダウンしてゆくこと。その冷静な自己認識の能力を「老人力」と呼んだ同時代人のことばに納得して、多くの高齢者はみずからの判断で体を休め、疲れを癒した。多くの人が納得することで、「老人力」は流行語になった。

今でも高齢期を前にして、来し方の自分を顧みて、高齢期を「がんばらない」で過ごすことは有効だが、おのずから表出される「頑張り」は人びとを感動させるものである。

昨年五月、八〇歳でエベレスト登頂を果たした三浦雄一郎さんが推奨するように、健康を保ちながら、わくわくするような夢があり、その実現をめざすとなれば、頑張らざるをえない。「丈人力」（シニア期の目標を達成する潜在力）はおのずと湧いて出るものなのである。

といって、これまで広く用いられてきた「老人」ということばの意味を「支えられる高齢者」

に限定する意図も内容も持っていない。

長い経緯をもつ「老人クラブ」や「敬老の日」の積極的な意味合いをこれまでどおりに理解した上で、それに重ねて、広く登場している「支える側の高齢者」の活動を伝える意味合いをもって用いている。この国の「高齢社会対策」が遅延したために、「老人」ということばが本来もっていた「敬老尊賢」とか「老練」「老師」「長老」といった熟成期の社会的な意味合いを失ってきた。それをフォローすることにもなるのである。

歴史をつくる劇的な実感

*「昭和丈人層」が体現する成熟社会

現役のときの楽しかったしごとのひとつに、画家の中川恵司さんをつくった『江戸東京重ね地図』がある。江戸の山手、下町の古層の上に現代の東京が重なって見えるように印刷された地図帳である。その中の何枚かは江戸の海の上に、現代の東京がまるごと浮かんでいる。この部分は近代の人びとが活動して新たに創った都市空間なのである。当たり前といえばそれまでだが、小さな事業活動や暮らしの集積が新しい歴史をつくることの劇的な実感がある。

現代の日本で暮らす約三二〇〇万人の高齢者（六五歳以上）は、これまでの歴史にまるごとなかった存在である。史上に新たな成果として得た「人生九〇年時代」を体現している一人ひ

とりの高齢者が、これまでになかった「モノ・居場所・しくみ」をこしらえながら暮らすことで達成される新しい生活空間である。

一人ひとりの高齢者が、遠くに「人生九〇年」の到達点を想定しながら、目前の日また一日をていねいに迎えて過ごす。この「現役長生」型の高齢者が形成する成熟した社会は、これまでの「人生六五年Ⅱ引退余生」型の高齢者による社会とは異なった姿になるはずだ。

ありようとしては、各地各界の生活圏でのテーマに着実に対処しつつ、小さな水玉模様の重なりのように活動している。だれかに知られることよりも、それぞれの場での根つきと過ごしやすさを優先する。お互いにそれを知って仲間が行き来する。そして遠からず、その総体としての「日本長寿社会」の姿が見えてくる。

わが国はいまや「超高齢社会」にあるといわれる。何事にせよ、チヨーには行きすぎた語感があるから、この呼称は適当でない。できるだけ避けたい。「本格的な高齢社会」というべきところであろう。本稿では、高齢者の活動が存在感を示すとともに、青少年、中年そして高年期のすべての人が等しく意識してかわることによって成立する「三世代現役多重型」といえる社会を、「超高齢社会」ではなく「長寿社会」と呼んでいく。

「長寿社会」までの経緯をここで共有しておきたい。

みなさんご自分の来歴と重ねて理解しておいてほしい。

ご存じのように、「高齢化率」（国際基準で六五歳以上の人口比率）が七%から一四%までを

「高齢化社会」という。高齢者の存在が目立ちはじめたとはいえ、まだちらほらの段階で、余生（平均寿命）も長くはなく、後人は「支えるべき功労者」として敬愛し、介護・医療・福祉・年金などで慰労することができた。わが国では一九七〇年から一九九四年までの二四年がその期間に当たった。ヨーロッパ諸国に比べるとはるかに短かったが、戦後に苦勞された先人は納得して亡くなることができた時期である。

その後の「高齢化率」が一四%から二一%の間を「高齢社会」と呼ぶ。この間は高齢者意識をもつ者同士による高齢期のための「しくみ」や「居場所」や「モノ・サービス」づくりを展開する段階で、後人の手を煩わせないで「高齢社会」の形成をすすめることになる。わが国では一九九四年から二〇〇七年までの一三年がこれに当たった。

この世紀をまたいだ一三年間になされるべきであった「高齢社会」形成にむけた対策、高齢者意識の醸成や社会参加は成果をあげたとはいえず、「高齢社会対策」は一〇年延滞することになっている。そのひずみがさまざまに露呈しはじめているのである。

いまや世界最速で、「高齢化率」二五・九%、三二九六万人（二〇一四年九月一五日、総務省）、四人に一人に達したわが国の高齢者は、みんなが参加して形成する「長寿社会」にむけて、わが国が保有する独自の経済、文化、伝統のもとで、独自のプロセスを案出しながら達成にむかわねばならないのである。

二 長寿を愛しむ三つの秘策

「長寿時代」のライフサイクル

* 「高年前期・後期」のあとに「長命期」

これまで「ライフサイクル」というと、学問的にはともかく、ふつうには「乳幼児期」「少年（学童）期」「青年期」「成年期」「老年期」という五つの階層にわけて説明されてきた。

この発達心理学から生まれた「五つのステージ」は、自分の経験としても、あるいは子ども
の成育の姿や父母の生き方を通じて、だれもが納得できる分け方として認めている。

ところが史上新たな「高齢化」という状況にあつて、「高齢社会」の実情をつぶさに考察しよ
うとすると、上の「五つのステージ」ではうまく把握できない。

なぜか。このE・エリクソン以来の発達心理学による分類は、五つのうち三つまでが二〇歳
代までの「青少年期」に当てられていて、「成長型の社会」を反映している。

そのために「高齢社会」、つまり「成熟型の社会」の把握には、適当ではない。ジェロントロ
ジー（加齢学、訳し方はいろいろ）の観点から高年齢層に配慮した別途の「長寿時代のライフ
サイクル」が要り用なのだ。それが「人生九〇年時代」への意識変革をもたらし、暮らしやす
い新たなステージを創出する契機となる。

本稿がここで提案する新たなライフサイクルは、「青少年期」「中年期」を過ぎおえて「高年期」にある人びとに手厚く、納得されるものでなければならぬ。

青少年期 ○歳～二四歳 自己形成期

バトンゾーン 二五～二九歳 選択期

中年期 三〇～五四歳 労働参加・社会参加期

パラレルゾーン 五五～五九歳 高年準備期・自立期

高年期 六〇～八四歳 地域参加・自己実現期

高年前期 六〇～七四歳

高年後期 七五～八四歳

長命期 八五歳～ ケア・尊厳期

(自立・参加・ケア・自己実現・尊厳の五つは国連が提唱する「高齢者五原則」)

このあたりが、高齢者が納得できる「長寿時代のライフサイクル」といえるだろう。

ここでは学問的にうんぬんするつもりはなく、みなさんに生活の実感として納得していただければいい。単なる老年期ではなく、高齢期として配慮した位置づけが、実人生を実りあるものにする第一の秘策なのである。

「青少年期」「中年期」「高年期」という三つの二五年期が中心に据えられていることがおわかりいただけるだろう。

「バトンゾーン」(二五〜二九歳)というのは、個人のライフ・スタイルによって生じる幅であり、青少年期にいれるか、モラトリアム期として過ごすかは個人が選択すればいい。

「パラレルゾーン」(五五〜五九歳)というのは、「パラレル・ライフ」(ふたつの人生)期にあるということ、**「高年準備期」**である。窓際族といわれてヒマつぶしている時期ではない。

これから迎える二五年の「高年期」を前にして、自分らしく生きる自己目標の発見のための模索(自立)期であり、けっこう多忙なはずである。定年延長の替わりに給料を減らされ、心躍るしごともなくすぞすだけでは惜しい。「パラレル・ライフ」(ふたつの人生)をすごしながら、本稿をしつかり読み砕いて、わがシニア人生に悔いなしの準備をして迎えてほしい。

「定年後は余生」などと考える旧時代の「老成」タイプの「支えられる高齢者」意識がわが国の「高齢社会」形成に自然渋滞をもたらしている。「高年期」での地域参加・自己実現の二五年をどう体現して暮らすかの工夫が人生の差をつくることになるからだ。

わが国の実情をよく観察した上で本稿が採用した「長寿時代のライフサイクル」は、成長期のそれとは逆に六〇歳以上の「高年期」を三つの時期にわけている。高年前期(六〇〜七四歳)、高年後期(七五〜八四歳)、そして長命期(八五歳以上)がそれで、みなさんは年齢とは関わりなしにご自分の高齢期人生をおよそ三分して、それぞれを有効に過ごすこと。この表は標準だ

から個人的に自在に案分して、いま自分が人生のどんな時期にあるかに実感が持てればいい。ご自分なりのライフ・サイクルをつくること。それがこの表の意味なのだから。

先ごろ七五歳以上の「後期高齢者」の医療費支払いが話題になった。七五歳で階層を刻むことの意味が問われたが、七五歳で截然と変わるわけではないが、フレイル期（筋肉が衰え活力に自在性が失われる段階）を迎えて、からだの機能のどこかで「有訴」がはじまる時期であることには注意する必要がある。同年の著名人や友人の他界の報に接するものこのころからである。本稿の「長寿時代のライフサイクル」の特徴は、「長命期」（八五歳〜）を設けていることにある。「高年期（前期・後期）」（六〇〜八四歳）の二五年のあとの「長命期」が、八五歳〜という刻みについて、女性の側から異議をとねえる人があるかもしれない。長命期は、「男性長命期」八五歳〜、「女性長命期」九〇歳〜、と分けたほうが現実的かもしれないが、ここでは「平均寿命」（女性）が八六歳であるという現実に留意している。まずはご自分の人生と重ねあわせていただきたい。とくに男性はここを越えれば長命のうちである。

「賀寿期五歳層」のハステージ

* 同年配の仲間と「賀寿期」を過ごす

先人は見定めえない人生の前方に次々に賀寿を設けて、個人的長寿のプロセスを祝福してき

た。いまも「何何先生の喜寿の会」「おばあちやまの米寿の会」としてそれぞれに祝われている。しかし長寿時代になって多くの同年配の仲間とともにお互い励まし合いながら「百寿期」を目ざすのもいいではないか。

ただ漠然として「余生」を過ごすのと、この「賀寿期五歳層」の八ステージを基準にして「長寿時代」を過ごすのでは、人生に雲泥の差が生じるだろう。これが第二の秘策である。

| | |
|--------------|-------------|
| 還暦期（六〇歳〜六九歳） | 昭和二九年〜昭和二〇年 |
| 古希期（七〇歳〜七四歳） | 昭和一九年〜昭和一五年 |
| 喜寿期（七五歳〜七九歳） | 昭和一四年〜昭和一〇年 |
| 傘寿期（八〇歳〜八四歳） | 昭和九年〜昭和五年 |
| 米寿期（八五歳〜八九歳） | 昭和四年〜大正一四年 |
| 卒寿期（九〇歳〜九四歳） | 大正一三年〜大正九年 |
| 白寿期（九五歳〜九九歳） | 大正八年〜大正四年 |
| 百寿期（一〇〇歳以上） | 大正三年以前 |

聖路加病院名誉院長の日野原重明博士が二〇一一年一〇月四日に百寿に達して話題になった。その翌年に現役映画監督の新藤兼人さんが到達した。新藤さんは到達してすぐ亡くなったが、

百歳到達は前向きな人生の目標として実感をもたれるところまできている。

前項の表の六〇（六五）歳から一〇〇歳までの間を「五歳層八段階」に分けて、その年齢層一つひとつを迎えて過ごす。

「還暦期」から「百寿期」まで八層の一つひとつを、お仲間とともに迎えて過ごしてゆくことになる。残念ながらその経緯のなかで、「ちょっと、お先に失礼」といって途中下車する仲間を見送らねばならないが。

何人かにすぎないが、ここにご紹介できるのは楽しい。

「卒寿期」（卒寿は九〇歳）には久米明・陳舜臣・村山富市・京マチ子・鈴木登紀子さんら

「傘寿期」（傘寿は八〇歳）には山崎正和・堀田力・田原総一朗・大内順子・米倉斉加年さんら

「古希期」（古希は七〇歳）には田中真紀子・小椋佳・山本寛斉・高橋英樹・片岡仁左衛門・中

村吉右衛門・久米宏・舟木一夫さんら。

みなさんがそれぞれの「賀寿期」に到達する。

ご覧のように、それぞれのお歳でそれぞれのお立場で「現役長生」の日々をすごしておられる。七〇歳の「古希」になったからといって老成することはない。やっとな「第二賀寿期」に達したところ。まだまだ先がある。

お仲間といっしょに人生の新たな出会いを楽しむ日々が待っているのである。

「体・志・行」の三カテゴリー

* 雑事をいとわなことが長寿のもと

家人がだれもない時にでも、そつと三面鏡を開いて裸形の自分を映してみよう。

まぎれようもない自分の「からだ」が眼の前にある。上半身・下半身とながめて、「まあ、いか」と納得するのが「こころ」の動きである。そして男性なら腹部に、女性なら胸部に手をやるのが自然な「ふるまい」である。

この「からだ」体」と「こころ・こころざし」心・志」と「ふるまい」行」という三つが人間（人生）としての同時存在であり、この三つ以外に存在はないというのが、東洋の哲学が教える人間（人生）観なのである。

やや哲学ふうにいえば「体志行」三元論。西欧の「物心」にわけ、その発展として人間を理解する二元論ではない。ここはその場ではないのでそつと記しておくが、西欧の存在論・認識論による世界観・文明観の将来はあやうい。

三つの存在の意味合いが素直に納得できるのは、やはり半世紀を生きてきて、生体としての「からだ」のどこかに故障・症候（すすむと有訴・疾病へ）を生じたり、物忘れが重なって「こころ」（すすむと認知症へ）に違和感が生じたり、「ふるまい」が不自由（すすむと介護へ）になったり、といった自覚が現れる時期になってからのこと。

どこかに気づいたところから、「体・志・行」の三つに配慮した暮らしを始めても遅くはない。まずは「健康（からだ）」に留意し、「知識や夢（こころ・こころざし）」をたいせつにし、「技能（ふるまい）」はさびつかないようにして暮らすこと。この三つを常にバランスよく働かせることによって、「健康寿命」は延び、高齢期の実人生は先を見通せるものになる。

これが三つ目の秘策である。

「青少年期」「中年期」の六〇年間に積みあげてきた健康や知識や技術や有形・無形の資産には個人に差があり特徴がある。それらをバランスよく活かしながら個性的な「高齢期」を過ごしている人が、ここでの敬愛すべき「丈人」のみなさんである。

スポーツ界で「心・技・体」の順として認識されているのは、スポーツでは心の構えが技・体の差をつくるから。高齢期が「体・志・行」の順なのは、体が志・行を左右するからである。

からだ

体 健康 食べる・休息・健康体操・運動・有訴・・・疾病

こころ（ざし）

心・志 知識 しゃべる・考える・情報文化・歴史・・・認知症

ふるまい

行 技術 自分でする・歩く・芸能・芸術・スポーツ・・・介護

日々の暮らしの中でのこの三つのカテゴリーのバランスが「健康寿命」を延ばす秘策になる。

とくに長い間デスクワークに従事してきた知性派の男性は、思いのほか三つの要素のバランスを欠いていることに注意が必要である。思い当たる人は症状が出ないうちから足腰を鍛えること、三つそれぞれに心地良い負荷をかけて、「アンチ・エイジング」若づくり」に努める。雑事はいとわずに、さがしてでも担うのが何より三つの要素のバランスに効果がある。

「アンチ・エイジング」若づくり」には負荷を惜しまないこと。健康と体力の保持、心おどる夢・知識、外出して活動力を鍛えること。家事はもちろん炊事も洗濯もみんなよし、奥さまに任せずに、上手に共有して雑事をこなすこと。現役時代に身につけた役職意識や人づかいは、家でも外でも無用である。できれば「厨在丈人」として旬菜を使った料理（薬膳）を食卓に差し挟むようになれば、男女六歳の「平均寿命」の差はずっと縮まることになる。

その一 「非を飾る」世相を斬る

一 「好専門を出でず、悪事千里を行く」世相

「不幸な体験だっと思ってみたい」若者たち

*「喜寿」を迎えるのにTさんは喜べない

いまやちつとも希れではない「七十古希」をつつがなくすぎて、「喜寿」を迎えようとしているTさんは喜べない。

喜べない理由はふたつ。世相としてだからすべてではないが、世の中が高齢者に関心を持たなくなったこと、そしてとくに若者たちがオモシロクナイ話には耳を傾けなくなったこと。

Tさんは、若者の言動はワル乗りを越えていまや「非を飾る」域にあるという。

「非を飾る」とはどういうものをいうのですか。

「なまぬるい幸せなんか押しつけないでほしい。不幸な体験だっと思ってみたい」

「戦争の現場に出るなんて実感は人生の極みじゃないか」

「善意なんて何も生まれない。悪意が行動のエネルギー源なんだ」

「毎日遊んでるくせして、うるさいじいさんばあさんはいららない」

間を置きながら、Tさんは四つの若者のことばを並べた。

一回きりの人生だから不幸な体験もしてみたいという若者に幸せであることを願うことはできない。戦争を避けて平和を望むことも、善意から話すことも、そして先人として存在することすらできない。若者の「知」は時代を先回りして待つ。そして自分の耳に逆らうような「諫をふせぐ」ために使われる。人間が隠し持つ本性が露わになって、前の時代の意思を閉ざして、時代は転移するものなのか。

少年の日に自分が蒙った戦争中の惨禍や戦後の混乱。

それを繰り返してほしくない不幸な体験として若い人に伝えたい。それが無力であり無益であるときえ思うようになった。

「金輪際、わたしは関わりませんけれど」

しかし、Tさん。ちよつと待ってください。

Tさんがいうように、このところ、高齢者はたしかに軽視・無視されていて、実人生では「アベノミクス好況」からもなんの恩恵も受けていません。「較差」ではなく「格差」が広がっていることにも気づいています。しかし四人にひとりにも増えた高齢者の存在は、この国の史上初めてのことであって、保持している膨大な潜在力は残されています。

これを發揮して新たにつくる「成長＋成熟社会」は、新次元の事業にはなりませんか・・・
「・・・もう一〇年は遅いような気がします」

と、まっ白くなり、薄くなった髪を撫であげながら、Tさんは真顔になって言って黙り込む。安保世代で社会参加に柔軟なTさん呼び戻す方策を練り上げねばならない。

「好事門を出でず、悪事千里を行く」世相

*強い荒廃菌が弱い善玉菌を食う

Tさんの目の前のテレビ画面を、ある日の昼のニュースが流れる。

二〇一三年*月*日。

・南海トラフ巨大地震 ・銀行暴力団融資 ・後見人財産詐取 ・有名ホテル食材偽装
・部品回収 ・送り付け商品 ・公衆トイレ損壊 ・赤ちゃん放置 ・殺人死体遺棄 ・・

これですべて。こんなニュースなら見ないほうがいい、とわたしたちならそうもできるが、若者たちは避けるわけにいかない。

若者たちの「非を飾る」声に対するTさんの四つの反応は、善意からの先端的理解である。

「好事門を出でず、悪事千里を行く」(『北夢瑠言』から) という世相。

「悪玉菌」は住みやすい場を求めて、IT機器に乗って、「千里瞬時」にやってくるのである。それを示すのが「荒廃菌」をもったことばのスクランブル。

Tさんが夕刊紙や週刊雑誌の類から拾った「荒廃菌」見出し語はページから溢れるほどある。

その中から、ここでは四く五行分だけ並べてみよう。斜めに通過してください。

狂気 抗争 挑発 怒号 罵声 悲惨 惨劇 醜悪 墮落 嫌悪 悪意 破壊 地獄 逆襲
不法 非道 欺瞞 汚辱 凄絶 悪徳 横領 餓鬼 殺人鬼 修羅場 非常識 犬畜生
羊頭狗肉 魍魎魍魎 暴く ぶっ壊す 騙す 淫ら 潰し 酷い 大嫌い スッパ抜き
いじめ ハレンチ アホ バカ クビ ウソ ワースト ハルマゲドン・・。

新聞に毎週載る週刊誌の広告をみていただければおわかりのように、これでもかというように右のような見出しが散りばめられている。

「巷の関心がシラジらしい善意よりドスグロい悪意にありますから」

というので、夕刊タブロイド紙や週刊誌記者たちは、競って悪意、悲惨、狂気、ハレンチ、エロに満ちたニュースを追いかけてきた。そして話題が話題を呼んで、日夜、途切れることはない。いまや向こうからやってくる。

売れるが勝ちの週刊誌は、毎号毎号、悪逆非道な人物を探し出しては暴きつづけてきた。

強い「流行性荒廃菌」に対しては、より強い免疫抗体が要る。それを体内に形成するためには極悪情報を送りつづける。「負の公益」だとしても、長いあいだ善意を信じて暮らしてきたＴさんのような高齢者には、もはや理解できにくい領域にある。若者たちの胸のなかを、弱い「善玉菌」を食い散らしながら、右のような「荒廃菌」がうようよ泳いでいるのである。

二 かあさんは許さない

かあさんは許さない

*「歴史悲劇」再演のプロローグ

Aさんは、関東大震災があった大正一二年（一九二三年）一二月の生まれ。

「卒寿九〇歳」をむかえた昨年の終戦記念日、長女といっしょに地下鉄に乗り、九段下から坂を登って、しっかりと歩いて日本武道館での「全国戦没者追悼式」に参加した。先の戦争で次兄と夫を失ったAさんには、天皇陛下のおことば、「ここに歴史を顧み、戦争の惨禍が再び繰り返されないことを切に願ひ・・・」に実感があつたという。次兄と夫のふたりは英霊として靖国神社に祀られているが、しかしA級戦犯を同時に祀っている靖国神社へはAさんは参詣しない。昭和天皇と同じ立場に納得がいくからだ。

小学生だった長兄は震災の日に学校へいったまま行方知れずになった。かつて「天災人禍」に遭遇した両親が直面していたとよく似たシーンにいま自分が立ち会っているのではないかと感じている。進み出したら引き戻せない「戦争という惨禍へのプロセス」をたどることになる気配。いずれの日にか唐突に起きる戦争へむかう予兆。

「歴史は学ばない者によって繰り返す、学んだ者によって繰り返す」

教師だった父から繰り返し聞き、戦争で死んだ次兄からも聞いたことばである。

今とよく似た世相があった。昭和のはじめのころのことである。もちろん多くは後で知ったことだが、子どものころの記憶が重なってよみがえる。

震災からの復興がつづくなかで、世界恐慌があつてそのあと不況に。失業が街を覆い、閉塞感が隅々にわたかまる。政党政治への絶望がいわれ、国家改造（昭和維新）へと青年が動く。独断で関東軍が「満州事変」を起こし、巷に熱狂型の世論がささくれ立つなかで、挙国一致の軍国化がすすみ、国際的孤立が拍手で迎えられる。リフレ金融緩和（財閥の救済）。情報の統制、売れるが勝ちのマスコミ、そしてエロ・ナンセンス。

Aさんはそんな時期に四人の子どもの末っ子の長女として育った。両親は明るい将来を約束できなかっただろうが、暗い家庭ではなかったと記憶している。子どものころは「童謡」だったが、そのうち兄たちといっしょに「軍歌」を歌い、戦争ごっこに混じって遊んだ。

子どもたち（小国民）の意識と暮らしの振り子が、家庭（童謡）から国家（軍歌）へと大きく振れていく。雪の二・二六。そして国家総動員へ。空襲、疎開。そして敗戦。

先の戦争の「敗戦と惨禍」の代償として得た「平和」の時期を六九年、一年また一年、必死にすごしてきて、次の戦争への予兆を感じるAさん。

現役である六五歳以下の国民は、平和を当然のこととしてきたから感じていない。いつかと同じ道に思える。

衣装を替えた登場人物たちによって「歴史悲劇」の再演ということになるのではないか。

いままさに日本発の恐慌すらありうる不安。総不況と閉塞感、財政難、デフレ脱却の金融緩和による格差の拡大。軍国化と国防軍。「尖閣問題」と国際的孤立の気配。そして「歴史から正しく学ぶ」想像力が感じられない政治リーダー。拙速の「特定秘密保護法」の成立、「集団的自衛権」の閣議決定。ペーパーからデジタルへのマスコミ情報の混乱、国家や軍国化に抗する言論への圧迫。絶叫型の世論、大衆受けする映像（テレビ番組）、エロ・ナンセンス。

両親が直面していたとよく似たシーンに立ち会っているのではないか。一つひとつのことよりも、世相としての不安のありようの類似性。いずれはだれも回避する術を持ちえなくなつて、不幸な結末を負うことになるのは、何も知らない将来の子どもたち。

Aさんが「歴史から正しく学ぶ」というのは、国際的に孤立（とくに近隣諸国）しないこと、国防を国防軍に頼らない意識の醸成、冷静な世論をつくること、そして何よりも国民に格差をつくらないことだという。現政権はそのどれにも反していて、納得がいかないという。

それでも安倍総理は女性の登用によって内閣支持率を上げている。

「でも、かあさんは許さない」

Aさんは長女に言い聞かせるようにいった。

日本政府の政策不在によって、人生に二度も放り出された友人のNさんの話をした。一度目は子どものころ、大陸で「みずから生きよ」として放り出され、二度目は介護も受けず一人暮

らしのまま、「みすから生きよ」として放り出されている。

「でもいいのよ、わたしもNさんも口ずさむ大好きな童謡がいっぱいある」

AさんとNさんを慰め、支えているのは、将来が安心できる国の政策ではなく、母親から学んだ童謡なのである。

昭和天皇の平和主義のお立場では、兵を送る場合には常に「有征無戦」（征有れども戦うことなし）を前提にして裁下されたにちがいない、とAさんは思う。戦場へ兵を送っても双方に犠牲者が出ないよう作戦をおこなうことが「有征無戦」である。大義によって立つ討伐であれば、戦闘をおこなわなくとも制圧して勝利を得ることができるというもの。

中国の皇帝は臣下からの上書を受けて、「有征無戦」を旨として正義の兵を送るのである。戦わずして勝つには、兵士もまた和平を願う「有志之士」でなければならぬ。

平和主義の「憲法」を持つ国からの軍隊として送られ、イラクの“戦場”で一兵も損うことなく任務を遂行した「日本国の自衛隊」。その稀有な国際的イメージを変容させる「集団的自衛権」についての「閣議決定」がなされた。平和への手段を語らず、戦場協力による抑止力をいふ内閣の決定は、国民にも国際的にも容れるところとはならないだろう。「集団的自衛権」での武器使用、派兵がすすむことになる。

「でも、かあさんは許さない」

もう一度、今度は自分に言い聞かせるようにAさんはいった。

「良妻賢母」に育てられて

*大正生まれの母たちに感謝

日本では「良妻賢母」だが、中国では「賢妻良母」という。

これは語順の違いというばかりでなく、両国の女性観や女性の果たした役割の違いがこめられている四字熟語なのである。日本の場合は、明治維新のあと、西洋留学から帰った啓蒙家が女子教育の指針とした。「富国強兵」で働く男子を支えて内助に努めて「良妻」となり、子女を薫育して「賢母」となるという目標が定着した。初代の文部大臣森有礼は、「良妻賢母教育」こそ国是とすべきといている。

中国の場合は、日本に留学した康有為や梁啓超が「賢母良妻」教育として移入したのだが定着しなかった。男女がともに家を出て働き、ともに子育てをし、平等の社会的役割を果たした革命中国では、自意識を持つ「賢妻」であり優しい「良母」であることが新しい女性像として志向された。

語順は違っても両国ともに近代化のために「賢良な妻と母」を必要としたことは確かである。

日本の男性は「忠君愛国」で育てられ、女性は「良妻賢母」に育てられ、男性は戦場に赴き、女性は銃後を守った。Aさんは兄を失い、夫を失い、家を失った末に与えられた「平和」の中

で、新たな希望を託して子育てをし、戦争をしない国を支えてきた。

育ててくれた亡き父母の恩を思う「哀哀父母」（哀哀たる父母、『詩経「小雅」』）ということばが古くから言い継がれてきた。みずからがその労苦を知るころには父母はすでにいなかった。

ところがいま史上にまれな長寿時代。一人暮らしの女性の多くは、戦後の「平和」と「家族」を守ってくれた大正生まれの母たちである。生きているうちに親孝行が可能となった。

そこで「哀哀父母」ではなく「愛愛父母」ということになる。生きているうちに恩返ししようという明快さが「愛愛」にある。ことし年初の『日経新聞「日経プラスワン」』が、二〇一四年の目標や決意をあらわす「四字熟語」を募集する企画を立てた。その「人間関係」編に寄せられた応募作のなかから「傑作」として選ばれたもの。哀哀から愛愛への展開もよく、語感もよく、何より世相をとらえてユニークである。現代新語として用いたい。

「若年化・女性化・IT化」が優先

*時流（グローバル化）と潮流（高齢化）のはざま

時流と潮流。

世相をよくみると、たしかにこのふたつの大きな流れが重なって新世紀の時代をつくっている。ひとつはアジア唯一の経済先進国としての時流であり、もうひとつは世界の高齢化という

潮流の先行国としての対応である。この時流と潮流のふたつの課題を持ち越して世紀をまたいだ日本だったが、この一〇年余りの際立った変容といえば、時流対応の「若年化」と「女性化」と「IT化」のほうだった。

だからパソコンとケイタイを駆使する若い孫娘は、いつしか「わたしが主役！」として振る舞うようになり、「世の中ますます粗悪になる」とグチりつづけて何もしない祖父を脇役とみるようになった。すぐれた高齢者であるTさんのような人でさえも、家庭内では孫娘から軽くあしらわれているのである。

激しい時流への対応が優先するのはしかたがない。それは身近なところでは、家庭内の日用品の「途上国産化」と、企業内の「非正規社員の増加」によって実感されている。わが国よりひと足ふた足遅れて成長期にはいったアジア途上諸国と付き合うためのいたしかたない「日本途上国化」なのである。高齢者は、これはいつか来た道として理解して、アジアの民衆が同じような豊かさを共有するための時流として納得して対応している。

「グローバリゼーション（地球規模化）」。

グローバル化には違いないが、前世紀末にはじまった超大国アメリカと途上諸国が中心の経済の「グローバル化」である。ソビエト崩壊後の東西ドイツ統合をはじめとする地域内の混乱の收拾に手間どったECと異なっていて、わが国は静かな世紀末を経緯したものの、途上国対応の経済はきしみながら新世紀へと舞台は回った。そして「BRICS」（ブラジル・ロシア・イン

ド・中国、南アフリカ）をはじめとする途上諸国の台頭という時流にさらされている。

それに覆われてしまったから、もう一方の国際的潮流である「高齢化」は波がしらせ見えなくなってしまうている。見えないけれども新世紀の国際的課題として底流しており、日本の対応は先行国として各国に注目されているのである。

「先進国型の高齢化社会」を迎えるはずが、「途上国型の若年化社会」に出くわしたのだから、日本の高齢者は二重の災難に見舞われることになった。

政府の「高齢社会対策」の遅延が一〇年余りつづいており、対策を講じないうちに、わが国の高齢者（六五歳以上）は、三〇〇〇万人を越え、四人にひとりになっている。ほんとうは若年者・女性とともに、高齢者もまた日本社会で、シルバーのように渋く、プラチナのように不変に輝いていなければならない時期を迎えているはずであるが、そうならない。

三 中堅社員の高齢者批判

家計黒字の一四〇〇兆円って何だ

*家計黒字が財政赤字を補てん

安定した国を支えているのは国家財政をあずかる「現役官僚」であると思ひ、当人

もそのつもりでしごとをしているからわかりやすいが、本当に支えているのは、国の骨組みを支えて安定した経営をしている企業であり、その企業を支えて事業をこなしながら安定した家計を営んでいる「中堅社員」である。一人ひとりにその自覚があるかどうかはともかく、実態としても総体としてもそうなのだ。

わが国はいま各企業内の「中堅社員」が、将来をめざして「よしやろう」とし、「IT青年」がそれに応じ、「女性」が新たに加わり、そして「高齢者」が知識と技能とで渋く輝いている姿でないとオールジャパンとして先へすすめない。

金融緩和という「前払い政策」で、「中堅社員」がしっかりと恩恵を受けたという声を聞かない。それでは「よしやろう」という意欲が湧くわけがない。金融緩和の後も「中堅社員」の側から「よしやろう」ではなく、「もう我慢できない」という悲鳴に近い声すら挙がっている。こんなことでは経済が上向くはずがないではないか。

ことあるごとに「成果主義」を強いられる。正社員が減り、アルバイトと派遣社員が混在して同じ職場で同じしごとをする。しごと増なのに実質賃金の目減りがつづく。企業の生き残りも託されて、先輩から引き継いだ職責を黙々と担ってきた中堅層の人びとの胸の奥に、将来への不安がつのる。経営者への疑惑がわだかまる。高齢社員の萎える気分もわかる。同僚の間でも同業者との間でも、親和の感性が少しずつ磨り減って働かなくなる。

安定した気分を保とうとするのだが、それとは裏腹にいらだちに近い感情が自分にも社内に

も強くなっていく。企業の生き残りのために身を挺することを余儀なくされている「中堅社員」のしごとへの覇気が薄れる。退職社友には理解できないほどに職場環境は悪化している。ついには「もう我慢できない」「もう待てない」という声が挙がることになった。

異次元の「金融緩和」という前払いショック政策によって、企業や株主は潤ったが、新事業を企画して景気回復のために働くのは「中堅社員」である。企業の内部留保分からそこにどれほどの前払い配分があったのか。

「よしやろう」ではなく「もう我慢できない」とは何としたことか。

しごとをしないで得をしている「事半功倍」の人がどこかにいて、しごとをしてもプラスにならない「事倍功半」の自分たちがいる。この不公平感が先に立つ。若い者が不安定なしごとでも最低賃金でも働かねばならないのに、生活保護で安定を得ている者がいる。

「ナマ保（生活保護）で家族四〇万だってさ」なんていう話まで耳にする。

そのうえ四人にひとりの「高齢者」はいったい何なんだ。

現役世代がムリして負担している年金を受け取りながら、ウォーキングをし、スポーツジムに通い、旅行をし、レストランで会食し、次の時代に「われ関わり知らず」として暮らしているのではないか。

何より不公平なのは、資産として留保して手つかずという約一四〇〇兆円という「家計黒字」である。バブル以来、親世代がしこしこため込んだ平均で約二二〇〇万円という貯蓄につい

てである。それをそっとしておいて「年金暮らしです」という気楽さについてである。

自分の親にはそんな資産はないことを知ってはいるが、どこかに平均以上の貯蓄を「塩漬け」にしながらかきこもりの余生を送っている高齢者がいると思うだけで「中堅社員」の心は冷えて、不満は溶けていかない。時代の推移と連動しながら人も動くしカネも動く欧米と異なつて、株式や事業出資金にまわるものが日本では現金・預金のままで動いていない。

「資産の塩づけ」である。

年金で暮らして「資産の塩づけ」というのはいったい何なんだ。

顔見知りの先輩たちに対する功労者としての敬意とない混ぜになつて「中堅社員」の胸の内を右往左往していたらだちは、「高齢者資産」についてふたつの意見に集約されることになつた。まずは同じ「将来不安」をかかえながらの「資産」の差である。

同じ将来への不安をかかえているが、高齢者は「資産の塩づけ」をして年金で余生をおくる。一方、企業を支えて働いている「中堅社員」は、不安のまま放っておかれている。

高齢者側の言い分は、この先どこまでか分からぬ長い老後生活の不安を解消するためには、底まで知れている資産を「塩づけ」といわれても抱えこんでおくしかない。

一人ひとりとは小額でも、増えつづける高齢者とともに増えつづけて、それが総体として経済活動の効率を悪くし、企業活動の手足を縛っているのではないかというのが、「中堅社員」側からの「高齢者資産塩づけ」批判である。

簡単に移譲できない「高齢者資産」

*世代間に亀裂がひろがる

ただし国の財政をあずかる「現役官僚」の理解は少し違う。

一四〇〇兆円といわれる「高齢者資産」は超一〇〇兆円の財政赤字を補てんするため安定した黒字財源としては動かないほうがいい。動いて減ってしまったては困るからである。

いずれ二〇年もすれば一世代一過性のもとして、相続税とともに解消されることになる。声には出さないが、それは自分たち世代の高齢期の安定財源となっている。同世代の企業内の一人ひとりの「中堅社員」にもわかってほしいというのが、国を支える側の「財務官僚」のひそかな戦略としての理解である。

もとはといえば、この一〇年余り「安心して暮らせる高齢社会」に対する国の構想が欠けていたからだと本稿は見定めてきた。

将来が安心できる「高齢社会ブランドデザイン」が掲げられていて、具体的な構想として納得できれば、そこに出資・出費すべきものだったのだが、国の構想がないゆえに活用する機会を失ってきた貯蓄なのである。だから「使うべき時と使うべき所に使えなかった資産」として、老後不安の支えとして積み重なってきたものだ。それは高齢者なら実感として理解がいくこと

なのである。

定年後の高齢者側の言い分は、企業内では「グローバル化」対応といって、若手にしごとを集中させ脇役を余儀なくさせておいて、定年後には老後資金をねらうのか。現役は自分たちの力でやりぬいてくれないと困るではないか、となる。

企業を支えている「中堅社員」の側からはもうひとつ、「高齢者資産移譲」の要請が力を増すことになる。使わない高齢者から使い手へ資産をトランスファー（移譲）すべきではないのかというもの。これは新しい財界をつくる勢いの若手オーナーたちの持論でもある。

いくら景気回復でもがいても、いっこうに進まない要因が、高齢者層の支援の欠如にあるというもの。使わないし使えないのなら、必要としている若手実業家に資金を動かすべきだというものである。この要請は想定外の金融緩和があつて、勢いはややおさまったが。

先ごろ個人のレベルでだが、「教育資金贈与」として一五〇〇万円までの非課税措置が決まった。そのときには「愛情口座」といわれて、若い母親たちの関心を呼んだ。高齢者がため込んだ資産を孫のために動かそうという官僚の側からの「高齢者資産」ヒツペガシ策である。

孫の学問支援のために、すでになけなしの福沢諭吉幣を精いっぱい工面している立場からは、一五〇〇万円は実感がなく、不愉快である。そんなことでは「高齢者資産」は動かない。ところで「引きこもり」は、引退高齢者だけのものではない。企業内でも起こっている。

優れたIT青年たちが技術開発の戦場で、使い捨てにされて社会と断絶している。若い女性

もアルバイトや派遣社員なのに荷重な実務を引き受けて体調を崩し、嵩じてはうつ病に陥って外界との関係を遮断していく。どちらも繊細な感性の持ち主ほど傷ついている。みなさんの周りにもふたり三人と居るに違いない。

この傾向は正社員にも広がっていて、即戦力を期待されて入社したものの、適性と将来に不安をつのらせた「新入社員のニート化」が少なからずあるという。Fさんの息子もその一人。

そんな不安定状況に包囲されている中堅社員は、気づかないうちに「自己チュー」（自己中心主義）に陥ってしまう。これ以上すすむと企業の骨格が崩れてしまいかねない。

「高齢者になればわかるが、そう簡単に移譲などできるものではない」

と、後輩の苦しい立場に同情しながらも、高齢者になって年金支給にありついたらばかりの「団塊の世代」の人びとからは、後輩の甘えへの不快感を隠さない批判があがる。

世代間に亀裂が広がる。

これ以上に亀裂が広がらないために、本稿は双方の不安解消のための提言をしているのである。中年世代に安心感を与えるためには、高齢者が資産ばかりか知識や技術を駆使して、次世代が高齢者になったときにも憩える場所やしきみをつくること。これは「高齢者資産」を減らすのではなく増やすことになる。若い世代も関心をもてる「長寿社会」の姿を示すこと。

「自分がその木蔭で憩うことのない木を植える」（W・リップマン）

という後人を思う姿勢を高齢者みんなで示すことだ。

「中堅社員」のみなさんは、これから本稿が論じる「高齢世代によるみんなのための社会づくり」に期待して、先輩の果敢な挑戦を見守るのがいいと思う。得られる経済的な波及効果は、将来にわたって大きいし、その成果はいずれは次世代のあなた方の資産となるのだから。

四 「貯蓄ゼロの日」へのカウントダウン

「急流勇退」の引きこもり人生

*「いさぎよい隠退」はかつて功いまは罪

先ごろアニメ映画の総帥であるスタジオジブリの宮崎駿監督が引退表明をしたが、ああいう引退のしかたを「急流勇退」という。まだしごとができる現役のうちに惜しまれて引退する。プロ野球の松井秀樹にもそういうところがみられたが、なかなかできないことなのである。

かつては敬愛する先輩のそういう「いさぎよい進退」が、後輩に感動と活動の場を与え、将来への安心と励ましを与えてきた。企業や組織の「高齢者リストラ」が始まったころにはさらに、優れた知識、経験そして人格をもった人びとが、会社や後輩のために定年を持たずに潔く職場を去っていった。つい最近までのこと。後輩としてはだれもがそういう君子然として身を引いて「引きこもり」の人生にはいった先輩の姿を思い浮かべることができるだろう。

「君子は進み難くして退き易し。小人はこれに反す」

という。力のある人は潔く進退するが、凡人はそうはいかない。さしたるしごとがなくとも定年まで務める。そのうえありがたいことに、年金が始まる六五歳まで定年がゴムひものように延びてつながってくれたのである。企業の業績によるのではなく福祉対策としてである。

一方で現役世代は、しごとが増えているのに減収を余儀なくされている。

そこで、アフター5の街談巷議の場では、われわれが負担している年金を受け取りながら、多くの高齢者は「われ関わり知らず」として「引きこもり」の暮らしをしているのではないかと、という不満が、ビールを呑んでは吐き出される。定年間際の高年社員のしごとなしの高給と退職金にも不満が及ぶ。

しかしこれも個人のせいというよりは時代の経緯のせいである。引退後の「余生」があまりにも長すぎる。人生の終末までの長い無為徒食が不公平なのである。先輩を功労者として敬愛はしたいが、それは「余生」が短く、高齢者が少なく、熟練期の仕事を残してくれたころのこと。いまや高給社員はしごとなしのまま過ごして退職金とともに消えていく。

それでは困るのである。早期退社して退職金と年金で何もしないで長生きするのは美談でもない。会社で培った能力を活かして延びた定年までの間に新たなしごとをつくって、企業年金分くらいは稼いでから去ってほしいのである。しごとまみれの若手としては、しごとなしで四半世紀を「余生」として過ごす高齢者がうらやましいというより忌々しい。そこから

敬意なんか湧くわけがない。

ここでは典型的な引退事例として、六五歳をすぎし終えた高齢者の三様の暮らしぶりを見てみよう。だれもが安泰どころか、それぞれに高齢期の課題をかかえているのである。

まずは「急流引退」をしたあと、「われ関わり知らず」をよしとして「引きこもり」の人生を送るDさんの暮らしぶりから。

「一陽来福」型の高齢者Dさん

*「隠退ウーピース」(豊かな高齢者層)として

Dさんは、背が低いし、君子然としてあたりを払うような風采ではないが、聡明さだけは疑えない広い額に細い目で、とくに笑い顔が安心感を与える温和な人である。

超一流とはいえないがだれもが知っている並一流の企業を六〇歳定年まであと二年を残して早期勇退してのち、家庭人として静かに暮らしてきた。

「古希」を迎えて急に体力の衰えを実感してからは、これからは「老人」と率直に認めることにした。新聞社の調べでは七〇歳からを「お年寄り」と思う人が半数以上という。自分でもそう思う。男性の平均寿命である八〇歳までは一〇年だが、あと一〇年とは思いたくない。やや短い。そこで余命の八五歳までとして、あれこれ身近に楽しんで過ごせばという人生計算を

立っている。典型的な「君子的引きこもり」のひとりである。

自分では幸せな「隠退ウーピーズ」（豊かな高齢者層）だと思っている。

会社人間だったから地域に知り人はいないが、学友や同僚があちこちにいるし、それにつかず離れずに暮らす妻と娘の家族。何よりも額に汗して旬の食材を得る「自営菜園」が自慢である。住宅ローンがなく菜園ができる土地を残してくれた岳父に感謝している。

肝心の生活費はどうか。

細目までは知れないが、公的・私的年金のほかに資産収入もあって、近居している娘や孫の支援、病気や不慮のできごと、車の買い換えや築二〇年を越えた住宅・設備の修繕（これがけっこう費用がかかる）、そしてふたりの葬儀費用まで含めて、「生涯準備金」（預金と国債・株式が半々）はいままでのところ崩していない。それでも小遣いは月八万円以上。この以上というところに余裕がある。ありえたかもしれない他の暮らし方と比較して、いまの「家庭人」としての暮らしに不服も不安もない。

ありがたいことにデフレで目減りしつづけていた資産が、金融緩和の株高で、老後の安定した豊かな暮らしを支える安全圏という四〇〇〇万円（高齢者の一六％という）に補充をえた。

正直に言えば、健康に不安はなくはない。だが、昨年六月、一一六歳で亡くなった世界一の長寿男性であった木村次郎右衛門さんが、郵便局員をつとめて退職した後は九〇歳まで農業をして長寿だったことから、「農作業ができる間は」と安心することになっている。

平均余命は、七〇歳の男性なら一五・一なので八五歳、同年齢の妻は一九・五なので八九歳。お互いに健康に留意しているからそれより長く、さらに男性の自分は八五歳の余命五・九を加えて九一歳、妻は五・八を加えて九五歳まで行ければと思っている。

「自分はムリかもしれないが、同い年の妻の方はクリアできると予感している。いっしょのころに終末という希望は持っていない。申し訳ないが、ほどの期間は妻の介護に期待している。」

岳父同様に住居と敷地のほかは資産を残すつもりはない。だから囲碁、釣り、ゴルフなど多彩な趣味を楽しみ、旅行でも観劇でも食事でも会合でも、学友や同僚から声がかかって可能なかぎり積極的に参加し、浪費もする。

同窓会の友人たちの名簿を見ると、死去がちらほら、半数近くには有訴の記載がある。だれその認知症や医療・介護の話をする耳にすると、ドック検査による健康状態も良好な自分が、めぐまれたひとりに思える。

日本経済、社会に関しては、下降へむかう時期にあると感じているが、Dさんは「われ関わり知らず」と固く決めている。だから後輩が知恵を借りにやってくるのにも、

「いまさら会社のために、わたしまで引き出すのはやめてくれよ」と、冗談としてではなくって態度を崩さない。

後輩からしごとに関する声がかからなくなり、七〇歳を過ぎて、みずからも体力の衰えを実

感ずる日はさみしい。知人の思わぬ訃報に接すると、テレビも見ず、新聞も読まず、終日、気分が晴れないこともある。

独居を愉しむ「君子的引きこもり」の境地にはなお遠いことは感じている。

「ウーピーズ」（豊かな高齢者層）などと自得したところで、父祖伝来の土地の一部を切り売りして、億単位の資産を得て安全圏にいる都市近郊の「金満農家」とは違う。たかが「一園農家」にすぎないから、経済のデフレからの脱却によって頼みの資産が少しでも確保されるのは個人的に歓迎である。

Dさんは明日もまたいい日であるようにと日また一日をていねいに迎えて過ごす「一陽来復」型の高齢者。だが、御用学者と財務官僚がさまざまな手法で高齢者の資産を切り崩す政策を取り始めたのが気にくわれない。官僚のそんなやり口には、不満顔が似合わないDさんも、

「後人としてあるまじき行為！」

として不満を隠さない。

といって、「引きこもり」に徹した生き方を変えるつもりはなく、思いのほか早々とやってきた「高齢じり貧人生」とつきあう覚悟だけは固めている。

せめてDさんくらいは生涯を安穩に過ごしてほしいのだが、このままの状況で推移するとすれば、自分は安全圏と考えている人が生涯を安穩に過ごしきれるかどうか。ましてや「現役六五年」をすごし終えて、平均的平凡をよしとして過ごしてきた高齢者が、将来も日々平安に過

ごせるとはともいえない。

「先憂後楽」型の高齢者Iさん

*「ほどほどの赤字人生」が男の美学

Iさんは、このままだとかなりきびしい高齢期を送らざるをえないことになる。

父親の後を継いで中小企業の経営者になった「生涯現役の跡継ぎ二世」である。二〇年ほど前、平成になってすぐに四〇歳代なかばで二代目経営者となった。だから「定年」という区切りはない。

父親が元気だった高度成長・繁栄期といわれた時期もやたら忙しかっただけ。とりわけ家が豊かになったわけではなかった。周囲の人びとが世間並みに暮らせるようにと、父親がひたすら心を砕いているのをみてきた。

父親は経営者として教育（学歴）がなかったことを生涯の重い目と感じていたから、

「おまえは大学を出にゃいかん」

と口癖にいつて、家業の手伝いを強はず、子どもが高等教育を受けて意気揚々とした人生を送ることに期待しつづけた。晩年には「親孝行進学」で大学を出た息子が期待していたほどの人生を歩んでいないことを知ることとなったが。

「MADE IN JAPAN」の技術を尽くした質の良い日本製品。それを底辺でささえてきた実直な父親と労苦をとにもする社員に囲まれて育ち、いま二代目として跡目を継いでいる。見回せば、わが国の戦後の復興期からいわゆる高度成長期（一九五五〜七三年）のころに設立された中小企業では、Iさんのような跡継ぎ二世は決して少なくないはずである。

同じような経緯をもつ機械製造系列の子会社（親会社ではない。それでも海外進出して元気）から下請け品を求められれば、資金繰りをして設備投資を重ねて製品を納めてきた。見方によっては重ねてきた設備投資の借入金を返済するために働いてきたともいえる。

そして迎えた世紀末の「列島総不況」。堺屋太一さんの目配りによる命名で、Iさんのような小さな事業所も見落とすことなく網羅している。

その後、一〇年余り。人を減らしながら景気回復を待ちつづけてきたが、下請け（孫請け）に徹して生涯現役で亡くなった父親には申し訳ないが、ここ五年ほどの経緯からみて、もはや自力再生の手立てはないところに来た。かつてはそれほどの重さに思えなかった一〇〇〇万単位の借入金を返済する余力が出ない。負担が年々重くなる。

「生涯現役の跡継ぎ二世」のIさんが引き継いだ父親のもうひとつの遺産である草野球リーグ名門チーム「I」も、若者が減って紅白戦が成り立たなくなった。

「男というものは、きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字暮らしをするもんだ」

というのが、父親がよく口にし、自分も受け継いだIさんの負け惜しみ半分の人生哲学である。周辺の人より先に豊かになるというのが父親の「先憂後楽」の考え方である。親父はそれを愉しんで満足して、日また一日を働きづめで亡くなった。

製造ノウハウを持つ親会社は生き残るために、まずは主要なパーツ以外は中国や東南アジアの途上国に生産拠点をシフトした。ついには製品化までとなれば、子会社まではともかく孫請けは回復どころではない。「ほどほどの赤字人生」ともいっていられない。朝起きるたびに借金が増し、倒産の日が刻々と近づいてくるのを感じている。

独自でのしごとにもドがたたず、下がりがつづけた担保資産との見合いの末に、遠からず不良債権の処理対象として銀行から見放されるだろうが、こちらの意欲が萎えるまでは、会社と社員と家族を守るつもり。金融緩和で潤った銀行は、いまは二の足を踏んでいるが、それほど長い猶予期間があるとも思えない。

さしたるぜいたくもせず、父と同じ「先憂後楽」の心意気を貫いて、同じ境遇の「二世の星」（父の口ぐせ）たちを見上げながら、自分だけは沈没船の船長よろしく地獄へでもどこへでもゆくつもり。父の時代にゼロから始まって自分の時代にゼロに終わる会社人生を、Iさんは納得している。それはそれで昭和時代の一隅を生き「二代企業」の終始のつけ方として。

惜しいかな、Iさん。あなたは「先憂後楽」に徹してきたゆえに、「高齢社会」を多彩にし、豊かにする「高齢化用品」のユーザーでありメーカーであるという点でもまた後楽の人、つま

り新製品発想力がゼロの人なのではないですか。

「Iさんの会社が蓄積した技術力は、高齢社会が必要とする新製品には活かさないのですか」
「孫請けだったところではむしろかしいですね」

返答は明快である。高齢者の暮らしを豊かにする日用品のために技術を活かして、自力製品で活路を開くことができないものだろうか。そういう成功事例をあちこちで聞くが。

Iさんが父上以来の下請けの現場で、良質な製品の製造に努めて獲得した製品化の完璧主義を崩すことなく、なんとかして仲間と知恵を出し合って、先頭に立って中小企業の道を切り開いてほしいのだが。平成の三代目に「先憂後楽」の心意気を引き継げるような。

中小企業の熟練技術を駆使した「高齢化優良日用品」MADE IN JAPANの再登場の時期がそこまでできているように推察されるのである。

高齢熟練技術者の技術と経験と意欲が「高齢化新製品」の製造に活かされる。高齢者層の生活感性が満たされる。そうして湧くような内需で新たな経済活力が生まれる。

「戦々競々」型の高齢者Yさん

*「貯蓄ゼロの日」へのカウントダウン

給与所得者は、二〇一三年四月からの「改正高年齢者雇用安定法」の施行により、定年が六

五歳まで延びた。とはいえ経営トップはそのための新規起業に積極的には動かない。リスクを負わないことが経営トップの心得であるためだ。だから退職を前にした高齢社員は、新たな事業を考える場を与えられることもなく、業務替えになったり、収入減を余儀なくされながら「定年待ちの日々」を送ることになる。

多くのサラリーマンは、なんとか定年まで勤めて、行く末が不安な程度の退職金と年金を合わせ計算しながら、家族とどう暮らすかに思い悩むことになる。

改正安定法にかからずに定年退職したYさんは、技術島ひとすじに四〇年を会社勤めですごした。転職など考えたこともなかったし、退職後も前職をいかして仕事があればと願っているが、この高齢者リストラ時代。「ハローワーク」を覗いて登録はしてきたが、該当するしごとはない。失業率には計算されない潜在的求職者を思えば、失業率5%以下など信じられない。

Yさんは、少ない退職金から、住民税（これが大きい）を支払って急に重量感を失った貯蓄から、さっそく定期的収入が減った分への「貯蓄取り崩し」がはじまった。ほとんど病氣らしい病氣はせず健康だったから、給料天引きの健康保険料の負担は感じなかったが、年金からの健康保険料の支払いは大きい。

先行きの不安はすでに身边に渦を巻いている。

まずは財政負担を軽減するための「公的年金」のカット。実施された「消費税増税」。長年つれそってきた妻の持病とそれにちなむボランティア活動の出費。いつわが身に降りかかるかし

れない「医療費」の自己負担。今回は金融緩和で回避されたが、企業業績の不振による「企業年金」の減額。あと三年つづく住宅ローン。そしていつまでも独立できない子どもへの支援出費・・・。実は「ペイオフ」（預金の限度内払い戻し。一〇〇〇万円）に届かないほどの預金額だから、長生きすればいつかは必ず訪れるにちがいない「貯蓄ゼロの日」への不安。

「貯蓄ゼロの日」へのカウントダウン。

それはすでに始まっているのだ。

「薄氷を履む」ような日々がこれから長く続くことになる。Yさんは多数派である「戦々兢兢々」型の高齢者のひとりである。

退職したあとYさんは、

「選択的支出の削減に努めています」

という。旅行や観劇、書籍・雑誌の購入、外食などを減らしてそれでも生活用品の値上げや日常経費、医療費や税負担とくに際立つ健康保険料など「基礎的支出」が確実に増えることから、将来の家計の先行きはとめどなくきびしい。だから技術は活かせなくとも赤字を埋めるしごとをしたい。

「一私企業人でしたし、さして優れたことはしてこなかったかもしれないけれど、必死で働いてきたつもり自分までが、高齢者になって見捨てられることはないでしょう」

とYさんは国の将来と施策を楽観的に理解している。

長生きをすればいつかまたわが家に「スイトン時代」がやってくるかもしれないが、それでも平和なら生きられるだろうとYさんは思っている。

通信機器の優れた技術労働者であり、つい最近まで会社の主力製品になっていた機器の共同発案者。とあってYさんは、社員が発明対価（成果主義）を求めるのは違うと思ってきた。

「将来への希望はしごと現場の活力にある」と技術者であった経験からYさんは確信している。自分は細身だったのでヘルメットは似合わなかったが、NHKの人気シリーズ「プロジェクトX・挑戦者たち」で、仲間と工夫を重ねて事業に貢献した人びと、いかにもヘルメット姿が似合いそうな人びとの姿をみ、話を聞くのが楽しみだった。成果を自分のものとせず、みんなの協力の結果だという技術者がこの国を支えているという信念に今も変わりはない。番組はその後、個人の技能プロフェッショナルに転じた。

番組が終了してずいぶん経つ。というのに、Yさんの胸の奥に刻まれたように、気がつくといまも、中島みゆきが歌ったテーマ曲の一節、

「♪つばめよ、地上の星はいま何処にあるのだろう」

が体の中を繰り返し流れている。仲間との苦闘のあとを思いながら、溢れる涙をじっとこらえていた技術者たちの顔・顔・顔はいまも忘れられない。

その二 家庭内リストラは「MYチエア」から

一 「MY…」がないマイホーム

「マイホームパパとママ」Fさんの憂鬱

*アノヒトとかヒカラビてる人といわれて

戦後ッ子だったパパとママは、先輩に「マイホーム主義」とからかわれながらも、狭い団地の2DKに身を寄せ合って暮らし、必死に働いて、ふたりの子どもを育ててきたのだった。

夫婦と子どもふたりの家庭が都市型住民の典型となり、「核家族」と呼ばれ、「標準家庭」ともなった。「マイホーム」の誕生である。

「マイホーム」

なんともいえず響きのいいことばである。

耳にすると心安まる。これほどまでに安心感を内包しえたカタカナ語を他に探すのはむずかしい。昭和の日本語として残りつづけるにちがいない。

いま高齢者となっている人びとが、それぞれの人生をかけて、二〇世紀後半の五〇年の間にその内容をつくった日本語なのである。だからその細部の意味合いは個人によって異なる。

安眠できる場所。ひよわなもの、よき（良き、好き、善き）ものを守る城として、それまでの「わが家」や「家庭」などとともに、それに劣らない温もりを日本語として持つに至っている。そのぶんだけ「ホームレス」ということばがわびしさを伝える。

その後、職場までは遠くなくても、「マイホーム・パパとママ」は、二段ベッドの子どもたちにそれぞれ一部屋をと考えて、団地からさらに職場まで遠い郊外のプレハブ一戸建ての3LDKに引っ越した。そういうマイホーム体験をもつ人びとは少なくないだろう。それが「しあわせ家族」だったのである。

まだ若かったパパとママは、人生のはるか遠い地点までを見透かして、可能なかぎりの費用を工面してマイホームを獲得し、いまそのころ見据えていた地点近くに高齢者として立っている。長くもあり短くもあつた来し方を顧み、マイホームの当主としての存在感を確かめるために、じっくりわが家の中を見直してみる。

家族の希望をかなえることを優先して、そのぶんだけ自分の希望を抑えてきた。その結果、不相応な応接セットや家具といった家族共用品はあっても、みずから求めた専用品というのはいない。「モノと場」に表わされる当主の存在感が意外に希薄なのに気づく。

そこでここでは、ご夫婦と子どもふたりの核家族、「団塊世代」であるFさんのマイホームを覗いてみることにしたい。

娘と息子が「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんで、親元から出て行かない家

庭。サッカーのイエローカード一枚ずつといった子どもと暮らすFさん。

上の娘は短大を出てからずっとフリーター暮らし。かせぎはほとんど衣装と旅行に消えている気配である。母親を巧みにくどいて、不足を補っている。

下の息子はごく普通の大学をごく普通に卒業して、親のひいき目でもしっかりしてきたように見えるのだが、就職試験を受けて採用されて勤めはじめた有名輸送会社だったのに、短期でやめてしまつて家にいる。どうやら退職希望に応じたようなのである。

大学を出たのだからと自主性にまかせているが、というより言つても聞かないから気ままにさせているが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやケイタイで情報のやりとりをして過ごしている。起業の話をしたり、時折り出かけて「職さがし」をしているとはいうものの、「ニート化」(N E E T。就業希望を有しない若年無業者)への気配もただよう。

娘と息子の話を聞くともなく聞いていると、両親と同じ高齢者のことを「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボジジババ」とか「終わったジイさん」といつている。時には父親に対して「アノヒト」、母親に面とむかつて「キミ、元気？」と呼びかけるなど、軽くあしらわれていると感じることがたびたびある。

「この家はわたしが名義人なのだ」

などというのも愚かしい。壁面に娘が貼った「のりか」(藤原紀香)のポスターほどには、底値までさがった土地の築二〇年余という家の壁にそれほど存在感があるわけではない。

「ヒツペガシ娘」 vs 「ツカエナイ親父」

*「ツカエナイ親父」とはなんだ

「塩づけの資産？ そんなものどこにもありはしないし、わが家では子どもたち、とくに娘によって強奪に近い形で浅漬けする前にヒツペガシ（資産移譲？）が行われているのですよ」
Fさんは諦め顔をつくってグチっぽくいう。

高齢者の平均の貯蓄額が二二五〇万円あって、暮らし向きに心配のない人が半数を超える、という調査結果を、同居の娘と息子は真に受けている。うちの貯蓄はお前たちが勝手に居そろうろうしているために平均に遠く及ばないとはいらいづらい。

身の周りの友人で額が平均に達していると推測されるのは、現役時代から家にFAXを置かず、酒も吞まず、生命保険の話をよくしていたBくらいではないか。

二人の子ども、とくに年頃の娘をもつ家庭はたいへんだ。女性がこれからこの国の経済、社会の担い手になるといって、無責任にもてはやすものだから、凶に乗っている。どれほどの若い女性が自分の実力（かせぎ）で暮らしているのだろうか。

ローライズ・パンツ（体型ギリギリのヘソ出し衣装）からいそいそとデイオールのパーティー・ドレスに着替えて、自在に「変衣変性」する娘の姿をみながら、際限なしの「女性化」に

Fさんは懸念をもっている。親の育て方がどうのこうのではなく、時代の風潮なのだから、親がとやかくいっても仕方がない。

「時代の花」として娘たちを擁護し、女性の活力に無条件に期待する立場からは、両親や祖母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もある。何より娘たちはどこの家庭でもヒツペガシを当然のことと考えている。その上、二二五〇枚の福沢論吉幣がどの家庭にもあると思っっている。そのほうが都合がいいからだ。

女性の活用については、いまやあたり一面に火がついたようである。

これまでもダボス会議の「男女格差報告」では、外国にくらべた女性活用で日本が一〇〇位以下（二〇一三年の発表）という低さが報告されてきたが、今更のように話題になる。

経済団体の中枢である経団連も同友会も、そろって女性の登用を「ダイバーシテイ（多様性）の推進」としてすすめる。

女性に活躍の場をという「女性の活躍促進による経済活性化」行動計画「働く「なでしこ」大作戦」が、二〇一二年六月に、野田内閣の関係閣僚会議で決定された。小宮山（洋子）大臣も大いに乗り気の事業であった。

そして安倍（晋三）総理は国連総会の演説でまで女性重視を打ち出している。「タカラヅカー〇〇年」であいさつに訪れたメンバーにははじけるばかりのおもてなしぶり。

女に生まれてよかった。笑顔で「お・も・て・な・し」といえば、なんでも可という世相な

のである。テレビ画面はNHK、民放を問わず、はしやぎまわる女性たちではちきれんばかり。四〇代のおじさん、おばさんは脇役、ましてやおじいさん、おばあさんなどは、認知症の番組以外には主役での出番すらない・・。というような勢いなのである。

だから家庭でもご主人気どりである。娘の要請に人並みに応じられないと、
「ツカエナイ親父！」

としてあしらわれる。「お前こそツカエナイ娘！」といい返せないところがつらい。
いつからこうなったのか。Fさんばかりか、うかうかしていると心優しいお年寄りが居場所もない、おカネもないになりかねない。

これが先行して、世界に誇るべき「日本高齢社会」の形成に向かっている姿といえるのか。
さすがに内閣府の資料でも、日本が先行成功事例に向かっているとは書けなくなっている。
新世紀になって、若い女性やIT青年たちとともに渋く輝いているはずだった高齢者が、居場所すらなくなるとは何たる仕打ち！

職場では売れ筋のヤング製品の製造現場からはずされ、IT音痴とさげすまれ、はてはリストラの対象となる。「ハローワーク」（公共職業安定所）の窓口の混雑ぶりや、上野公園や新宿などで見た「ホームレス」用のブルーテントや炊き出しに集まっていた人びとを思うたびに、Fさんには、戦後の「ふりだし」へと急速に崩れ落ちて行くように思えてくる。

「逆風行舟」、高齢社会は後退しているのではないか。

いったいだれが振った賽の目が悪かったのか。

「家庭内ホームレス」の気配

*居場所はファミレス・図書館・パチンコ屋

わが家にいて、「ホームレス」とさほど遠くないわびしさを感じている戦後ツ子パパが増えている。ご主人として過ごすのにふさわしいステージが家庭内からなくなりつつある。というよりこれまでもなかったことがはっきりとしたのである。

一台しかない居間のテレビのチャンネル権はもとからない。というより見るに値する番組がない。たまにあっても優先権がない。

クルマも一台しかないから行く先が違えば使えない。というより子どもたちのようにあちこち行くスーパーやコンビニもない。といって車検・整備・ガソリン・JAFまですべて親持ちである。食事は洋風が多くなった。うどんよりスパゲッティ。マヨネーズづくし。自分では作りようがないから仕方がない。回転ズシに連れていく。出てくる好物はタママヨである。

つまり家庭内に「居場所」がない状態が刻一刻と深まりつつある感じがする。

友人に聞けば、濃淡はあるもののだれもが同様で、出勤がなくなったら、家で共有していた場所も居場所でなくなって、秋とともに「ホームレス」も深まる気配。という屋外で長時間

をすぐせる居場所は限られていて、公共図書館かパチンコ屋の休憩室か二四時間営業のファミレスくらい。ホームレスのファミレスでは長居もしづらい。

「本を売るならBOOKOFF」というので、もう読まない小文字の本を、お茶代にと思って、重い思いで両手に提げていったら、傷んでいるので内容ではお茶代にもならない。

原因はもちろん自分にもあるが、社会の意識やしきみのほうにも大いにある。そこまでは分かっていても、その先どうしたらいいのか解らない。このまま推移しては、高齢者のだれもが不安なく暮らせる「日本高齢社会」など招き寄せようもない。

家庭内に自立した存在としての拠点がない。

「自立」は意識だけの問題ではなく、モノによって表現されるものもある。

「マイホーム」のために努めてきたはずなのに、と思うのはFさんのほうの都合であって、最も優遇されている仲間を比較の基準とするジュニア側は、そうは思っていないのである。

「ツカエナイ親！」として、おおかたは現状の処遇に不満なのである。

両親に対する不満との葛藤を行動のエネルギーにしている子どもたちの体内に蓄積された「荒廃菌」のありようを、つまりわが子の「潜在的ワル度」をFさんはつかめていない。それよりも、原因が自分にあつたと自責の念が湧くのがつらい。

Fさんが会社からの帰りの車中で楽しんだタブロイド版夕刊紙の「悪を暴く記事」によって、家庭内にもちこまれた「荒廃菌」が、抗体のない子どもたちに取り込まれて久しい。それがべ

ースになって、いまや子どもたちの胸中をうようよ泳いでいるのだ。そこから発せられる配慮のないナマのことばには、たしかに家族にはなかった他者の悪意や意志が混じる。

当主として当然のこととしてきた家族への配慮が、「人生の第三ステージ」にはいった自分を支える磁場の不在となっている。そのことに、Fさんは危機感を覚える。

「MY・」がないマイホーム

*わがブランド品はオメガの時計だけ

Fさんは改めてじっくりわが家の中を見直して見た。

本だなの本が動いていない。耐久品の家具はどれも一〇年以上まえに購入したものばかり。二〇世紀の製品だ。

一方、暮らしの表面を流れていく日用品は、百貨やスーパーものが多くなった。シャツはユニクロかアジア途上国製品である。妻や娘の持ち物のなかには先進国ブランド品もあって、ルイ・ヴィトン (LOUIS VUITTON バッグ) やプラダ (PRADA バッグ) やディオール (Dior 服装品) やシャネル (CHANEL 化粧品) などといったものはFさんにもわかる。スーパー品とのアンバランスさに父親であり夫である自分への無言の不満が隠されているように思える。

というより日本製がないのだからしかたがないが。

Fさんのブランド品といえるものは、後にも先にもオメガ（OMEGA 終わりの意）の腕時計だけ。家族のためを優先してきたことでの専用品の品薄さは、みずからのために生きることへの自負の欠落ではないか。

子どもたちは自分が関心をもつことについていう父親には関心を示すが、父親の関心事には関心を示さない。友人に聞けば、濃淡はあるものだけれど同様で、うちの子どもだけがというわけではない。

マイホームに「MY・・」がない。では「新宿ホームレス」とどこが違うというのか。「自立」のためには、存在感をきちつと示すモノの拠点が家庭内に必要なのだ。

子どもたちと同じ途上国製の百均用品で満足している父親ではいけない。とって、高齢者向けの国産品がないのだからしかたがない。

それでもなんとか専用スペースと「パパのもの」を確保する。

つまり「家庭内高齢化リストラ」が必要なのだ。

・・といったところで、夫婦と子ども二人で最低居住水準をぎりぎりクリアしている「3LDK」の住まいだから、当主として一部屋なんていう余裕はない。子どもたちが親ばなれをせずにいるから、それぞれに一部屋、それに夫婦の一部屋あとは共用のスペース。部屋の確保を謀って追い出し（子どもの自立）を試みても、獲得に失敗した末に孤立してしまうようでは、拠点どころか「家庭内ホームレス」の確認になってしまう。

となると共用スペースであるリビング・ルームの一面。たとえ不在であっても当主の存在感「不在の在」をきちっと示せるコア（核）をつくることにある。

傍らにあつてわが高齢期人生を輝かせてくれるわたしのもの「MY・・」とは何か。

六〇歳をすぎて八五歳までの暮らしのステージ構築のために、これまでに蓄えてきた知識や経験や技術をさらに深化・発展させるわたしのもの「MY・・」を、いつでも利用できる状態にして置いておくこと。

保持している知識や経験や技術は、地域社会の活動に参加するにしても、だいじな「個人資産」なのだから、家庭内でしっかり保持しておく。

「わたしのもの」という役割を身近にあつて担えればいいのだから、ブランド品である必要はない。日ごろから愛用しており、それなりの存在感があればいい。これと決めた「わたしのもの」を基点にして「家庭内リストラ」をすすめる。二〇年余にもわたる長い高齢期のための住環境を、半歩ずつ、さりげなくそれとなく、整えようというのである。

まずはひと昔前までNO・1の愛用品であり必需品であった机と文具類。

いまやインターネットとEメールの時代だから、卓上パソコンと周辺機器に主役を奪われて久しく、脇役に耐えてきた。これからの「人生第三ステージ」の活動を支える「高齢化用品」の基点として意識して、馴染んだ机は新たな「高齢者意識の据え置き場所」として確保して活かすことにする。

二 「家庭内リストラ」のコア(核)用品

「MY・チェア」には即座の効用がある

* 当主であるFさんの「親父の座」

「団塊シニア」のひとり、ごくふつうのサラリーマン生活を終えたFさんには、わたしのもの「MY・」として身を飾れるようなものは何もない。人気TV番組「なんでも鑑定団」(テレビ東京)に出せるような親ゆずりの遺産がある人がうらやましい。

Fさんはリビング・ルームを見直した末に、小さな庭と室内の双方が見渡せる窓際の一角に、高齢者用特別席「シニア・スペシャル・シート」を据えることにした。

会社でも窓際だったし家でも窓際でいいと、居心地を合わせることに納得して。それにふさわしい椅子を仕入れることにした。ここは思いきって出費(浪費)する。あとは文字盤が気に入っている置き時計をサイドボードの隅に、旅先で入手したパピルスに画いた「狩猟図」を壁面に飾ることにした。「家庭内高齢化リストラ」の第一歩である。

Fさんの「SS(シニア・スペシャル)シート」は、高齢化時代を表現する「コア(核)用品」として、含みのあるいい選択のようである。重量感より意匠センスより何よりも座り心地

を優先する。いふなればわが家の「玉座」「師子座」「座禅座」「親父の座」である。

かつてインドでシャカムニが宝樹の下に座して思惟したように、わが人生の来し方と行く末を半跏思惟する座なのだから、「MY・チェア」として大切に扱うことにしよう。すでに愛用のイスをお持ちのみなさんは「MY・チェア」と呼んでください。座して高齢期人生の今日から明日へを静かに思惟する「半跏思惟丈人」となる。

「人間は誰しも『私の椅子』と呼べるような椅子を持つ必要がある、そうやって初めて自宅で本当に落ち着いた気分を味わえるのではないか」

というのは、マイホームを建てたときから気にしていた建築家の提言で、その通りと想っても、家族思いの当主としてはそこまで自己主張をしなかった。いまその実現の時なのだ。

老い先長い高齢期を通じて使い込むことによつて座り心地を熟成させてゆく「MY・チェア」。これなら次世代への遺産にもなる。それより何より重要なことは、長命期に寝たきりにならないこと。わが国の百寿期の女性に寝たきりが多いのは、和式の立ち居振る舞いのあと、畳の上で正座をするか、寝るかだからだという。日ごろ、椅子に座って過ごすことが少ないので、寝たきりになるのが早いのだという。男性だって同じこと。

Fさんのデパートめぐりの調べによれば、さすがに「座る文化」の歴史が長い欧米の製品はさまざまに意匠をこらしていて、見るからによく、座り心地もよく値もよいという。一日の長どころか世紀の差を感じるという。

最高の座り心地を誇るのは頭と腰がほどよくフィットする北欧製のリクライニング・チェア。競うのはドイツ製スツール、イタリア製アームソファ、カナダ製スウィング・チェアなど。いずれ劣らぬ居ずまいがあるし、座り心地もよく、値段も思いのほかの幅があるという。

「MY・チェア」は長い高齢期を安らいで過ごすための拠点なのだから、これといったイスと出会ったら思い切って投資（浪費）をするとFさんは決めている。後半生が始まる還暦や古希祝いに購入するのもいい。定年を迎えて、ごくろうさまと退職金からねぎらうのもいい。

一日のしごとを終えて、「やれやれ」と腰を落とし、心を静めてひとしきり一日をふりかえる。ややあって「さて」と気を改めて明日を思い、「よし」と意を決して立ち上がる。

それでいい。それが「MY・チェア」の即座の効用なのだ。

どっしりと座って、からだの重みとともに来し方への充足感と行く末への待望感を交互に委ねる。時には座して陶然として、すべてを忘れる「坐忘」の境地にもひたれる。

それなくして何の人生か。

わが家の「モノ同士のモノ語り」

* 専用品をつないだ暮らしの動線

みなさんが「わたしのもの」といえるコア（核）用品を据えることで、静かに家庭内の「高

齡化リストラ」が動き出す。そのうちに同居人が「パパのもの」として気づくだろう。候補はいろいろ。

デジタル化で実用性を失ったが、シャッター音と手触りの感触によって来し方のなつかしい記憶がよみがえる高級一眼レフ。部品は揃えてあるがソフトが揃わないオーディオといった愛用機器。楽器の類。碁・将棋盤や釣り具セット。手仕事に感じ入っている碗、皿、硯。明かり、時計、置物などのアンティーク。それにあちらこちらに散在していたのを、全員集合！をかけてあつめた一二〇冊ほどの愛読書。手元に置いておきたい本はそれで十分だ。

日ごろ忘れがちな彫刻や絵画。造形や色彩が精細な貝や蝶。さらには地球儀、船・飛行機・汽車・車のミニチュア。素朴な木製アフロ・グッズ・。

どれもお気に入り。「わたしのもの」であり「高齢化コア（核）用品」の候補だが、その中から五〜七点を選び出して、机と椅子のまわりや活動の基点になるところに配置する。自分が動いて見える範囲に置き場所を決めて、ひとつひとつ配置すればいいことだ。

家庭内に「高齢期のステージ」が静かに着実に形成される。

地球儀なんか意外におもしろい。

「海洋大国」であることの壮大な世紀の夢が見えてくる。極東の隅っこにある島国「小日本」に代わって、太平洋リング（大洋弧）の一角にあって、海岸線では世界第六位（二九、七五一km）、排他的経済水域・領海・領土では世界第九位（四、八五七、一九三km²）をもつ「海洋

「大国」であることを思えば、壮大な世紀の夢が見えてくる。経済や文化の上で太平洋諸国の発展に大きな貢献をして輝いている「海洋大国」であることを、宇宙飛行士の視点で納得することが出来る。TPP交渉は、米国とともに世紀の基盤をつくる絶好の舞台なのである。

「胡蝶の夢」は、味わって損はない。手にいれるのは困難な貴重種だそうだから、蝶の皇帝といわれる一頭の「テングアゲハ」はムリでも、華麗に舞う姿を思うだけで気分は晴れる。貴重種である必要はない。胡蝶に同化してひらひらと舞った壮年の荘子の「胡蝶の夢」は、味わって損はない夢のひとつである。

旨し「天の美祿」(酒)をとくとくと注ぐ「しりふくら」(徳利。掌の上での温かなぬくもりはなまめかしい)でもいい。親ゆずりの高価すぎる骨董品なども、さりげなく実用にして活かす。高齢期の願望を仮想空間いっぱい委ねるわたしのもの「MY・」だから、候補はいくらでもある。なければレプリカを置いておいてホンモノを探し出すことにすればよい。

季節に応じて差し替えるのが「季節小物」。

わが家に四季折り折りの「モノ同士のモノ語り」が繰り広げられる。「季節小物たち、全員集合！」といっても、アンタレスとシリウスは同時に夜空には出ない。風鈴と長火鉢とをいっしょに部屋に飾ってはいけない。家ネコだってビックリする。

こうして「高齢化コア(核)用品」とそれを巡るいくつもの季節小物、それに奥さまが持つ「わたしのもの」の応援をえて、パパとママの暮らしのありようが見えてくる。

気づかなかった同居人は、「パパのチェア」や「ママの手編みクロス」や壁飾りや日用品に示される「家庭内高齢化」の意図に少しずつ関心を強める。それでいいと思う。モノによる「家庭内高齢化」の成立は、モノを通じた親子語りのはじまりを意味する。

外へ出てかっこよくボランティア活動をしていても、わが家の中に高齢者としての存在感が希薄なようでは、ほんとうに優れた高齢活動家とはいえないのではないか。

家族それぞれの愛用品の重なり

*バランスいい「三世代ステージ」が目標

家庭内の「高齢化コア（核）用品」として、「MY・チェア」ほかを推奨したが、高齢期の自己目標にむかう能力を支えてくれる愛用品、そして生活感性に折り合う日用品でありさえすれば何でもいい。

ここが重要なところだが、なければ間に合わせるのではなく制作を要請すること。

日本の熟練技術者なら、みなさんが思いつくほどのものなら、何だっつつくれる。要請がないからつくれないでいる。「引退余生型」の人生からの要望は乏しい。ここは「現役長生型」のみなさんの出番である。ひとりの優れた生活感性を納得させてこそ、みんなの人生は豊かになる。一つひとつは水玉模様のように小さいが、それが何万、何一〇万と重なった情景は思うこ

とができる。その達成者と享受者は、いまこの国で暮らしている「現役長生型」の高齢者のみ
なさんであり、それが実人生となる。

傍らに置いておいて、生涯にわたって愛用する「コア（核）用品」となれば、数年でモデル
チェンジするような消耗品では役不足。だから日新月异で変化するIT製品や車などは高価で
あっても有用であっても評価が成り立ちづらい。といって「千年杉」を細工した違い棚のよう
な鮮やかな年代主張は、なくともいい。あればそれに越したことはないが。

どうだろうか、ここでの「高齢化コア（核）用品」というのは、六〇歳ころから使い始めて終
生あるいはもう少し先の次世代の利用までを考慮した「超人生耐久優良品」（遺産として残るほ
ど）といったものとして、およそ三〇〜四〇年利用というあたりをメドとしよう。

「高齢化」の意味合いはここでは「長年化」「優良化」でもあって、だから高齢者だけが利用す
るという狭い意味ではなく、「長年愛用する優れた日用品」といったところ。

これまでの家の中は眺めてみてのとおり、オープン・スペースに置かれているのは家族共用
の家具つまり「三世代ミックス型」の日用品ばかり。そのうちでも鉢植えや観葉植物や床の間
の軸といった「季節の気配」を屋内に取り込む用品・用具類は、「家庭内高齢化」のきっかけに
はほどよい素材である。高級家具はそろっていても、季節の気配が動かないリビング・ルー
ムや客間なら「室内高齢化ゼロ！」の評価を下しておこう。

高齢者の側からの「家庭内リストラ」が初めの始まりである。

家族構成にもよるが、「三世代同居」を保っているお宅だと、青少年、中年、高年という生活感性が異なる三世代がいつしよに暮らすわけだから、共有するものとともに、それぞれが優先し専用する「三世代のステージ」の形成が課題になる。

それぞれの立場での生活動線を考慮する「三世代多重型のステージ」の形成は、同居する者お互いの生活の自由を奪うものでないことがお互いに理解されないと先に進めない。「共助あるいは共生の文化」こそが、持続可能な家族、社会、経済、国家への原点となる。

ここでは何よりも、わが家に親しい友人を迎えいれるような優れた「高齢化コア（核）用品」を製作してくれる熟年技術を持つみなさんに、みずからが納得し、そしてみんなを納得させる国産・地産の優良日用品を創り出してくれるよう熱いエールを送ってから先にいくとしよう。

三 次世代に暮らしの知恵を伝える

「エンプロティネスト家族」の孫育て

* 近居よりも同居が未来型

高齢期にはどんな家に住んだら快適なのか。

「高齢化住宅」については、国の対策も業界の対応ももつともすすんでいる分野と聞いていい。

一九九五年に「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（建設省。「高齢社会対策基本法」が成立した年）が出て二〇年近くになる。住宅産業は、メーカーの配慮くらべもあって「高齢化対応がもつとも進んでいる業界である。住宅メーカーによって取り組み方は異なるが、どこも「世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積している。

ただし、急速に高齢化がすすむなかで目立つのが、単身か夫婦のみ世帯への対策で、バリアフリー構造を持ち、介護・医療と連携して高齢者を支援するサービスを提供する「サービス付き高齢者向け住宅」で、国土交通省住宅局（安心居住推進課）が中心となって、厚労省との共管事業としてすすめ、事業者への税制上の優遇・補助などを仔細に行なっている。UR都市機構も、高齢者や障害者が安心して暮らせる賃貸住宅を数多く提供している。

それは十分に承知の上で、本稿ではこれから高齢期を迎える六〇歳前後の準備期のみなさんに、可能なら実現してほしいありようとして、「三同同（三世代同居型）住宅」というやや大きめで耐久性に優れた住まいを提案している。家族それぞれの生活感覚やプライバシーに配慮したもので、ここではさらに季節にも対応した「三同同四季型（通風）住宅」を取り上げることになる。実現するにはいろいろな制約があるだろうが、住宅に対する基本的な考え方としては高齢者みなさんに納得してほしいところである。

課題は「わが家三代の暮らしの知恵を次世代に伝える」ことにある。三世代家族が三分の一ほどはいないと、この国の先人が残してくれた「暮らしの知恵」が次世代に伝わらなくなっ

しまう。それは国の骨髄である「家庭」の力を弱めてしまう。

思い返してみるとわかる。両親のむこうに祖父母の姿がみえる。何とは記憶にさだかではないが、いろいろなことを教えてくれたはずで、それが骨髄になっている。

このところの傾向として、ずっと「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者（ここは六〇歳以上）の四〇%が同居を望んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇%台に。大泉逸郎さんの歌った「孫」が、桑田佳祐の「T S U N A M I」がトップという時代に、場違いといった感じでベストテン入り（二〇〇〇年度の一〇位）したことがあつたが、「孫」と同居の減少傾向はなおつづいており、願望はやはり歌の背景に遠のきつつある。

すでに哀樂をともにして暮らした子どもたちが巣立っていき、移り住んだころの幼い姿などを「不在の在」として想い見るほどのスペース（エンプティネスト。空になった巣）を、そつとしておくことができているご家庭も多いことだろう。

Wさんの場合も、中年期にぎりぎりまで費用を工面して借り入れをして、都市郊外の戸建住宅を購入して転居した。

子どもはそれぞれに自立している。兄はしごとで関西暮らしに。娘の家族が近くに住んでいる。近居である。高齢者夫婦ふたりで暮らしている「マイホーム」は、親子四人のための「二世代住宅」であつた。父として母としての立場でそれぞれに内容は異なるが、子育て期のいくつもの困難をクリアしてきた感慨のスペースであるとともに、この狭い実家は、とくに娘にと

つてはひそかな生活戦略、「二世帯住宅」にかかわるスペースでもある。

「古希期」あたりからの高齢者の「家族」のありようは、「わが家の三世代同居型」か「ひとり暮らし型」かに分かれる。後者の場合には、先に夫を失ったあと（逆もある）には晩年はひとり暮らしになる。

ここでは本稿が本来の「日本型標準家族」として想定している三世代が住む「三同同（三世代等同居）型」家族のありようとして、そしてこれから高齢期を迎える準備期のみなさんの将来設計のひとつとして、Wさんのご家庭の姿を追ってみたい。

孫はかぎりなくかわいい。とどころ傷みは目立つものの、住み慣れた「二世帯住宅」に残って暮らしている父と母は、子どもが巣立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、わが家の三代目を養育する「三世代型」の住まいを用意することになる。

「近居」の場合は、離れて暮らしている分だけ問題回避型の接触とならざるをえない。とはないが、離れている分だけ問題回避型の接触とならざるをえない。

若い孫はかわいい。暮らしに張り合いをもたらしてくる。そこで出合いを待ち、会うごとに何かと望みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあちゃんになる。

きちっとした「孫育て」には限界があるのはわかっている。現状ではこのあたりが高齢者にとつては標準的「しあわせ家族」となっている。

「近居」がうまく機能しているみなさんのご家族のしあわせを祈りつつ、このところ減りつつ

けてきた「三世代同居型」住宅の課題をみてみたい。
こういう住宅が三割ほどは残っていないと、わが国に伝来の「わが家三代の暮らしの知恵」が途切れてしまうからだ。

女系家族W家の三世代同居

*「実家依存症」といわれても

いままさにその瀬戸ぎわの時期にある。「わが家三代の暮らしの知恵」を子々孫々に伝えるには、まずは「三世代同居型」住宅が必要である。いま必要な住宅は、かつてのオヨメ（嫁）さんの忍従によって成り立っていた農家型標準住宅ではない。三世代がそれぞれのプライバシー空間を保持しながら同等の意識で暮らしをもにすることができ、やや大きめの家族住宅が「三同同（三世代同等同居）型」住宅である。

娘が結婚して世帯を持ち、子どもが生まれる。

近ごろは「できちゃった婚」が並みの時代だから、結婚後一〇カ月の「ハネムーン・ベビー」を待つこともない。結婚六カ月前後が最多とかで、だから案外すみやかに確実に「ノンプラン・ベビー」がやってくる。

ふつういわれるところの二五歳までの「出産期」をはずすと、あとは先延ばしして三〇歳代

に。このままでは少子化に歯止めをかける出生率の回復のしようがない。それでも三〇歳の大台に乗って、なんとか子どもと覚悟はきめたものの、夫婦ふたりの不安定なしごとでは養育・教育費が家計の重圧になるのは目の先に見えている。

大学を卒業するまでに公立でも約一〇〇〇万円、私立だと約二三〇〇万円かかるというし、就学前の幼児教育期のたいへんさを聞き、マスコミを賑わす子どもたちにかかわる事件を目の当たりにして、不安はつのるばかり。そこで、

「カアさん力を借して」
ということになる。

子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねない。国は夫婦ふたりによる子育てを「新エンゼル・プラン」以来の目標として推奨してきたし、若いカップルを対象にしてしごとをしている専門職側からは、祖父母（とくに姑）の育児参加はなお歓迎されていないのである。

驚いてはいけない。「次世代育成」や「子ども・子育て」の現場では「祖父母」ということは禁句に近い。文書のどこにも「祖父母」という文言すら示されていない。これでは「わが家三代の暮らしの知恵」は、祖父母の立場から子・孫に伝えようがないのである。といってこれまでの根深い嫁たちの怨念をケアもせず無視して、祖父母の参加を呼びかける資格などどこにもない。ただし来年からは子育てに地域力の参加が要請されることになる。高齢者として、地

域の孫世代の養育にあたることは期待されている。その中にはかわいいわが家の孫の姿もある。「実家依存症」といわれても子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦がいる。かつてシュウトメにわずらわされないよう実家を離れて「専業主婦」を求めた母世代の「核家族」指向と「寿退社」と「M字型」就業。いまやっとそこからのUターンが始まる。「三世代同居」による家族支援で、「M字型でない一文字型」の就業をつづけて課長になり部長になれる娘世代の人生設計。そして出生率の回復も。

ここは女系の母娘に優位性を見るが、なんとか実現にこぎつけてほしい計画である。

そこまでは結構なのだが、せっかくの「世帯同居型」住宅にもかかわらず、どのメーカーの小冊子のモデル設計を見ても、共用スペースのつくりつけがミドル+ジュニア主体に寄りがちになっている。「三世代型住宅」とは称しているものの、高齢世帯の「離れた和室ひと部屋」への引きこもりが推測できるものが多くみられるのが実情なのである。

「三同同（三世代同居型）住宅に期待

*次世代に暮らしの知恵を伝える

大都市近郊に住むWさん夫妻は、近居して子育て中の娘家族からの要望もあって、建て替えをして「三世代同居型」の住居を建築することになっている。

メーカーを通じて調べてみると、事例は決して少なくはない。各メーカーとも高齢者ユーザーからのさまざまな要望に対応できるノウハウを揃えており、とくに住宅内のバリアフリー化はすみずみまで意識されている。

部屋の配置はもちろん、つまづいて転倒しないよう段差をなくしたり、手すりを設けたり、階段の勾配を緩くしたり、車イス（訪問客もある）を考慮して幅広廊下にしたたり、少ない動作で開閉できる引き戸を多くしたり・などが実現されている。「三世代同居住宅」で「家族とともに成長する住まい」を提案しているメーカーもある。すでに建て替えて「三世代同居住宅」に住んでいるお宅を実際に訪問する機会を提供しているメーカーもある。

そこで、Wさん夫妻は参加してみた。

大手メーカーによる広域造成地での建て替え住居だから外形も安定しており、すでに年月を重ねてきた街並みに落ち着きを与えていることがわかる。樹木も育って、かなり大ぶりのサクラが庭の隅にあつて、それを囲むようにしてL字型の二階家が建っている。

「ここを選んだ家内の母が子どもの成長とともに大事にしてきた樹でしてね」

Wさんの庭への視線を察して、ご主人がいう。

ご夫妻のほかは高校生のひとり娘と義母の四大家族。一階は母親の部屋と共用のスペース、二階に夫妻と娘の部屋と広いリビング。一角に書斎もあつて、「マスオさん」として「三世代同居」を成立させながら、マスオさんよりはずっと存在感があるように見受けられた。Wさんは、

わが家の娘むこの意向も十分に反映せねばならない。

上下階の雰囲気違和を感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからとWさんの奥さんは指摘する。「三世代同居型住宅」として広さも構造も申し分ない。それでも義母の方の一階での孤立遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になったと、これはご夫妻がいうところ。

これではほんとうの高齢化時代の「三世代住宅」とはいえない。「人生の第三期」の主役として、これから二〇年もの長い高齢期を現役としてゆったりと暮らし家ではない、とWさん夫妻は気づいている。ここは妻であり子の母であり孫たちの祖母である奥さんの出番である。孫の成長に接しながらわが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての共有スペースを要請している。「三世代のプライベート・スペース」と生活動線を織り込んだ住居を目標にして、メーカーの技術者と設計にはいつている。

三世代が等しく扱われる同居住宅が「三同同（三世代同居）型」住宅。

「家族みんなで考えていろいろ解決することができますからね」

と、Wさんはライフ・スタイルが異なる家族三代がいくわすさまざまな場面での公平な処理に期待をこめていう。「三同同居住宅」を実現できるW家は「超しあわせ家族」である。

もちろん「孫育て」に、同居も近居も遠居も関係がない。次世代を総出で育てることとなる。すべてのご家庭でできるわけではない恵まれたケースではあるが、多くあっていい。国も企

業も優遇措置を講じて、「しあわせ家族」を増やすこと。穏和な国民性は三世代同居によって培われ継承されていくにちがいないからである。

「三同同住宅」の標準化のために、国や自治体はさまざまな優遇措置をおこない、建設業者はノウハウを蓄積し、企業は女性社員の地元勤務型キャリアの設置をするとともに、子育て期の女性が男子社員と伍して能力を十分に発揮できるよう支援する。

これまでの女性社員の六割におよぶ結婚時の「寿退社」とその後のアルバイトという「M字型」就業。これにかわって、入社時から高年齢まで真一文字にしごとに集中できる女性人材として処遇されるようになる。そして何より次世代に、「わが家三代の暮らしの知恵」を母系のつながりを有効に活かしながら伝えることが可能になる。母と娘がやりとりする継続性のある生活感、祖父母と接することによってえられる孫世代のメリットには計り知れないものがある。

「うちのジージがね」

とって孫が自慢する。

同居しながら高齢者をたいせつにするジュニアを育てる機会をもつ家族。これもまた「高齢社会」を構築するために重要な「三つのステージ化」の一環なのである。

その三 やや高安心の国産・地産品が再登場

Ⅰ 「MADE IN JAPAN」の時代

「サンパク以後（三八九一五）」は片下がり

* 経済的デフレと人的パワーの萎縮

晴れやかだった記憶として思い起こせば、東京株式市場の「大納会」で「東証一部の株価」が三万八九一五円というピーク値を記録したのは一九八九年一月二十九日のことだった。「三八九〇サンパクⅡ三白」というのは正月三ガ日に降る祝いの雪をいうが、九〇年正月の東京の空高く株価が舞って「サンパク以後」（三八九一五）はひたすら右片下がりとなった。

それに先立つ一九八九年一月七日に、一〇〇日を超える闘病をつづけた「昭和天皇」が八七歳の高齢で亡くなったのだった。八九年六月二十四日には、「東京キッド」や「私は街の子」以来、戦後の日本を体現していた歌手の美空ひばりさんが、最後に「川の流れるように」を歌って五二歳で亡くなっている。

「やれやれ、これで戦後が終わったのだ」

とつぶやいた人びと。とくに終戦を二〇歳〜三四歳で迎えた大生生まれの人びとは、このと

きは六四歳〜七八歳の高齢期での実感だったにちがいない。「昭和」が終焉し、「平成」とともに始まった日本経済の下降。高齢期の人びとのなかには、みずからの戦後を顧みての終息感と、その後の「経済の萎縮（デフレーション）」とを体感として理解した人が大勢いたのだった。

こころの底には戦乱で亡くなった人びとへの鎮魂の思いは消えずとも、自分の肩にかかる荷だけは静かに降ろし、長かった緊張を解いたのだった。将来の高齢期に新しい目標も構想も見当たらなかったし。

こういう「われにかえった」高齢者の一人ひとりに「内在する萎縮（デフレーション）」は、ゆっくりとした静かな変容であり、外から気づかれることはなかった。

しかし戦争の惨禍を知り、どん底の貧しさを知るといっきびしい経緯をもつ自分たちの後を、戦争も知らず、貧しさも知らない若い連中が一对一で引き継ぐことなどできないだろうという自負と憂慮をない交ぜにした感慨は、大正生まれの仲間同士の会話のうちに繰り返された。

それがすべてではないと知りつつも、企業現場からの自分たちの隠退（労働力・構想力の消滅）が、総体として「日本経済や社会の萎縮」をもたらす要因となるだろうことは予測しえても、まさかこれほど早くに高齢者となった自分たちの医療費の負担増や年金の減額や消費税増税が現実になり、あろうことか、若年層から不公平との反発まで浴びようとは、思いもよらなかったことにちがいない。

「大正生まれ」の歌

*働きづめに働いた人びと

まわりに少なくなったが、大正生まれの先人を大切にしよう。

大正生まれ（明治四五年Ⅱ大正元年Ⅱ一九一二年七月三〇日から大正一五年Ⅱ昭和元年Ⅱ一九二六年一二月二五日）の人びとは、だれもがたいへんだった。男性も女性も。男たちは「富国強兵」の下で育てられて、大陸や太平洋の戦場で戦い、終戦の昭和二〇年Ⅱ一九四五年には二〇〜三四歳。生き残った男たちはこんどは「企業戦士」となって、死んだ者、傷ついた者の分まで働いた。女性たちは「良妻賢母」に育てられて、銃後をまもり、戦後は子どもを育て、身をもって平和を伝えてきた。その女性の中には、かつて大陸で「自ら生きよ」と放り出され、いままた一人暮らしで「自ら生きよ」と二度も放り出された人もいる。

力をつくして高度経済成長を成し遂げた昭和五〇年Ⅱ一九七五年には五〇〜六四歳。そして今、平成二六年Ⅱ二〇一四年には八九〜一〇三歳である。

「大正生まれ」 小林朗 作詞 大野正雄 作曲

1番

大正生まれの俺達は 明治の親父に育てられ

忠君愛国そのままに お国の為に働いて

みんなの為に死んでゆきや 日本男子の本懐と

覚悟は決めていた なおお前

2番

大正生まれの青春は すべて戦争（いくさ）のただ中で

戦い毎の尖兵は みな大正の俺達だ

終戦迎えたその時は 西に東に駆けまわり

苦しかったぞ なおお前

3番

大正生まれの俺達にや 再建日本の大仕事

政治、経済、教育と ただがむしやらに三十年

泣きも笑いも出つくして やつと振り向きや乱れ足

まだまだやらなきや なおお前

4番

大正生まれの俺達は 五十、六十のよい男

子供もいまではパパになり 可愛い孫も育ってる

それでもまだまだ若造だ やらねばならぬことがある

休んじやならぬぞ　なあお前
しつかりやろうぜ　なあお前

作詞者の小林朗（こばやし・あきら）さんは大正一四年の生まれ。二〇〇九年二月二日に死去。「大正生れ」の歌は一九七六年にテイイチクからレコードが出された。

大正人の優れた業績を垣間見るために、少しでも著名人をみてみよう。二ページほど紙幅をいただいて。**赤色**は平成二四・二五年に他界した方、**青色**は現存の方である。

一九一二／元年　一／太田薫　二／双葉山定次、三／都留重人　四／**新藤兼人**　五／林伊佐緒
六／大友柳太朗　八／田島直人、福田恆存　九／成田知巳、松下正治　一二／木下恵介
一九一三／二年　一／荒正人、田中英光　二／中原淳一　三／尾上松緑（二代）、金田一春彦　五
／森繁久弥　六／杉浦民平　九／家永三郎、丹下建三、豊田英二、吉田秀和　一〇／織田作之助
一九一四／三年　一／深沢七郎　三／丸山真男　五／前畑秀子　六／呉清源、霧島昇　七／木
下順二、笠置シヅ子、八／後藤田正晴、平岩外四　九／宇野重吉　一一／田村魚菜
一九一五／四年　一・二／**むのたけじ**　二／二葉あき子、水の江滝子、野間宏、小島信夫　三
／濱谷浩　四／飛鳥田一雄　六／和歌森太郎　九／高川格　一一／春日野八千代
一九一六／五年　一／福武哲彦、岡晴夫　三／有島一郎、五味川純平、斉藤茂太、岩谷時子　四

/木下忠司 七/坂田道太、鶴岡一人 八/藤村富美男、五島昇 一〇/渡久地政信
 一九一七/六年 一・二一/日高六郎 一・二二/秋山ちえ子、中村歌右衛門 二/沢村栄治、
 山田五十鈴、横山泰三 三/柴田錬三郎 四/島尾敏雄 七/浜口庫之助 一〇/角川源義
 一九一八/七年 一/小暮実千代 二/池部良 三/中村真一郎、福永武彦、升田幸三 五/田
 中角栄、五・二七/中曾根康弘 七/堀田善衛、近江俊郎 九/高橋圭三 一二/高峰三枝子
 一九一九/八年 一/田端義夫、照国万蔵、一・二三園田天光光 二/やなせたかし 三/水上
 勉 六/岩波雄二郎 七/長洲一二 八/大野晋 九/加藤周一、金子兜太 一一/佐治敬三
 一九二〇/九年 一/長谷川町子 二・一二/山口淑子 三/川上哲治 四/三船敏郎 五/
 森光子 五/安岡章太郎 六/秋山庄太郎、梅棹忠夫 七/竹内均 一二・二四/阿川弘之
 一九二一/一〇年 一/谷桃子、吉田正、盛田昭夫 二/庄野潤三、大松博文 三/貝谷八百
 子 四/犬養道子 七/藤原弘達 一〇/一〇・一三塩川正十郎 一二/山本七平、五味康祐
 一九二二/一一年 一/橋川文三、山田風太郎 二/三根山隆司、安川加寿子 三/山下清、
 和田寿郎 四/岩井章、三浦綾子 五・一五/瀬戸内寂聴 六・一八/D・キーン、七/丹波
 哲郎 八/石井好子 九/塚本邦雄、九・一二内海桂子 一〇/別所毅彦 一二/大下弘
 一九二三/一二年 一/池波正太郎、三國連太郎 三/大山康晴、田村隆一、遠藤周作 四/
 四・一九千宗室 五/五・二四鈴木清順 八/司馬遼太郎 一一/白井義男、一一・五佐藤愛子
 一九二四/一三年 一/佐藤亮一 一・一六/京極純一 二/石本美由紀、岡本喜八 二・一

八／陳舜臣、越路吹雪、淡島千景 三／安部公房、三・三村山富市、三・二五／京マチ子、高峰秀子、高田好胤 四／團伊玖磨、吉行淳之介 六／芦野宏、六・二五／丹阿彌谷津子 一〇／石橋政嗣 一一／山崎豊子、青田昇、一一・一四鈴木登紀子、吉本隆明 一二／鶴田浩二 一九二五／一四年 一／三島由紀夫 二／栃錦清隆、二・二七／豊田章一郎 三・一二／江崎玲於奈、三・二〇／梅原猛 五・一〇橋田寿賀子 六／藤沢秀行、加藤芳郎、六・二八大関早苗 七／芥川也寸志、藤沢嵐子、七・二三／色川大吉、八・二一／篠原一、丸谷才一 九／杉下茂、辻邦生 一〇／中村雄二郎、一〇・二〇／野中広務、一一・六／桂米朝 一九二六／一五年（一二月二五日）一／一・八／森英恵、いいだもも、一・一二／三浦朱門 二／榊莫山、松谷みよ子 三／萩原延寿、犬丸一郎、三・一五／辻久子、三・二〇／安野光雅、加古里子 四／宮尾登美子 七／奥野健男 八／古田武彦 九・一／石井ふく子、星新一、今村昌平、九・一九小柴昌俊 一一／根本陸夫、一一・三〇／中根千枝

「九割中流社会」はどこへいった？

*「社会主義的平等主義的自由経済の国」

「もはや戦後ではない」といわれたのが一九五六年。それ以後に生まれた人たちにはそれがふつうだったから実感がないのかもしれないが、一億人を超える国の国民の九割までが「中流と

感じる社会」を実現して、しかも長期に継続（一九七〇年〜八九年）したことは世界にも例がないのである。

八〇年代に、「日本は社会主義的・平等主義的・自由経済の国だ」と外国人に向かって紹介したのは、「大正人」のひとり、盛田昭夫さん（当時はソニー会長、経団連副会長）だった。

盛田さんは、外国人に日本の「国のかたち」を問われると、自信をもってそう説明していたという。国際的基準の中で、世界の開発途上国から目標とされるアジア地域の先進国として立ち現れたのである。いま高齢者になっているだれもがその経緯と成果をリアルタイムで体感してきた経緯をもっている。個人の体験してきたその成果は、仔細に思い返して実感してほしい。

一九七〇年には「進歩と調和」を掲げた「日本万国博」があり、八〇年には絶頂期の「山口百恵」が引退し、そして八九年には昭和天皇が八九歳で亡くなり、美空ひばりが五二歳で世を去った。その間に、ゴミ戦争、列島改造、べるばら、カラオケ、インベーダー、そしてフルムーン、おしん、くれない族、新人類、トラバーユ、外にはペレストロイカ、ベルリンの壁・。「九割中流社会」というのは、三千年にわたって中国の歴代の為政者が目標として成しえない「大同社会」にほど近い社会（いまの中国は「小康社会」をめざす）であり、したがって歴史的にも貴重な体験なのである。通過している時には、そうも思えなかったが。

「大同社会」とはどういう社会か。

わかりやすくいうと、『礼記「礼運」』では「外に戸を閉ざさず、これを大同という」といい、

『水滸伝「第一回」』でも「路に遺ちたるを拾わず、戸夜に閉ざさず」という太平の世を夢見ている。「夜に戸を閉ざさず」に暮らせる社会のこと。たしかにそういう時期があった。「セキユリテイって何？」という社会である。

また「路に遺ちたるを拾わず」は、拾わないのではなく、落とした人のところへ戻ってくる。そう。そういう時期がこの国の一九八〇年ころまでは確かにあった。拾ったものは必ず交番に届けたし、なくしたものや忘れたものは必ず戻ってきた。つい三〇年ほど前のこと。みんなどこかで、歴史的なこの貴重な時代体験をしてきているのである。

そして、いまやありえない。世界が狭くなり、どこからでも侵入者や破壊者がやってくる時代。大戦後の東アジアの局地的な小世界「日本」だったから可能だったのだろう。ボートピープルがめざしたあのころのあこがれの国のことである。

いまも「シニア海外ボランティア」の高齢者や日本企業の現地駐在の高齢社員が、開発途上の現地の人びとから心からの信頼を勝ち得ているのは、生産者としてユーザーが満足する品質（モノ）にこだわるとともに、背後に息づく品格（ヒト）がおのずから伝わるからだ。

「みんなが中流」という当たり前だった意識に亀裂をもたらすことになる日本経済の「萎縮」（デフレーション）がはじまったのは九〇年代初めのころである。

「日本経済や社会の萎縮が平成時代とともににはじまった、ということになれば、平成の年数の期間、すでに四半世紀のあいだ、片下がりがつづいてきたことになる。「団塊の世代」より以降

の人たちは、四〇歳代、五〇歳代を、時代の先に目標の見定めづらい時期を過ごしてきたわけだから、内向きに自己保身に向かわざるをえない。

「MADE IN JAPAN」の時代

* 丈夫で長持ちする中級品が国外での評価

日本経済の頂上期に、盛田さんが書いた『MADE IN JAPAN』（一九八七年、朝日新聞社）は、そのあたりのことをこう記している。

「国内のマーケット・シェアをかけた激しい競争を通し、海外での競争力を養うのだ。エレクトロニクス、自動車、カメラ、家庭用電気製品、半導体、精密機械などが、その代表的なものである」

日本製品の多くは高級品ではなかった。「良質な中級品」、つまり一般の人びとがもつとも必要とする良質なものを作ることに活路を見い出してきたのだった。良質というのは、「使いやすく、丈夫で、長持ちする」という意味でいわれた。高級品ではない。

物質的にはしやにむに近代化（といっても多くは戦勝国アメリカ化）をすすめた日本は、外国から素材を買い、丈夫で長持ちする良質な製品を作って売る「加工貿易立国」として第二の開国を行い、国土の再建をめざした。鉄のカーテン（ソビエト）や竹のカーテン（革命中国）

のむこう側の「社会主義」の動向にも関心を払いながら。

前記の商品は国内でよく売れば、それは外国とくにアメリカで評判がよく、「MADE IN JAPAN」のトランジスタラジオ、カメラ、テレビ、小型車など良質な中級品は、実用品として認められてきたのである。それがまた日本人みずからの生活を平均的に充足し、中産化することで、「みんなが中流」の実感が生まれた。

優れた技術者が「良質な中級品」をつくり提供することが、わが国の立国の基盤であることは、心に銘じておかなければならないことである。けっして高級品ではない。

だからわが国では、どこの家庭でも、日用品はどれもが丈夫で長持ちする国産品があたりまえだった。舶来ものといえば、化粧品とか時計といった欧米からのブランド品が主だった。そこへ「途上国産品」が混じり出し、目立つようになり、はては逆に国産品はどれというようになるまでに、せいぜい一〇年余といったところだったろうか。

前述したが、流行語にもなった「日本列島総不況」と堺屋太一さん（経企庁長官だった）が日本経済を評したのが一九九八年のこと。当時すでにアメリカ一極体制の下で、途上国主導の経済活動が本格化していたということになる。日本の進出を求めるアジア諸国への対応は一步も二歩も遅れることになった。それまで途上国からの輸入品といえは「山海珍味」のパイナツプルやマンゴーなどで、東京では明治屋や紀ノ国屋の店頭をにぎわせていた程度だった。あとは韓国製の「衣料品」が目立つくらい。日用品は輸入せずともこと足りていたからである。

二 途上国産の百貨商品に囲まれて

家庭内に「途上国産日用品」が居座る

*「アジアの共生（豊かさの共有）」を実感

「衣料品」からはじまった「家庭用品の途上国産化」。ほかの製品への広がりには、その後、日新月异の勢いでどんどんと進んでいった。暮らしの中で「MADE IN KOREA」から「MADE IN CHINA」や「MADE IN THAILAND」・・・といったアジアの国々からの日用品が次々に国産品に入れ替わる度に実感されてきた。

「えッ、これもか」

と驚くほど早く「モノの途上国産化」は進んで、ついには精密機器にも及んでいった。

「日本列島総不況」の下で収入が減ったわが国の消費者は、国産品や製作技術の将来を危惧しながらも、やや粗悪だが「安価」な途上国製品を購入することになった。

丈夫で長持ちする純国産の優良品に囲まれて暮らしていた一九八〇年ころと比較すればよくわかる。一九八二年が小売店のピークだったという。そのころは全国に商店が一七二万店、商店街は一万四〇〇〇カ所もあったという。数もそうだが商店街には人をひきつける活気があつ

た。馴染みの店に寄るのが楽しかった。商品知識ばかりか人生の先達があちこちにいて、元気がもらえたのである。

商店街は「モノと暮らしの情報源」でもあった。歳末の商店街の活気はどこもなつかしい記憶になったが、そのころ購入した優良品のあれこれはまだ暮らしの中で生きている。

日本企業の海外進出は、生き残りをかけてといわれるほどに業績悪化の果てであったが、アジア市場ではヨーロッパ系企業や韓国企業にあきらかに時期遅れではじまったものの、現地での歓迎と期待は大きいものがあつた。あこがれの日本から、有名企業がやってきたのである。

「日本の製品を使って日本人のような暮らしをしたい」

というアジア途上各国の人びとの願望が叶いつつあるのである。

決して褒めすぎでも言いすぎでもなく、「アジアの共生（豊かさの共有）」へむかって、わが国の私企業による公益的成果として、日本ブランドは成立している。アジア各地にしっかりと着床しているのである。世紀の視野でみて、日本が誇っている国際貢献である。毎日用いている日本ブランドの生産地を逆にたどれば、アジア諸国の人びとの暮らしに日本企業もたらしている成果が推察される。

観光ツアーではなしに、行く機会をつくって実見してきてほしい。いうまでもなく現地を仔細にみれば、先行の欧米企業や韓国企業、最近は中国企業の進出もあり、日本企業は生き残りを懸けて事業を展開しているのに変わりはない。現場での事業活動の成果は、派遣社員の並み

ならぬていねいな指導とそれを受けて日夜を徹して移入に努めている現地従業員の熱意の結果でもあるのである。

海外の現場ではそれぞれ事業ごとの戦略が必要であろうが、海外進出した「ユニクロ・UNIQLO」や「大創（ダイソー・DAISO）」の動向をみれば、「アジアの共生（豊かさの共有）」が時流としてアジアの奔流となっていることが理解される。

前世紀には戦場となった地域でも、「平和裏」に展開される「モノとヒト」の交渉や交流を通じて、途上各国の民衆は、わが国が平和国家であり、民主主義によって「しくみ」をつくり、ユーザーが納得する優れた「モノ」づくりをし、従業員に差別なく接していることを理解しているにちがいない。豊かさの共有をめざしてきた「日本型マネジメント」を活かしている日本企業とその社員は、言い過ぎでなく、わが国を代表する平和の遣使なのである。

途上国包囲網による「日本途上国化」

*家庭用品と企業の非正規社員化にみる

中国へ進出した日本企業は、上海だけでも三〇〇〇社を超えするという。それぞれ社名の漢字表記に工夫しているのはご存じのとおり。いくつか例をあげてみよう。

たとえば「優衣庫」（ユニクロ）、「三德利」（サントリー）、「索尼」（ソニー）、「施楽」（ゼロ

ックス)、「佳能」(キヤノン)、「楽天」(ロッテ、まぎらわしいが音ではルオ・テイエン)、「華歌爾」(ワコール)、「百樂」(パイロット)、「養樂多」(ヤクルト)、「日波」(サンウエーブ)、「可果美」(カゴメ)など、「資生堂」「富士通」「麒麟」「味之素」「朝日新聞」などはそのまま。

しごとの現場では、技能も人格も優れた多くの派遣社員がことばや生活習慣の違い、国民感情に配慮しながら製品化に当たっている。前項でもみたように途上国主導の「グローバル化」の対応に、日本企業は遅れに遅れて生き残りをかけて選択した荒療法が、生産拠点の途上国シフトと社内リストラだった。両方ができる企業はそれを急いだ。

わが国は前世紀にアジア地域でただひとつ、「欧米追従型の先進国化」をなしとげていたが、同じアジア諸国の人びとの近代化への熱い思いを理解していたとはいえない。

そのためになすべき役割を果たせなかった。アメリカ市場での途上国主導の「グローバル化」にうながされて、日本企業は「サバイバル(生き残り)」を懸けた進出となり、資金、人材、ノウハウを移出して、途上国の需要に見合う日本ブランド品の生産をめざすこととなった。早くから穏やかにすすめていた少数の企業は、比較にならないほど良い人脈と企業体制を保持している。

テーマの「高齢化」と離れてやや理屈っぽく日本企業の海外進出をいうのは、その結果として国内での対応が混乱し、これまでの「終身雇用」型の正社員では経営がもたなくなり、アルバイトや派遣社員で支える「日本の途上国化」対応が急速に進んだことをいうためである。し

たがって正社員化は「途上国の日本化」とともにゆっくり回復せざるをえない。政冷経熱の結果の混乱であり、わが国の企業に現れて当然のグローバル化症候群であった。

ひととき電球や電池は安くなったがすぐ切れる粗悪品になった。メーカーを見ると日本を代表する企業である。広州では、

「日本の優良企業の索尼（SONY）がこんな製品をつくるのか」

という風評が立たざるをえなくなる。これもアジア共生のための「日本の途上国化」の実態であり、「余儀なく受けざるをえない悪評」である。

いまや家庭内の電球は、「ライト・イノベーション」（ベンチャー企業名になっている）によって、やや高だが便利で安心して使える日用品の成功例になりつつある。こうして途上国製品で満たされている家庭内日用品は、ひとつずつ国産・地産品に戻ることになる。高齢者なら体験としてわかることだが、かつて日本が成長の途次にたどったX地点まで戻って待ちながらおこなうアジア共生のための「共同歩調」であり、日本のなすべき責務なのである。現地で尽力する日本人社員が現地職員に「ありがとう」と率直な謝意を受けることはしあわせなことだ。その謝意の半ばは戦後に会社をつくった先輩に捧げるべきものだろう。

踊り場で「足踏み」して待っていた日本の熟練技術者は、「家庭用品の途上国化」のための日用品の劣化を、時流の理解者として眺めてきた。それゆえの「足踏み」であったから、時をまつて再開する優れた製品、やや高安心製品の国産・地産化のための技術や意欲まで失うことは

なかったのである。

三 やや高安心の国産・地産品が再登場

やや高安心の国産・地産品が再登場

* 足踏みして待った熟練技術者

この一〇年余り、日本企業が海外進出したからといって、国内の熟練技術者の技術を越えた製品ができて暮らしが快適になったわけではなかった。この間、日本の熟練社員は、アジア途上国がいつかたどった同じ道の後をたどって、豊かになることを願って、「足踏み」をして見守ってきたのである。

アジア途上国産の製品が「粗悪品から中級品」に達したのを見定めて、国内産の「やや高」だけでも「品質が安定」しており、安心して買うことができる優良日用品（高級品ではない）の企画・製造・販売に取りかかることになる。

その好例として今治のタオル（IMABARI）がよく引かれる。吸水性のいい「使って気持ちが良いタオル」とことんまで追求してえた技術結集の成果であり、「やや高だが安心して使える優良国産・地産品」のモデルになっている。

こうした日用品の中に「MADE IN JAPAN」を見つけると、国民は技術の保持にほっとするし、滞らせていた生活感性がもどってくる実感も生まれる。肌に触れる下着の心地良さはいうまでもない。男性なら途上国製の電動髭剃りをやめて、チタンコートの手動髭剃りを使ってみるとよい。剃り味抜群であればの心地よさなのである。デフレ（萎縮）からの脱却はこういう生活感性の小さな再生から本格化するのちがいない。

わが国の高齢者層が、このままでこれ以上に途上国製品に埋もれてしまうことなどありえない。優れた生活感性をもつわが国の高齢者にとって、使って心地の良いものとなる「国産・地産優良品」が、とくに「団塊の世代」など若手シニア・ユーザーからの要請によって動きださるだろう。「雨過天青」といった明快さで技術レベルの高い国産・地産の新製品が現われて、暮らしを豊かにするだろう。

さすがに都内のデパートは、変わり身がはやい。

顧客ターゲットを若者・女性層から高齢者層に替えての改装をおこなったところもある。「モノ」の生産現場より顧客に近い流通現場のほうから反応がはじまる。イオンの「GG（グランド・ジェネレーション）」戦略に人生を楽しむ「グラジェネ世代」がどう応えるかが注目されている。サービス部門では、「セブンイレブン」や「イトーヨーカドー」や「生協」、「JP（日本郵便）」が先行して動いている。

しかし注意すべきは、デパートの若手担当者が口をすべらせたように、「高齢者の富裕層を対

象にして」と格差の存在を認めていたことにある。ここは途上国製品との「較差」であって「格差」ではない。わが国の熟練生産者は、高級品をつくるのではない。途上国産品を見たうえでその上をゆく優良中級品、みんなが心地よく使える優れた国産品を提供しようとしているのである。流通部門がそこを間違えると、企業回復を阻害することになりかねない。

この一〇年余り、だれもが体験してきたことは、「家庭用品の途上国産化」だった。国も企業も国民もその時流を時代の要請として受け入れてきたといつてよい。とくに海外産の食品は「飽食の時代」といわれるまでにこの国の食卓を豊かにした。

その中であって、日本各地の食材もまた苦戦を強いられてきたが、山梨のモモも、青森・長野のリンゴも、山形のサクランボも、産地の努力がうかがえるほどに質の差が歴然とし、価格がほどほどに収まっていれば、「やや高だけれど優良な国産・地産食品」として、受け入れられている。それはわが国のユーザーにモニターされた「優良な輸出品」候補なのである。

一次産品でそうなのだから、他の商品はなおさらである。

生活感性の高い日本の高齢者は「モノの途上国産化」による「生活水準の途上国化」にがまんしながら、「やや高安心の国産・地産優良品」の登場を待っていたのである。

みんなで豊かになろうという基本理念は生きている。何度でも繰り返すが、求めるものは決して高級品ではない。

「高齢化経済活動」が財政難を克服

*「成長+成熟」社会を創出する

財政難を高齢者が克服する。

おそらく本稿の記述のなかで、もっとも理解のゆきづらい課題であることは承知している。が、高齢化先行国である日本がそれを達成することによって、世界の多くの高齢化途上国が、その成功例を追随することになる重要な課題であることにもまちがいない。一人の日本の高齢者の人生が、多数の他の国の高齢者の人生の指標になる。素晴らしい光景ではないか。

とって日本の高齢者が特別な活動をするわけではない。いまの生活感性の高い日本シニアが、自分の暮らしを快適にするようなモノやサービスを要請することでいい。技術や知識や経験のある人たちが、それに応えてモノやサービスを完成させればいい。それはありようとしては、水玉模様のように重なりながら、この国の大地を覆っていくことになる。

マイホームに、自分が要望した「MY・」がひとつずつ増えていき、肌で感じられるほどに「優良国産・地産品」が身のまわりに安定した存在感を示すとき、「日本高齢社会」を下支えする「エイジノミックス（高齢化経済活動）」の安定した姿が見えてくる。内需による持続可能な経済活動の展開となる。それでいい。

もう一度確認しておくが、優れた生活感性を持つ五〇歳以上の日本シニア層が、このまま途

上国製品に埋もれてしまうなどということは決してありえない。

アジアの民衆との共生（豊かさの共有）はそれとして進めながら、たいせつなのは高齢者の生活を充足させる良質なモノの創り出しにある。とくに若手の「現役長生」型シニアは、遠慮することなく優れた製品を要請し、成果を享受する需要者となること。生活感性の高い完成度の高い製品を送りつづけること。だれもが「高齢化優良品」の供給者となり需要者となることで、成熟した暮らしを楽しむこと。そうしてはじめて各地各界の中小企業の熟練技術者を中心にして、自社製品の開発に挑む体勢をととのえることが可能になる。引退した社友も参画して、みんなが愛着をもって自社ブランド製品を送りだす。

高齢化商品ルネサンスである。

「いい時代に生まれちゃったじゃないか」

高齢期にそう言いあえる社会でないと長寿の意味がない。その成果を集めて幕張メッセを賑わすような「国際高齢化製品展示会」が催されて、外国人バイヤーが集まることになるだろう。これは広州でも上海でも不可能な、日本が独走する国際イベントとなる。

一つひとつは小規模でいい。着実に優良製品化に成功した企業が増えることで、現有のグローバル経済圏にさらに「高齢化製品経済圏」を着実に上乗せする「子ガメの上に親ガメ」といった趣きの経済活動「エイジノミクス（高齢化経済）」が展開されることになる。

「高齢化国産品」の開発に成功した業種が増え、地域では「高齢化地産品」が増えることで、

地域生活圏をますます豊かにする。増えつつける「現役長生」型の高齢者の要請によって持続的な内需を拡大し安定させる。かつて全国的地産品を生みだしたように、海外の高齢者が求めるような良質の日本製「国際地産品」の数々は、「加工貿易立国」としてのわが国の伝統を引き継ぐことになる。

今がその歴史的に優位な時期なのだ。

日本シニアの持つこういう優れた「世紀の役割」を感知できず、能力を發揮する環境を整えることなく、一〇年余りを延滞させてしまったのは、だれか。

このまま推移しては、わが国の「新世紀の役割」を感知できなかった責任を歴史的に負わなければならなくなる。急いで君子豹変して、高齢化商品による経済活動「エイジノミクス（高齢化経済）」を活発化してもらいたい。

四 「新・日本型マネジメント」に活路

「新・終身雇用」と「新・年功序列」の展開

*アメリカ力型「成果主義」の成果は限定的

「終身雇用制と呼ばれてきましたが、実際には六〇歳定年制が一般的だったですよね」

といわれれば、その通りである。

たしかに「終身雇用」といっても終身ではなかったものの長期（無期）であり、先輩から後輩へとわが社流儀を伝えながら生涯支えあう信頼と平等の絆の表現として「終身雇用」は引き継がれてきた。定年後も、終身のつきあいを建て前とする「愛社意識」として保たれてきた「和」の伝統なのである。先輩を敬愛する「年功序列」の骨組みも変わりない。それは国の骨格である。とくに伝統のある百年企業には、そのまま今も息づいている。

いま日本型企業の基本とされる「終身雇用」を論ずるとなれば、本稿の立場は明快である。入社したての新しい可能性を秘めた若手社員は先輩社員を終身にわたって敬愛し、企業の骨格を支える中堅社員は、会社や製品を育ててくれた先人や引退社友を敬愛する。それが率直に表わされることが企業の安定感となり、「終身雇用」の安心感となり、「年功序列」として先輩への敬意となり、「和の絆」の信頼感となり、しごとへのインセンティブとなる。利用者へ最良の製品を提供することをめざす日本型企業の社是であり、国の骨格と企業の品格を支えている。「日本型マネジメント」による生産活動である。

思い起こせば、一九八〇年代には「日本型マネジメントは世界一」（ジャパン・アズ・ナンバ一・ワン）とみていた海外投資家に、二〇年後には日本企業の利益率が低いのは「終身雇用のせい」といわれるようになる。

この間に何があり、何がなかったのか。

原因は「終身雇用」のせいではなく、企業内の人的パワーが弱体化したせいなのだ。個人にはわからないが、知力はともかく、体力も気力も愛社の心も右片下がり落ちてきている。いまでも七〇%以上のわが国の労働者は終身雇用制を支持しているのだが。

企業にとって社員同士が信頼しあい生産技術を共有し、将来にわたって安心して働ける場であるということ、つまり「終身雇用」や「年功序列」といった日本型企業の基本樹形をつくっている「日本型マネジメント」のどこがいけないというのか。

業績がよいトヨタやキャノンだから支えられたのではなく、いずれの企業も根・幹として守ることができるはずの慣行なのである。

いまある企業は、いまの社員のためではあっても、いまある社員のものではない。

先人が敗戦の焼け野原の下に温存されていた根っこから、「生き残る」ために敗戦後の状況に適応させ、試行錯誤を繰り返しながら樹形を整え、枝葉を茂らせてきたものである。苦難の中で模索し、選択してきたのが「終身雇用」であり「年功序列」と呼ばれる企業慣行であった。

それも経緯が穏やかであったわけではない。歌声が胸の奥から聞こえてくる。

大地ばかりか、企業の存続をゆるがすような社内争議を、「♪起て飢えたる者よ・・・」で始まる「インタナショナル」や「♪暴虐の雲光を覆い・・・」で始まる「ワルシヤワ労働歌」を歌って社屋を包囲する労働者側と、受けて立つ経営者側との間で何度も繰り返したすえに形成されてきたものである。だからやわな企業樹形ではない。

先人が戦禍の跡から苦闘のすえに育てあげてきた基本樹形である「日本型マネジメント」を、まるごと伐採してしまうような軽率な改革は避けなければならない。

と、いつて頑なに固定的に捉えることではないだろう。

時流である「経済のグローバル化・途上国化」には、製品も含めて若年層を当てて対応しながら耐えてきたのは、当然のこと、選択として正しい。問題はいまや国民の四人にひとりまで増えて潮流として迎えている「高齢化」に、企業がどう対処するかにある。当然のこと、「現役長生」型の高齢社員と「社友」が協力して対応するよりほかにない。高齢社会が必要とし、高齢期のみならずが必要とする自社製品を提供する。それを成功させることが、先人の苦難から新たな時代に「日本型マネジメント」を作り直すプロセスではないか。

アメリカはなお若年・中年が中心の社会であるが、日本社会は「経済のグローバル化」とともに「経済の高齢化」を合わせ迎えている。その変容にどう企業システムを対応させていくかに苦慮している時に、「日本型企業」の全否定にむかう意見が先行するのは困ったことだ。

伝家の宝刀は高齢社員・社友の「和の絆」

*「日本型マネジメント」の新しい企業樹形

「新商品開発の遅さ、人事異動の不活性、非採算性など、みな日本企業のもつ特殊性です」

といったのけ、個人の能力にインセンティブを期待する「個人主義」や、社内競争による「成果主義」といった手法を導入する。したがって給与も能力優先の「職務給」にシフトして、終身・年功型給与の基本である「年齢給」や「勤続給」を縮小あるいは廃止する。

本稿の立場からすれば、温存すべき「日本型マネジメント」の幹に傷をつけるような愚かな変革にも着手してしまう。わが国の企業風土では、成果を個人に還元する「アメリカ型の成果主義」はインセンティブとして効果を生まない、というか生みつけないだろう。「和」を国家の、企業の、地域の、家庭の根幹に据えている日本を支えているのは「働く人びと」の協働である。企業の活動を弱らせ、企業風土を歪ませ、製品の輝きを失わせてしまうであろう改革に、まず「百年企業」が異議をとなえる時期にある。

導入してみてもアメリカ型マネジメントのもつ脆弱性に気づけば、日本企業の「終身雇用」と「年功序列」がいかに有効な「日本型マネジメント」の骨格であるかに思い及ぶはずである。つまり加速する「社会の高齢化」を支える良質な「高齢化製品」の開発のために、高齢熟練技術者や社友を活用する。その際に年齢差別のない「終身雇用」をわが国に固有の企業インセンティブとして捉え直すこと。そうして初めて「長寿社会」に見合う企業の側の「成長＋成熟」への対応の道が見えてくる。

そのためには外国からはうらやましがられていいほどに好都合な「終身雇用」と「年功序列」という在来の企業風土としくみがあり、世界レベルの経験も知識も技術も気力もある良質な高

齢社員・社友がいるという歴史的優越性に気づくことになる。

繰り返すが、「日本社会」を礎のところ支えていくのは「日本的企業風土」に根ざした「日本型企業」であり、時流に対応する中堅社員であり、潮流に対応する熟練高齢社員である。いま輝いているグローバル化企業というのは、時流による外圧に対応する緊急処置としての業態であり、やがては「日本型企業の基本樹形」に回帰する「宿り木業態」なのである。

日本社会の基盤を支えている「百年企業」に期待しよう。

日本企業の苦境脱出のために、再逆転の思考「高齢社員優遇の再リストラ」をすすめ、グローバル化（途上国化）に対応するために若手・女性・中年者の優遇によってなされた「リストラ」を成功させながら、今度は世紀の潮流である「高齢化」に対応するわが社の「高齢化優良品」の創出をめざして、「高齢社員・社友優遇の再リストラ」をすすめること。

その過程そのものが「終身雇用」や「年功序列」という伝統の愛社意識の新たな表現であり、「日本型マネジメント」の真髓がよみがえる局面である。

「社は」を一段とふくよかな内容にし、愛社意識を醸成しながら「再逆転」に立ち向かうには、なによりも「和の絆」によって培われた製品開発でのわが社の来歴を活かすことだ。これこそが日本企業再生の「伝家の宝刀」なのである。

その四 洋風を回避して和風に戻帰

一 「四季」意識の共有が和風回帰のキイ

「突然に襲う天災」と「温和に包む天恵」

*見失っていた「天恵」を活かす地域再生

「TSUNAMI」は、学術用語に採用されたあと、いまでは国際用語になっている。

「JUDO」や「KARAOKE」のようにわが国が発祥の地とはいえないのに、地震の頻度と被害の大きさが研究対象として知られて、うれしくはない国際用語の本家となった。

時を経て必ずやってくる「TSUNAMI」。

その備えとして、田老町（宮城県）が安心の誇りにしていた高さ一〇メートル、総延長二四三三メートルの津波防潮堤。万全の備えとして広く知られて、「田老万里の長城」として観光名所にもなっていた。

二〇一一年三月一日、東日本を襲った大津波は、一〇メートルをはるかに超えて到来し、まさかの「田老の防潮堤」が破壊されつくしたのだから、地元の衝撃はただごとではなかった。「天災は忘れたわけではなかったが、人知を越えてやってきた」のである。

二〇一一・三・一一大津波は「未曾有の災害」をもたらした。が、未曾有といってもいまだかつてあらずというわけではない。記録にのこる貞観地震（八六九年）を超える一〇〇〇年単位で起こるレベル（LⅢ）の大地震（マグニチュード九・〇）に遭遇したということである。いまここはその「天災」の仔細を述べる場ではないが、大切なことは忘れたところにやってくる「天災」とともに、忘れてしまっていた「天恵」を思い起こすことなのである。

一〇〇〇年単位で起こるレベル（LⅠ）の地震と津波に対する災害対策は、一〇〇〇年後の人びとが享受する「天恵」を無視して実施されては困るのである。災害対策だけを急いだ波高カベは「人災構築物」となりかねない。遠くない一〇〇〇年後に、後人から「ああよく自然の力を知って天恵を活かしてくれた」という感謝の声が聞かれるような対策を願うばかりである。

ここで「天恵」を思い起こそうというのはこういうことである。

わが国はここ一四〇年のひたむきな近代化のプロセスのなかで、一〇〇〇年をはるかに越えて暮らしに息づいていた「天恵」を見失ってきたのではないか、ということ。

それは「四季折り折り」の暮らしを彩る伝統行事であったり、「地域特有」の物産や旬の食材であったり、名も知れない草花や小動物であったりした。「地域の四季」に息づいて、移り変わる暮らしに潤いを与えてくれていた「天恵」を、ていねいに見直して、これからの暮らしに活かすこと。「四季折り折り」の風物の復興が日本再生のキイになる。

「常春」の温度調節が可能なクーラーの効いた部屋で、夏冬なしに暮らしについては、「風鈴のす

ずやかな音色」の理解はむずかしい。

「天災人禍」というとおおげさだが、災いを転じて「地域の四季」の特性を活かす暮らしを取り戻す機会にしようというのがこの章の趣旨であり、地域にもどって「第三期の人生」をすすみなさんの暮らしの豊かさの創出につながる課題であるからである。

ややおおぶりなことを承知で、本稿はこれを「和風回帰」と呼ぶ。

新旧の「双暦」に慣れる

* 農暦・和暦の「季節感」を呼び込む

ここで採り上げる「時節の移りゆき」にかかわる多重標準は、国際標準（グローバル・スタンダード）とされる「太陽暦」と地域標準である「太陰暦」のふたつである。

「太陽暦」のほうは西暦・公暦・グレゴリオ暦ともいい、「太陰暦」のほうは農暦・旧暦・天保暦などとも呼ぶが、どちらかの良し悪しを論ずることではなく、双方の良さをどう採り入れたら高齢期の暮らしを豊かに快適にできるか。つまりふたつの暦「双暦に慣れる」といった柔軟さと謙虚さをもって、「天恵」の復活を試みようということである。

国際標準とされる「陽暦」と地域の農作業のめぐりに根ざした「陰暦」との関係については、わが国では一四〇年前の明治五年二月三日（陰暦）を、明治六（一八七三）年一月一日（陽

暦」とすることで「西暦」が始まった。だから双暦はちょうど一四〇年になる。

その後、農作業や祭事との繋がりが濃かった陰暦を「旧暦」として遠ざけ、陰暦に由来する行事を陽暦になし崩しに移して使いならしてきた。みなさんの地域にも、陰暦から陽暦に移したり、観光用に曜日を移したりした行事があるにちがいない。

「双暦に慣れる」というのは、ケタ違いに長い年月を刻んで親しんできた旧暦の暮らし。農作物の生育と収穫に起源をもつ地域の「季節感」・自然のリズムを取り込んだ暮らしの知恵を、率直に活かして体感して暮らそうということ。

それなしに終わる人生がどれほど殺風景なものかに気づくこと。

めぐりくる「地域の四季」を際立たせること。

一四〇年前、明治初めの外国からの文物の急速な移入は、この国の近代化・国際化に必要なのだし、欧米各国からさまざまに採り入れられた暮らし方は「文明開化」と呼ばれて大きな変化をもたらした。

もちろん平坦な移入ではなく「攘夷」論と国論を二分した推し引きの末である。「開化」のプロセスで四季の移りゆきに根ざしていた伝統行事は、とくに重要なものは各地で頑固に保存・伝承されたが、その一方で、多くの行事が形は残っても本来の意味合いや季節感を失ったものが少なくない。

それでもさすがにお祭りを「洋装」でやる例をきかない。

ここでは意識して「双曆」を重ねて、「暮らしの和風回帰」を試みようというのである。なんでもかんでも再生する必要はないが、一九七〇〜一九八〇年ころまではごく普通に見られた地域の風物、家庭の行事・風習を思い起こすことからはじめればよいのではないか。

「初詣」「ひな祭り」から「七夕」「夏祭り」そして「お月見」「除夜の鐘」まで、春夏秋冬の年中行事としてだれにもなつかしい記憶があり、とくにそれぞれの地域の持っていた特徴、みずからの「四季の暮らし」を呼び起こして大切にしようということである。

高齢期になって地域の季節行事のよさに気づいて、関心をもって参加する人びとは多く、静かにそういう行事をたずねたり、保存活動をしている会も知られる。

「二五年百季」との豊穡な出会い

*「一年」とともに「四季」を折節の基準に

年初の「初詣」から年末の「除夜の鐘」まで、毎年かかさず行なっているが、あの年はこんな・・といった仔細な違いまでを記憶していることは少ない。決めた神社に「初詣」をして無病息災の一年を祈り、定めた寺で「除夜の鐘」を突いて有病有災だった一年を顧みる。

こういう季節ごとの年中行事をおざなりにしてきた暮らしを顧みて、これからの晩期の人生を豊かにする契機を与えてくれるのが、「地域の四季と行事」だと知ること。

毎年、おぎなりに咲いていた花などありはしない。

そう意識することで、住んでいる地域でしか得られない四季折り折りの風物がひとしお感じられるようになる。つまり「地域の四季」が、高齢期を過ごす者に等しく与えられている自然からの恵み、「天恵」なのだということに思いあたる。「地域の四季」のめぐりに身をゆだねること。それだけで高齢期の暮らしが生き生きと変容するものになる。

そのためには、これまでの「一年一二月」に、新たに意識して「一季三カ月」を重ねる。時節のめぐりを三カ月を基本とすること。

時の移ろいの感覚というものは相対的なものだから、ひとつずつの季節をていねいに迎えて過ごすことにより、一年は四倍の長さで変化で充実して感じられるようになる。残り「あと二年」と意識するとともに、残り「あと一〇〇季」と意識すること。これを上手に重ね合わせることが時の移ろいに豊かなリズムをもたらすことになる。

六〇歳（六五歳）から八五歳（九〇歳）までの二五年を、「高齢期二五年一〇〇季」として、「一季三カ月」を時節の区切りとして迎えて過ごす。出遅れた人や新たな展開をまじえて、七五歳から一〇〇歳でもいいし、また思い立って独自に「高齢期一〇〇季」を始めてもよい。

そんな「百季人生」をこれまでの生活に重ね合わせることで、高齢期を「四倍の豊かな時節の変化」とともに過ごすことができる。いいね、クリックである。

たとえば七一歳の春季、夏季、秋季、冬季・新年、七二歳の春季・・というふう

「地域の四季」の変化と素直に向かいあい、「一〇〇季」のうちの一つひとつをていねいに迎えて過ごす。そう考えただけでも心弾むではないか。

これまで一年を平板に流していた日々には、四季を基準として「地域の四季」の変化とともに過ごす日々を重ねて、「双暦」による多重標準を意識して暮らす。これが高齢期の人生を豊かにするのにふさわしい処世法といえるだろう。

「四季」を取り込むSさんの暮らし

*「床の間春秋」など和風のしくみを活かす

Sさんは六五歳直前の定年待ちの高齢者のひとり。

二〇一三年四月の「改正高齢者雇用安定法」によって定年は延びたが、それで新たな心躍るしごとが増えるわけではないし、このまま定年まできちつと与えられたしごとをこなして過ごすつもりでいる。きちつとした高齢社員のひとりである。ここではそれをとやかくいわない。

しごとの外でいま心躍ることがあるからいいというSさんのしごとの外を聞いてみたい。

「心躍るといって大げさですが、季節の催しとの出会いや、旬の料理づくりや、俳句仲間との吟行旅行や・・・です」

ここでのSさんへの本誌の関心は、すでに「一年」ではなく「一季」を基本にして暮らして

いる人だからだ。前章のFさんより一步先をゆく「四季丈人」なのである。

「四季カレンダー」

民家風のしつらえの居間には、重厚なサクラの机にそろいの「MY・チェア」もある。「四季丈人」のSさんは、「MY・チェア」に座って眺められる壁面に、実用を兼ねてビジュアルのしやれた「四季カレンダー」を掛けている。季節ごとの三カ月のもので、春なら三・四・五月、夏なら六・七・八月というように、四季それぞれ三カ月の日付が視野の中に呼び出されていることに意味があるのだという。

年末恒例の東京銀座・伊東屋の「カレンダー展」などをのぞいても、

「四季カレンダーと称するものはありますが、実際に四季ごと三カ月九〇日間のものは見かけないですね。あるのでしょうかが目立つほどにはない」

とSさんはいう。お茶の会とかお華の会とか季節に寄りそうような暮らしをしている人の需要はあるはずだし、身近にあつていい暦なのだから、いずれはカレンダー会社が競って制作する「季節しごと」になる時がくるのを、あわてずさわがず待っているというのが、Sさんのひそかな楽しみなのだという。

「四季カレンダー」はカレンダー展でも見当たらないから、例年入手している馴染みのカレンダーを、四季ごとの三カ月（新年・冬は前年一二〜本年二月、春は三〜五月、夏は六〜八月、秋は九〜一一月、新年・冬は一二〜次年二月）のもの三枚を貼り合わせて仕立てたもの。だか

らよく見ると、月と月の間を貼っていて手製であるのがわかるが離れてみるかぎり、たしかに「四季カレンダー」になっている。

季節行事や旧暦が記されているから、「地域の四季」はカレンダー上に鮮明に表現されている。サインペンの赤マルは、参加する催事や「吟行日」である。

「季節小物」あれこれ

「四季」を取り込む小物や仕掛けを、Sさんは「MY・チェア」に座って眺められるほどよい位置にいくつも配している。年四回の季節はじめにおこなうモノの配置の「季節替え」（中掃除）を楽しんでいる。三カ月の新しい季節を待って迎えて送る楽しみである。

花鉢、紋のれん、玉すだれ、星座図や雛人形、五月人形、鯉のぼりや扇絵、風鈴、蚊やり豚や菊人形、丸火鉢といった「季節小物」の置物や飾り物を入れ替えたり移動したりする。季節の移りに応じて、住い方にかんする春もの、夏もの、秋もの、冬ものを目立たせるとともに、衣・食それぞれの四季の変化をも楽しんでいる。

「茶道や華道も、そろそろ男性回帰の時期ではないですか」

と、Sさんは文化勃興期の変容は男性が主導するが、完成期以降は形式美として女性が静かに支えるという持論を述べる。茶道や華道も双方とも奥さんより上というのが自慢である。

和装もまたしかりで、これまで主として女性の儀式用の盛装として、技術も意匠も素材も職人によって支えられ保存されてきたが、「季節感と地方性を享受する高齢男性」の登場によって、

「モダン変容」をする時期にあると、わが身に引き寄せて熱心にモノ語る。

「床の間春秋」

「どこのお宅にも四季を取り込むために先人が残してくれた仕掛けがあるのに活かされていませんね」

とSさんがいう仕掛けというのは、「床の間」のことである。

和風建築のお宅にはかならず和室に床の間がある。ところが暖冷房機器があって季節感がない。そこで、軸が年中かけっぱなしの一幅だけになる。これではせつかくの「床」が動かずに惜しい。というより無いに等しい。季節の通風を心がけているSさんとこの床の間は、花の軸を「梅」「牡丹」「蓮」「菊」の四幅をそろえて「四季花軸」としているという。

まずは春秋一幅ずつそろえれば「床の間春秋」が楽しめる。それでも床の間は季節で動くことになる。有名画家のものは高価だから、習作期の画家や素人画家の力作に魅力がある。

「ぶんぶんクーラーを回して密室ですごす無季節、無機質な「常春」指向では「床の間春秋」を楽しめない。人生失格ですよ」

そこまでいいですか、Sさん。本稿と「左右同源」のご意見だから拝聴する。

「地域の四季」を家庭内に取り込むこと。切り貼りのないしやれたデザインの「四季カレンダー」が季節の日また一日を伝え、「四季花軸」が床の間を飾り、さまざまに季節小物を配して、繊細に一季また一季を迎えて過ごす。Sさんの「和風」意識によって「地域の四季」が率直に

素材を提供している。俳人の心が身近に動いているのが見てとれる。

いさかさかさやかともいえるSさんの人生目標であり「和風回帰」であるが、「地域の四季」を個人的に享受する心意気が暮らしの形として息づいているのが当然とはいえ新鮮である。

もうひとつ、Sさんお気に入り「エイジド用品」がある。

チクタク・チクタク振り子が行き来するウルゴスの古時計。静かな室内でも、あるともなくある音がいい。いわれるまでは気づかない。

百寿期の「おおきなつぼの古時計」とまではいかないが、形と数字の表現に洋風古淡の味がある柱時計である。振り子の音も柔らかく音楽の領域に達している。

「風鈴がうるさいなんていわれちゃうのは、作った風鈴のほうもいけないですね。現代の日本の製品は音に鈍感すぎる。カメラのシャカシャカは最低。記者会見の時のあれがいいという神経がわからない。ライカにはありえない」

あのシャカシャカ音が忘れられないというFさんを思い出したが、これはここではないわな。古時計の遅れは気がついたところで直すのだという。

傍らにデジタル時計も置いていて、

「二もとの梅に遅速を愛す哉、です」

などと、蕪村の句を挟みながら、Sさんは、新旧の時計の遅速をもまた楽しんでいる。

「祭事・歳事・催事」を心待ちする

*迎えて楽しみ、惜しんで送る

前項では時節の基本を一年ではなく「一季」に置いて、「地域の四季」の移りゆきとともに暮らすSさんを紹介した。特別というより、だれでもその気になればという例として。

「地域の四季」に関わる歳事のうちには、地域の暮らしにリズムをつける催事として、門前（社前）市があちこちで地産品市として復活し、地域の人びとに支持されている。旬の農産物や花卉、植木などとともに、竹製品、包丁、楊枝、めん棒、骨董、古本・など。買い手と売り手との会話がまた楽しい。

だれもが参加して楽しめる「祭事・歳事、催事」をすこし追ってみる。

年初の「初日の出」と「初詣で」そして「書き初め」ではじまり、「初荷」「初午」など初ものがつづいて「節分」。春を迎えて「鶯の初音」「ひな祭り」、サクラ前線を待つ「お花見」、「入学式・入社式」「端午の節句」に「鯉のぼり」や「新茶つみ」。季節が動いて「しょうぶ湯」「七夕」「お盆」に「夏まつり」、全国各地の「花火大会」や「薪能」。そして「お月見」（中秋名月・十三夜）や紅葉前線を追って「紅葉狩り」、「菊まつり」「七五三」と季節は移って、暮歳の「酉の市」「大晦日」・・・。

そんな季節の移ろいの節目を次々に追うのが「二十四節気」。中国の中原地域の生まれなので、

すべてとはいかないが、緯度の同じ日本でも多くが実感をともなうてよく知られている。

立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨

立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑

立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降

立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒

八十八夜、入梅、二百十日や、開花日、初鳴日、初見日といった「雑節・生物季節」など。

先人は、それらを合わせて新しい季節の訪れを心待ちして迎えては楽しみ、名残りを惜しんで送って、また来年。人生の一こま一こまを刻んできた。

日本の民衆文芸として親しまれている俳句の季節感を支えるのが「季語」。そこには時の移ろいとともにも動く季節の突っ先をとらえる感性のエキスが詰まっている。そこで「百季丈人」であるSさんに、俳句仲間ならだれでも知っているという近代秀句を選んでもらった。

まさをなる空よりしだれざくらかな 富安風生

万緑の中や吾子の齒生え初むる 中村草田男

をりとりてはらりとおもきすすきかな 飯田蛇笏

湯豆腐やいのちの果てのうすあかり 久保田万太郎

など、「折り折りの味わいが巧みに捉えられていいものです」とSさんの評。ところが、世の実作家からすれば、句はそれぞれいいとしても、この四句を並べて四季とするとところが俗にすぎるといふ評になる。季の句をといい四季をといわず求めて並べた本誌の軽率さで、Sさんに俗の評を負わせることとなったが、趣意は次のところにある。

俳句は文字づかいにきびしく、句境には天地雲泥の差がある。だから仕上がりの巧拙は風にまかせて、新年・春・夏・秋・冬の五句は「自作秀作五句」として選定して心にとどめておきたい。特に気に入ったひとつは、ひそかに「辞世の句」として内定したりして。

一日の課題を「八方時刻」に振り分ける

*三時間ごとにひとつの課題を据えて

国際標準の一日を二四時間に刻んで過ごしてきたから、一時間の体感はかなり正確である。日ごろ、テレビの一時間番組や十五分ニュースや三分コマーシャルが多くあるから、これらのおおよその長さを体内時計が計算して、日々つつがなく過ごしている。

ここではそれに重ねて本稿がみなさんに推奨するのは、三時間ずつ八つの刻みを意識して一日の予定を織り込んでいく「八方時刻」である。

| | |
|--------|--------|
| 更（ふけ） | 〇～三時 |
| 明け方 | 三～六時 |
| 朝方 | 六～九時 |
| 午前・昼前 | 九～一二時 |
| 午後・昼過ぎ | 一二～一五時 |
| 夕方 | 一五～一八時 |
| 晩方 | 一八～二一時 |
| 夜 | 二一～二四時 |

八区に分けることで、ゆったりとした暮らしの日に鮮明な記憶を残してくれることになる。「更」は五更まであって三更からが日替わりだが、夜更けや深更として日替わりの感覚があるので、それをはじめに据える。「明け方」と「朝方」は異論がないだろう。正午をはさんで「午前・昼前」と「午後・昼過ぎ」そして「夕方」を迎える。

そのあと「夜」までの間を、気象庁は天気予報で「宵のうち」（午後六時～九時）と呼んでいたが、人によって捉え方が違うからという理由で、二〇〇七年四月からは「夜のはじめごろ」に変更した。収まりがよくない。そこで本稿では朝昼晩として実績をもつ「晩方」を据えた。使いなすことで何時と刻まずに、「八方時刻」の八区を実感してほしい。「八方美人」ほど

目立ちはしないが、「八方丈人」には着実な生活感がある。

たとえば某月某日。朝方には朝刊を読んで、学校へ出かける孫にひとこと。昼まえには米寿を迎えた先生に手紙、昼すぎには郵便局と図書館へ。夕方にはスーパーへ総菜を買いにいつてから夕刊を読み、晩方には晩飯をすませてTさんに電話とFさんにファックス。そして夜にはEさんへEメールと読書。夜更かしはしない。

時の過ぎゆきを三時間ごとの八区に刻んで過ごす「八方人生」には、一日を着実に刻んでいくという充足が感じられる。その間、食事・健康に留意し、読書（朗読）・会話で認知症を制し、よく歩くことと雑事をいとわないことで行動力を保持する。

二 衣食住の和風ステージを共作共演

「季節和装」で街をゆく

*各地でモダン変容する「季節和装」

まずは「衣（和装）」の部門から。

「和装」といえば、長着、羽織、帯、野袴、そして足袋、履物。履物は草履、下駄、雪駄。それに襦袢に褌まで。かずかずの和装小物類、さらに財布や名刺入れまで・・・まだある。

京都西陣をはじめ各地の産地（秋田八丈、結城紬、桐生織、東京友禅、伊予絣、博多織、久留米絣、大島紬、八重山上布・）がそれぞれに、地域和装の復興に努力をつづけている。

伝来の意匠や素材を生かした老若男女の「季節和装」が、ふだん着の趣向として各地の街頭に見られるようになるだろう。

いま一〇〇%「洋装」なのにだれもそれを不思議に思わない不思議な時代なのだ。風土に優しい衣装としては「洋装」は仮装なのである。だからぜひたく品ともいえる。

戦前の銀座の街頭の写真をみると、和洋ほぼ半々の街着である。ムリに凝った男性の洋装の風姿に違和感があった。男性の和装はふうの人のふだん着として登場している。そのころの地方の街にも「和洋混交」が街の雰囲気闊達にしていたにちがいない。

風土に似合った「和」と外来の「洋」とは半々くらいがいい。とくに男性の「和装街着」は、急テンポで容赦ない近代化の過程で、欧風スーツとシューズによつて、「モダン変容」の機を得ずに街頭から追放されてしまった。今日では一〇〇%の洋装を着こなしている。逆に男性の和装はぎこちない。これをヘンだと思ふ感性をだいにしたい。

和装はわずかに男性の「袴」や女性の「晴れ着」として儀式衣装に閉じこめられながら、意匠も素材もそして何より高度な製作技術をもつ職人も、生産地のみなさんの努力によつて保たれている。それらを引き継いで後代に残すためには、「モダン変容」を機とした「地域和装街着」の復活が急がれるのである。和装の「モダン変容」は、まず高齢女性の和装ファッションショ

ーとして始まっている。

衣は「地域の四季」をもっとも率直に表現できる分野。地域に残されている意匠や素材は、どんな些細なものでも「四季の衣装」に素早く取り込んで生かすことができる。つまり従来の形や素材を大切にすると地元住民の衣装への趣向が仔細に発揮されているうちに、「地域和装街着」という地域ファッションが登場することになる。

リードするのは、季節ごとの衣装を「洒々落々」に楽しむ「和装丈人」のみなさんである。移ろっていく季節に対応する合わせ、単衣、薄もの、単衣、合わせへの変容を、地元の意匠と素材とで繊細にとらえた「地域和装」は、何より肌に心地よく、着けて楽しいものになる。

こだわりなく着用して街をゆく和装姿が、僧衣と作務衣だけではない、心もとないではないか。いかにも窮屈そうな女性の晴れ着や男性の袴姿ではなく、着付けも自分でできて、カミシモを解いたふだん着への和装回帰が、本稿が希求している衣の情景である。丹後ちりめんの産地での「ゆかたを楽しむ月間」などは、いいね、クリックである。

身近な問題なのに、あまり実現されていない衣の暮らし方がある。春秋の「衣装の着替え（衣替え）」の習慣をつくり直すこと。「衣の季節表現」として取り込んでゆくことで、夏もの、春もの、冬ものの四季三分類による「四季衣装サイクル」が完成するからである。

地域のみなさんと衣装づくりに通じた人びとが、「地域街着」のために「折り折り思考」を働かせることで地域独自の形ができていくのだろう。

「ローカル街着」の国際性

* 反バリコレの和装ファッション

ここでもいうが、わが国の衣装として、「洋装（欧装）」は仮装であり、一〇〇%の「洋装（欧装）」を不思議に思わないのは、不思議なことなのである。

「洋装（欧装）」の基本は、なんとといっても「北方（狩猟）系衣装」である。

だから活動的だし、冬の寒気をしのぐにはいいのだが、わが国の湿気の多い夏の日中にだれもお遊びにしか見えない。もっと気楽に夏の風情がかよう「南方（農耕）系衣装」の意匠と素材を採り入れた衣装がいい。衣替え意識の根が浅すぎる。

前世紀には、日本和装だけでなく、どの民族衣装も魂を失って「欧装」に取り込まれた。

「エスニック」や「サファリ」といった「らしさファッション」がそれで、本国で暮らす人びとの衣装は、着る側からいって「地域和装」に属する。「欧装」もそのひとつなのである。

なにより「欧装」がというなら、日本伝来のお祭りを「欧装」でやってみたらいい。

遊牧の民の衣装なども明るくていかにも開放的である。だから迎える側も「日本和装」で応対するのが自然なのだが、「欧装」の正装によっている。お互いにそれを不自然に思わない。こ

ここにも「衣装の多重標準」を率直に活かす転回がありうる。

ここは本稿の不得意の課題だが、避けて通れないので、齒に衣を着せずにいわせてもらえば、優れたわが国の衣装デザイナー（森英恵、川久保玲、コシノジュンコ、高田賢三、三宅一生、山本寛斉、山本耀司・・）が、ヨーロッパの衣装のために日本的な素材と意匠と才能を提供してきたが、今度はわが国の風土に似合う衣装のために、世界のトップ・デザイナーが、「日本和装のモダン変容」を競う場としての「トーキョー・コレクション」を開催するくらいではないか。そうして初めて、ヨーロッパ中心の「洋装（欧装）」指向から脱した、おおらかな国際性のある衣装の世界が開けてくる。

このレベルの和装なら国連の場で日本の首相が披露するのもいいだろう。

はっきりと「衣装の多重標準」を意識したステージを演出して、黒人モデルが「洋装（欧装）」を超脱した「ネイティブ」の衣装を着けて、いきいきと登場することのほうに、だれしも豊かな国際性を感じるだろう。もちろん、なかに「欧装」も含まれる。いまなら日本シニア・デザイナーの総力で、「トーキョー・コレクション」のステージで、そういう流れをつくれるはずだ。

二〇世紀を風靡したのが「洋風（欧風・パリコレ）」のファッションだった。新たな世紀での世界各地での「地域和風」の登場が次のステップ。晴れの場合は「トー・コレ」である。

そんな大それた話はこちらまでにして、身近な話題にもどろう。

地域素材と意匠を活かした「和装街着」が各地で競われて話題になる。隣家のジージが「春

の街着ベスト・ドレッサー」なんてあっていい情景である。

海外の姉妹・友好都市から素材や意匠を移入して個性的な「ローカル・ローカル街着」をつくり出せば、欧風とは違ったファッションで地域の街がはなやぐ。街着は和洋折衷がいい。

「自作旬菜料理」でもてなす

*「厨在丈人」の銘入り出刃一丁

次は「食（和食）」の部門。

「和食」はユネスコの「世界無形文化遺産」（二〇一三年一月）に登録された。

「鎌倉は 生きて出でけん はつがつお」（芭蕉）

なんて旬の旬を口ずさみながら、水気を切った旬のカツオの一切れに、香ばしいシヨウガ・ミソを載せてほおぼると、江戸前の旬の旬の風趣とともに味わうことができる。美味である。

これまでは一日置いてセリにかけていた魚を、小田原水揚げの直後に搬送して朝の東京の市場でセリにかけ、当日中に食べられるしくみも動きでした。

季節なしの冷凍食材への恩恵はそれとして、季節の恵みと先人の食の嗜好を伝えるのが、四季折り折りの旬の食材を生かした「季節料理」。そんな料理もまた外に求めるよりは、みずから「厨在丈人」として食材探しにゆき、みずから包丁をとって調理に立つ。「わたしの旬菜」が折

り折りの食のシーンを賑わすことになれば、高齢期の人生はいよいよ豊かに楽しいものとなる。「旬菜」といえば、当日入荷した食材によって「メニューなし」で供する「旬菜料理」をウリにする店が増えている。熟練の板前が丹念に調理する場で、畑土に配慮して丹精してつくった農作者の工夫や食べごろの獲物を海に追う漁師のこだわりを、菜卓（カウンター）をはさんで語り合うのは、伝承してきた日本の「和食文化」の最良のシーンである。

食は「医食同源」の立場から素材と調理法の蓄積が進んでいる分野である。といっても昨今のTV料理番組のように、レシピで効能をあれこれこだわって、「耳視目食」に陥ることはない。近所の魚屋へ行って、主人と話しながら、季節を伝える旬の食材をさがして「自前薬膳」に仕立てあげればいいことだ。地域のレストランで、季節メニューの中に「地場薬膳」を発見したらこれは素材をしっかりとキャッチしておきたい。来年のために。

高齢期ともなれば、心待ちして待ち、時節とともに現れる新鮮な素材を求めて調理した自作「わたしの旬菜」を試みる。さらには「厨在丈人」として、旬の素材を吟味して「自前薬膳」を考案する。時には朋友を招いて、できたての「自前薬膳」を前に「しずかに新酒の数盞を嘗め、酔って旧詩の一篇を吟じる」（白居易）のもいい。季節の恵みによる贅をつくした食のシーンが楽しめる。高齢男性が「食」を知らないでいては、いつまでたっても女性との長寿の差（平均寿命は女性が八六・六、男性八〇・二）の六歳は縮まらない。

五〇歳をすぎてシニア期に入ったら、女性も男性も、健康状態（からだ）を年齢より若く保

つ「アンチ・エイジング」のために、志（こころざし）を立てて厨房に入り、調理（ふるまい）の腕を振るうことにしよう。これこそ体志行の三つのカテゴリーの実践の現場となるからだ。

意を決した「厨在丈人」として、ここは格好よく形から入ることにしよう。

まずは日本橋・木屋や京都・有次あたりの包丁三丁（出刃・刺身・菜切）を吟味して入手する。「銘入り出刃一丁」は、頼りになる「高齢化コア（核）用品」である。脇に置いておいて奥方の無銘包丁や娘の卒業記念の包丁の前で、それだけでも存在感がある。タイまではいかなくとも、中型のイナダやシマアジなんかを手ぎわよくおろして食卓に供する。「厨在丈人」による手前半丁という情景である。

さらに「旬の食材」はみずから用意する。

どこの商店街でも鮮魚店だけはしっかりと営業をつづけているから、出向いて仕入れる。今夜の口楽であり生涯にわたる悦楽である食の道楽。味覚とともに調理もまたきわまりなく熟達しつづけていく「丈人型能力」なのだから、おおいに腕を振おうではないか。同居人が期待するような季節メニューがひとつ又ひとつ増えれば、口楽の成果は倍になる。

あとは食器、用具の類。これは形や感触を楽しめる専用品となる。自作を含めて「これはパバのもの」という食器が、食のシーンでの存在感を示す。その際には同居人のもとの調和に配慮すること。品性のがよう柔らかな存在感。費用対効果の高い逸品が探せばいくらかでもある。「厨在丈人」によるキッチンの「高齢化ステージ」は、なごやかに形成すべきテーマである。

得意料理を得意がってつくるところから入らず、食器の片付けや用具の手入れや調味料の整理あたりから、さりげなくそれとなく構築していくことに秘訣がある。「能ある鷹」として。

「口楽文化人」のたまり場

*歌う、しゃべる、食べる三楽がカラオケ文化

食べてしゃべって歌うというのは、口が求める三つの楽しみであり、「口楽文化」ともいうべきもの。カラオケ店は、歌ってしゃべって食べて、三世代がそれぞれに、またみんなして、こよなく愛し育てる街の文化娯楽施設なのである。そのカラオケ店に勢いが無い。

若者受けを狙って新曲をウリにしたり、やすく提供するために曲想と関係のない映像を繰り返す。これではカラオケ本家としては恥ずかしい。「カラオケ途上国化」というより本家の衰弱化ではないか。施設としては年齢には関係がないのだが、歌う曲、つまり流行歌には世代によって違いがある。みんなが歌える国民歌謡といえは「童謡」くらいなもの。高齢者には戦後歌謡があるが。

どうだろう。戦後の歌謡曲を歌い続ける「昭和歌謡全国大会」を毎年開いては。

「リンゴの歌」「東京の花売娘」「夜霧のブルース」「港が見える丘」「夢淡き東京」「山小舎の灯」「星の流れに」「君待てども」「東京ブギウギ」「フランチェスカの鐘」「異国の丘」「湯の町エレ

ジー」「憧れのハワイ航路」「君忘れじのブルース」「東京の屋根の下」「トシヨ節」「青い山脈」
「銀座カンカン娘」「かよい船」「長崎の鐘」「悲しき口笛」「玄海ブルース」・・・。

戦後日本の歌謡曲は、歌詞も曲も世界に誇るべき「平和文化遺産」である。平和の証として歌い継ぎながら、文化施策として「カラオケ」を残すのも文科省の役割といえるだろう。

一部に「シニア専用ルーム」(VIPルームではない)があつて、シニア・ソングの人たち(口楽丈人)がたまり場にして、「歌う、しゃべる、食べる」(うるる三楽)ということになれば、ここは三味一体の「シニア文化圏」となる。

「年少と春風を争わず」

ここは新曲を避けて、好みの曲を選ぶことができ、映像にも工夫をこらし、味覚にも配慮した食ダネを揃えて供するカラオケ店なら、シニア世代にとっての与楽効果が満点の町の文化施設である。「口楽文化」の支え手としてレストラン系カラオケ店の「うるる構想」に期待しよう。

大都市には公営「国際カラオケ館」があつて、世界中の歌を集めて外国からの客人をもてなすことができれば、文化技術立国日本の「口楽文化」の拠点として、抜群の広報効果がある。高齢社会のための技術を研究開発する「ジェロント・テクノロジー」は、ロボット開発が主流のようだが、国際的「口楽文化」を日本「口楽文化人」の「うるる」嗜好がリードし、内容を蓄積していくのは愉快的な情景である。公立図書館なみに公立カラオケ館が各地にあつていい。

「四季型（和風）住宅」の工夫

*近代化の暮らしに地域特性を加味

次は「住居」の部門。

古来、わが国の住宅は、「地域特性」を活かした素材や様式をもち、「季節感」を巧みに取り込みながら、一年を通じて過ごしやすい工夫をこらしたものだ。風土に適応した大地の變化とともにある住まいといえる。いまでも古都の町屋や各地の古民家として、実物がたいせつに保存されていて、みなさんもそういう古風な和風住宅を活用した旅荘やレストランなどで、「風土が息づく住まいの良さ」

を実感したことがあるにちがいない。

冷暖房付きのプレハブ住宅に住んでいるうちに、みんながそろって忘れてしまった「地域」に根ざした素材や様式。風土の特質を活かした通風型の民家の味わいを、いまに引き継ぐ「モダン変容」の住宅が、現代の匠たちによって再現されていることに注目しよう。

「高齢化住宅」については、国の対策がもっともすすんでいる分野とわかっていい。ただし、高齢化があまりにも急速にすすむなかで際立つのが、単身か夫婦のみ世帯用住宅。対策として、バリアフリー構造を持ち、介護・医療と連携して支援するサービスを提供する「サービス付き高齢者向け住宅」（国土交通省住宅局安心居住推進課）が中心となっている。厚労省との共管事

業として、事業者への税制上の優遇・補助などを行なっている。それはそれとして。

本稿では趨勢を横に見ながら、これから高齢期を迎える五〇歳代の準備期のみなさんに、実現してほしいありようとして、「三世代同等同居型」住宅という耐久性に優れた個人の住まいを取り上げた（p・80）。家族それぞれの生活感覚やプライバシーに配慮したもので、ここではさらに季節にも対応した「三同四季型（通風）」住宅を取り上げることにはしたい。実現するにはいろいろな制約に阻まれることにはなるだろうが、住宅に対する基本的な考え方としてまず納得してほしいところだからである。

高齢期の暮らしのための豊かな生活空間の形成は、和洋折衷の多重意識をはたらかせることによる「つくりつけ」の長所の発見からはじまる。

ドアと障子、フロアと畳・床の間、ベッド、イス、クローゼットと押し入れ・天袋、吹き抜け、広い靴脱ぎ、幅広い廊下・・・数え切れないさまざまな電化製品の処遇。そしてテレビとIT機器の個人化、これがデジタル・デバイド（情報格差）を生んで、暮らしの場の意識を一変させつつあることも確かである。

日進月歩の科学技術はひとむかし前、なつかしい昭和時代の「3C（Car, Cooler, Colour Television）」をもたらした。マイカーは行動範囲を自在にし、クーラーは「住」環境に安らぎをもたらし、カラーテレビは「知」の領域を広げた。その先に限りない暮らしの夢があった。

この国の標準住宅としては、洋風プレハブの全室冷暖房つき「常春型（エアコン）住宅」が

主流となっている。施錠ができ、機密性が保たれ、常温が得られる住宅構造（すきま風のこない家はうれしかった）に。とはいえ、「常春型（エアコン）住宅」が快適さのすべてではないということを、原発問題と「でんき予報」が知らしめるところとなっている。

「住の和風回帰」とはなにか。ここはわがこととして真剣に対応してほしい。

かつて大正時代に和洋折衷の「文化住宅」があった。和風住宅に洋風の一室をしつらえたもの。いま逆に洋風の住宅に、しつかりと障子、襖、畳、床の間、天井つきの一室をしつらえたこと。床の間に季節の花を生け、季節の軸を懸けて、日本の伝統とみずからの人生に思いをめぐらす居場所として。そして、ここを寿終のときを迎える「寿終正寝の間」とすること。この「新・文化住宅」の形成が、現代の「住」の和風回帰なのである。

「四季型（通風）住宅」の工夫

* 外向的に折り折りの風を取り入れる

「常春型（エアコン）住宅」と「四季型（通風）住宅」。住宅としてどちらが繊細に季節感を活かしながら暮らせるかはいうまでもない。「常春型（エアコン）住宅」を「四季型（通風）住宅」にして使いこなすのが、「未来志向の住宅」である。現代技術の成果を活かした太陽光発電を利用し、冷暖房付きにした住宅を「通風型」にすることで、電力を節約しながら季節の変化を享

受する暮らしが可能になる。これを可能にするのは、「四季」を時節の基準と考えて暮らすみなさんならおわかりだろう。だれでもいまからできることなのである。

東電の「夏期でんき予報」を見て、自宅の太陽光発電電量を見て、電気使用の判断をしている家庭があるようだが、それを四季につなげていけばいい。

内向きに閉じた「常温型住宅」に住んでいけば、だれだって気づかないうちに内向きの思考、指向になる。そこで「地域の四季」つまり外界と向きあうたたずまいを持った住宅への回帰を試みる。これがこの国の「住まいの良さ」の本流なのだ。

地方へゆくと、緑地の多い住宅エリアに瓦屋根のしつかりした母屋と新築のプレハブ住宅が同じ敷地内に建てられているのを見かける。「敷地内近居」である。親子二世代の住み分けだから、「三世代同居型」住宅とは異なるが、二世帯の家族同士の「季節感」や「地域性」への関心と配慮が、庭などを通じて外向きに表現されている。このあたりに街と住宅の中間領域に、空間を閉ざさない開放的で外向的な家並みを実現する可能性がみられる。

新築や改築にあたって、個別に工務店側の技術者と、出窓、ベランダ、テラス、バルコニー、坪庭など、「四季型（通風）住宅」への細部の検討がなされれば、その成果が共有されて、時をへて和風住宅をつらねた外向きの家並みが形成されていく。

人びとが「地域の四季」を時節の基準と意識することで、地域の住空間の「和の絆」の姿が街並みとして見えてくることになる。

内向きに閉ざした「常春型（エアコン）住宅」での暮らし方を少しずつ修整して、外向きに工夫をこらした「わが家」が増えることによって、三世代がそれぞれに家の内でも外でも暮らしやすい家、家並み、街並みが姿を現わすことになる。

新幹線の車窓から「地方の四季」を表現する地域特有の「外向的街並み」が眺められるようになれば、この国は本来の風土の特徴を活かした美しい四季折り折りの景観を回復したといえるようになる。「千里の道も足下から」である。それなら「千戸の街も各戸から」である。一画また一画、「地域の特性」が息づく住宅を作りつづけるよりほかに道はない。

「二五年百季」のわが庭を公開する

*「地域の季節」をみんなで楽しむ

季節とともにまわり舞台になるわが家の庭、「劇場四季の小ステージ」を演出するのは、いうまでもなくあなた自身である。庭木それぞれにそれぞれの四季たたくまいがあることを知らないで演出などできるわけがない。年に一度、植木屋さんに剪定を頼むだけ。木の名前も知らない。手入れの大道具・小道具など何もない。これでは地域参加などできるわけがない。

そこでまずは出演者である庭木それぞれの特徴を知ることから始める。自治体の生涯学習や庭いじりの業の要所を習うことになる。スーパールの園芸係員も詳しい。自治体の生涯学習や

高齢者大学校には必ず「園芸」科があるし、クラブ活動もある。そして頼りになるのが近所の先輩である。

若手の「百季丈人」（高年前期）であるSさんの場合は、隣に住むベテラン「作庭丈人（高年後期）」のGさんに習いながら、花期や実入りに配慮した植栽を手がけている。植物が繊細に表現してくれる「二五年百季」の庭にひとつずつ迎える「四季の庭」を実感しながら。

街並みにかかわる庭木のうち、高木は周囲と合わせて土地にあったものにし、狭いながらも庭は、四季折り折りの変化にまかせている。こんな街なら紛れ込んだ旅人も安心して時を過ごし、思い出を得て立ち去ることだろう。穏やかに風物が息づく街だからである。

全国各地には「季節の花」が名所になっているところは数知れない。

多くは観光協会などが管理にあたっているようだが、関係している人びとの数も知れない。梅や桜の名所は全国的に分布している。それとともに、寺院や個人の持つ庭園が「季節の花」のころに入場料をとって公開されて、「地域の季節」を楽しむ人びとに支持されている。梅、桃、牡丹、菖蒲、薔薇、紫陽花、藤、菊などの「わが庭の公開」が次々に話題になる。もちろん果樹の場合には、摘果による楽しみが加わることになる。

豊かな四季の変化を地域のみんなで楽しんで過ごす。すばらしい「天恵」とともにある人生ではないか。

三 中心街は「モノと暮らしの情報源」

どうなる変幻自在な商品流通

*二四時間営業の明かりは頼りになる

「みんなに親しまれる商店街」

という横断キヤッチフレーズが、いまもM市駅前通りの入り口に掲げられている。

が、シャッターを下ろした店舗が目立つ商店街からは活気が間引かれていて、こちらの親しむ気持ちも間引かれる。つい先ごろまであれほど住民に親しまれていた商店街だったのに・・・。

「ここまでさびれちまった商店街にもう未練ないね」

と通りすがりの人から言い放たれるのが、一般的。

「シャッター通りには期待しない、コンビニとスーパーがありやいいじゃんか」

と若者からは無視されるのが、風潮。

たしかに訪れて親しむみんながいなくなった商店街を歩いていても楽しくない。駅から市役所への往復の道でしかない。残っている店からの吸引力もない。こうないないづくしでは、歩いていてもやりきれない。でも底を打った感もないではない。地の底が動く気配がする。

いまものを買うだけなら、家にいたってインターネットの「電子モール（商店街。楽天やa

mazonn)」で何万件もの商品に出会える。購入はクリックするだけで、明日にもクロネコヤマトか佐川急便で宅配される。ほかにテレビ・ショッピングや通販。クルマで町外に出れば、バイパス沿いにケバイ広告の大型スーパーやちよつと休めるファストフード店があり、町なかには駐車場設備のあるコンビニが網をはっている。

スーパーの明かりが消え、パチンコ屋の営業が終わり、最終電車が着いて駅舎に人が動なくなつたあと、明かりがつづく二四時間営業のセブンイレブンやファミリーマートやローソンは、頼りになる生活拠点なのである。やや親しみに欠ける警察や、やや頼りがいのない宿直員だけの役所よりはずっと。

変幻自在な商品流通の包囲網。そのなかで駅から旧市街へと通じるM市駅前通り商店街は、じわりじわりときびれるにまかされてきた。再生への契機もないまま、商店街はどこも成り行きにまかされてきたように見える。利用者や歩行者には見えない内部努力の末のこととして。

移動がクルマ中心になる一方で、マツクの店が増えた。その後、日用品が国産から安価な途上国製品になるという経済変動の「国際化」にさらされて、長く住民に親しまれてきた商店街は求心力を失い、半歩一歩、顧客の足が遠のいていった。国産の優良品が途上国産の途上品・中流品に変わっただけで、日用品に途切れが生じたわけではなかった。生活感性の高い中・高年齢者がまんすることになったが、ふつう品で安ければそれではまんはできる。それがアジアの大衆が先行していた日本に追いつくプロセスであると思えば、文句のいいようもない。

商店街は「モノと暮らしの情報源」だった

*「地域の顔」も店じまいしたシャッター街

M市駅前通りに限ったことではないのは、懸命な自助努力にもかかわらずどこも同じ「ガイアツ」に屈したからである。貿易不均衡によるアメリカでの日本製品たたき（日本車が壊されたり燃やされたりした）があり、日米構造協議があり、「大規模小売店舗法」改正からはじまった「まちこわし」は、いまやアメリカ商品より途上国製品を売りまくるスーパーの徘徊で極まっている。商店街をまるごと取り込んでしまうような大型ショッピングセンターまで登場。いまや旧来の流通網では攻めるも守るも手立てはないのだが、生活感性が高く、優れた日用品を求める消費者からは見放され、行き着く先は見えている。同時にからだに感じられる程の微震だが、商店街は動き出している。

一九八二年が小売店のピークだったという。そのころは全国に一七二万店、商店街は一万四〇〇〇カ所あったという。商店街の数もそうだが、街に人をひきつける活気と魅力があった。商品ばかりか人生の先達があちこちにいて、元氣も知識も割引もしてもらえたのである。

歩行型の住民にとって「モノと暮らしの情報源」であった中心街の崩壊が、二〇〇三〇年で住民から何を奪い、何をもちたらしめたのか。二〇〇三〇年後に何が必要とされるのか。

再生への努力は実にさまざまに試みられているが、後継者のことまでを考慮すると、なお頑張って営業をつづけている老舗といえども猶予はない。

明らかな「構造の問題」だったから、商店主の努力では太刀打ちできない。

まず細々と商いをしてきた小売店で儲けが出なくなり、投資ができなくなり、将来に魅力を失って後継者がいなくなった。原因は商店主の才覚の有無に封じこめられ、商店主は煤を払った神棚にむかって、何代目か前の創業の先人に不明をわびながら店を閉じたのだった。

自家用車が増え、じわりじわりと鉄道客やバス客が減りつづけて、商店の店じまいの時間が早くなった。それとともに商店街に防犯用シャッターが増えた。シャッターに絵を描いたりしたが、街を歩く人びとへの親しさを閉ざしたのはまず商店街のほうだった。めっきり人通りが減り、店内で話し込むお客の姿も少なくなった。

中心街の道筋の中心にどっしりと店を構えていた地元資本の古手の商店までが、「え、あの店も?!」といった話題になりながら消えていった。

まことに惜しまれるが、もはや再生が不可能な商品もふくまれている。その中には江戸期からの歴史を持ち、「地域の顔」を支えていた特産品の老舗が含まれる。和紙・毛筆・べっこう・陶磁器といった工芸品の店や、呉服・家具といった伝統品を商っていた有名老舗までが次々に看板を下ろしていったのである。地道に地方出版を手がけて、地域文化の拠点だった老舗書店も、大型店舗の駅前出店のあと、しばらくしてひっそり灯りを消したのだった。

そして地方の流通を支える砦であり、地域住民に馴染みの濃かった地元資本の百貨店、たとえば宇都宮市の上野百貨店や和歌山市の丸正百貨店といった有名店舗の経営不振が伝えられるのと前後して、M市でも地元資本の有名百貨店と家具店が同じころ倒産した。市民に商品流通の変貌と再開の不可能なことを決定的に納得させることになった。

二〇年ほどでこうも変わるものか。ではこれから二〇年でどうすればいいのか。

「歩行生活圏」と「車行生活圏」

*歩行圏の中心街に集うのは高齢者

全国のまちづくりの中にも、「歩くまち」をテーマとしている都市がある。

秩父市、倉敷市、安来市などがそう。高齢社会への移行を見越して、「買い物空間にとどまらず、心地よく歩いて過ごせる時間消費型の生活圏をめざす」として、街を歩行者モール化する都市もある。訪ねていって成果を見てこよう。ライド・アンド・ウォークでいい。

地域のまちの中心街については「歩行生活圏」として構想し、「車行生活圏」との住み分けを明解にする必要がある。「歩行生活圏」のおもな利用者は、日課として小一時間ほどの散策に出動し、使いたれた生活小物や茶菓を購入し、店主や出会いを約束した知人と語り、暮らしの情報源としている高齢者。日用の買い物と井戸端会議をする子連れの女性たち。そして安全な

「居場所」でスポーツやゲームや読書・芸能を楽しみ子どもたちである。

「街に子どもの姿や歓声が聞こえないようなら活性化に明日はないですよ」

と商店会を代表して中心市街地活性化の「基本計画」作成にも参加しているUさんは熱意をこめてそう語る。その通りである。その安全な居場所をどうしつらえるのか。

そこは日課としてやってくる元気な高齢期の人びとと子どもたちがいっしょに過ごせる「歩行生活圏」の出会いの場となる。役所や公共施設や「地域包括支援センター」も至近の距離にあるだろう。子ども子育ての重要な拠点となる。

祖父母と孫が、母と子が、女性同士が、安心して散策や買い物やおしゃべりや居場所として過ごせる「世代交流のステージ」である。

街の中心街（商店街）の大事なテーマに、子どもたちの居場所づくりがある。

たとえば遊具を固定せず子どものアイデアで変化させる児童公園（まっ白い広場づくりなど）や「一八歳以上お断り」といった「ブック&ゲーム・センター」。後者なら好きな本やメカやソフトに存分に触れながら、友だちと歓声をあげて楽しめる。そんな子どもたちのための安全な居場所づくりは、次世代を育て、街を活性化する中心街の重要なテーマである。

こども園や小学校を終えて、塾がよいなどのほかに、週に何日かはこういう街なかの施設で仲間と夢中ですごすことも成育の過程ではたいせつなのではないか。

「三世代四季型中心街」をめざす

*日課でおとずれる「買い物十遊歩空間」

まちづくりの中に「歳時記の感じられるまち」（長岡市）や「歩いて楽しむ街、四季が感じられる街」（盛岡市）をめざすところがある。「わがまち」を論じるとともに、一歩進んだそういう街を訪ねて歩いてみるのもいい。

中心街でもある商店街の催事は、これまでは「中元」（夏）と「歳末」（冬）の二季だけだった。それに春秋を立てて季節ごとの「四季の催事」として構成し直す。住民が季節ごとに街空間の変化を楽しみにしてくり出し、さらに次の季節への期待を抱けるような「四季のステージ」の演出に、商店街の賑わいを取り戻す契機がある。その演出者は地元「街元気リーダー」である商店主と高齢住民が担う。二季型から四季型へ。そしてさらに「三世代四季型中心街」へ。「三世代四季型中心街、生き残りはこれですよ、Uさん」

しかし萎縮（デフレーション）した商店会を元気にするはずの立場にいるUさんは、理屈としてはわかるが、年二回でさえもすぐ次がやってくるというのに「年に四度はムリ」という。「ムリして二度ではなく、ムリなく四度です」

地域の隅々をよく知る「地識人」のみんがお手伝いして「季節ごと四つのわがまちの景観」を街空間に取り込んで賑いを呼び戻すのだから、といってもUさんは首をタテに振れない。M

市駅前通りは先駆を切れなさそうである。

四季折り折りの地域の風物を取り込んだ春・夏（中元）・秋・冬（歳末・新年）を表現する季節の装飾をほどこすのにムリなはずがないのに。

「三世代四季型中心街（商店街）」の演出のために、わがまちの歴史・伝統、産物、風物、人物、文化、芸能、技能といった「地域の特性」に目を配り、「わが中心街」の態様として取り込む。こんなまちづくりを、わが人生と重ね合わせる高齢者ならいくらでもいる。「エイジング・イン・プレイス」の愉快的現場がそこにあるはずだから。

商店街の役割は、地元住民が必要とする商品を頼めば手にはいるユーザー優先の流通である。そういう要望を取り入れた新たな流通拠点が、地元生産者と商店会と商店主と高齢住民が協議して運営する「地域流通スクエア」といった形態の「みんなのためのおみせ」である。

お互いに「カオが見える流通」の拠点であり、商品性の高い「地場（季節）商品」を主力商品としながら、スーパーやコンビニでは入手できない「超スーパー・コンビニ商品」を提供し、サービスで地域の人びとの要望をサポートする。商品知識の豊かな店員がいて、住民からの注文と配達を一手に引き受けてくれる。自治体とも対応して介護者への物品の配達もおこなう。

地元住民が必要とする商店、公共機関・施設の情報をネットでむすんだ「中心街の中心核」として、「地域流通スクエア」のような施設を成功させること。

そういう「みんなのおみせ」を組み込むことで、「商店街の求心力」をつくりだす。二四時間

営業の「(超)スーパー・スーパー」機能をもつ頼りになる営業拠点が登場する。

ここで「歩行生活圏」の「三世代四季型中心街(商店街)」のようすをスケッチしてみよう。町全体が「地域の四季」をたいせつにするようになれば、その中心街にも色濃く反映される。

地産品をはじめさまざまな季節用品が集まる。街の伝統行事や風物が公開され広報される。そして次の季節の訪れが待たれるようなステージ、それが「三世代四季型中心街(商店街)」である。そういう姿になれば、途上国産商品の「車行生活圏」と共存する地産(季節)商品の「歩行生活圏」として、「わが街の商店街」が再生され、四季の暮らしが創出されることになる。

「商店街って、おもしろいじゃん」

と、通りかかった無季節・無機質そだちの若者たちがいうだろう。

住民みんながそうして過ごすうちにシャッター街は近隣に住むだれもが小一時間ばかり、遊歩(散策)や買い物や語り合いのためにやってくる「モノと暮らしの情報源」として回復する。

「季節の風物」に安らぎながら、ふと出会った知人とひとしきり気軽に談話を楽しみ、お菓子屋のテラスで一杯のコーヒーと店自慢自家製ケーキで手造り味を味わい、あるいは茶を商う老舗で一服のお茶と和菓子で「甘余の味」を味わう。和風街着で訪れて、ひとときお国ことばで語りあい、暮らしの声や音を快く聞き、子どもたちの遊ぶ姿を見、歓声を聞き、街の臭いを胸に収めることができる街。だれもが小一時間ばかりやってきて、みんなでつくるそんな「三世代四季型中心街」なら、今日にでも行ってみたい。

その五 高齢期二五年の居場所づくり

一 「こ」が「エイジング・イン・プレイス」

高齢期二五年の居場所づくり

*「ふるさと生活圏」の再興に加わる

夜空に舞うホタルの光は、過去に出会って見失ってしまった何かなつかしいものを思い起こさせる力を持っている。外交官（ポルトガル）を辞した後、徳島に住んだモラエスは、闇に弧を画いて飛ぶホタルの光に、先立ってしまったふたりの女性を実感した。

「おヨネだろうか、コハルだろうか」

ホタルの飛翔は終わることのない何かへのリード・ライトなのだろう。

「水は清きふるさと」のシンボルとして、「ふるさと」を蘇らせるものは何かを探っていた人たちによって、ホタルは全国各地で蘇った。「ほたるサミット」も開かれている。

春になると、きまって蠢動（字づらも音もいい）していた小さい生きものたち。そのうちの何かの姿を見せなくなる。目の前で次々に失せていくのだが、季節に鈍感になった人間は、そんな小さな「自然環境」の変化に気づかない。自分の生とかかわりがないと思っっている。

おおいにかかわりがあるとするとする人びとが拠るデータが「環境省レッドリスト」である。その平成二五年版によれば、日本で絶滅の恐れのあるものは一〇分類群三五九七種。そのなかに、なんとニホンウナギまで含まれた。

ウナギが絶滅？ かば焼きと肝吸いがなくなる？

ここまでできてやつとドツキリ。朱鷺・トキ *nipponia nippon* の絶滅（二〇〇三年、キングが最）のときには中国トキによる佐渡での再生があり、物語の世界であったが、ウナギとなるとにわかには実感がわく。なんとかして自然ウナギの回復をしなければとみんなが動き出す。

ひとくちに「環境の回復」といっても意味がひろい。

ヒト中心の利用が行きすぎて自然の再生力に乱れや崩れを生じさせた「自然環境」の回復が
いわれる。もうひとつは、生産を優先したあげくに消費する現場が壊される「生活環境」の回復が
いわれる。循環型社会のための3R（リデュース、リユース、リサイクル）などがこれ。
そしてもうひとつの環境である「歴史・伝統環境」の再興がここでの課題である。

「ふるさと再生」といえば、ご記憶にあるだろうが、前世紀末に近く「ふるさと創生一億円事業」（竹下登内閣）として各市区町村で試みられたが、モニタメントなどは多数残っているが、活動として継続している創生事業は数少ない。

いままた九月に安倍（晋三）内閣は、石破（茂）地方創生相を起用して、「ひと、まち、しごと創生本部」を発足させた。「人口急減・超高齢化」というわが国が直面する大きな課題に対し、

政府一体となって取り組み、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会を創生することをめざして設立。そのための三つの視点は、①若い世代の就労・結婚・子育てでの希望の実現、②「東京一極集中」の歯止め、③地域の特性に即した地域課題の解決だという。

みずからの失政で延滞をもたらしておいていまさら何、というところだが、その意図するところに異論はない。ただし、三つの視点のうち①に、みずからの居場所をつくり、若い人の支え手となる高齢者の存在を理解していない。決定的な欠落は、首相にせよ、担当大臣にせよ、「知識・技術・資産の三本の矢」を保持している高齢者が地域にいることに思い至らない。本来なら、若者、女性とともに高齢者に出動を要請するべきときなのである。

高齢期二五年をそこで過ごす「エイジング・イン・プレイス」での居場所づくり。「ふるさと」の生活圏の再興と創生は、再生への意欲をもつ高齢者と継承し新たに創生する熱意をもつ若い人びとの両翼の働かないと飛び立てないのである。

ふるさとの「原風景」と「現風景」

*Uターン・Jターンの人びとの願い

青少年時代に外に夢をもとめて「ふるさと」を離れた人びと。都会に出てそのまま職業に就いたり、大学で学んで就職をし、都会暮らしをし、結婚をし、次世代を育ててきた人びと。

定年後もそのまま都市郊外に住んで、子どもを送りだし、これまでいたところに居つづけて、最後はひとり住まいになって「都市浮遊型の人生」で終わる人びとも多い。それとも「ふるさと」へ回帰して高齢期から終末期までをすごすかで、「エイジング・イン・プレイス」での人生の晩期での成果の違いになる。

前者には課題が多い。定年になっても地域に関心を示さない「地閉症」のまま生涯をおわる男性が問題になっている。もうこの世では働き終わった、あとは勝手にさせてくれ。「余生」としてそういう人生を選択した人を、とやかくいうことはできない。

このままでは二〇四〇年までに「人口減少」によって八九六自治体がなくなるといふショックな可能性をモロに指摘してみずから失政の恥をさらした「日本創成会議」（座長・増田寛也元総務相）の人口推計が出されたことから、地域での人口減少問題（少子化）に関心が集まっているが、本来は「高齢化」問題なのである。同会議が残るといふ大都市の高齢者の人生が浮遊して終わるのに対して、全国各地で泉眼から泉が湧き出るように新たに形成される生活空間は、水玉模様のように重なって広がる「実のある人生」の舞台なのである。保持してきた知識、技術、資産は生き生きと活かされる。それは国や自治体からの要請で始まるものではない。

しごとを終えて、あるいは終える前から、晩年を「ふるさと」にもどって過ごそうと考えている人びとを「Ｕターン」型、あるいはそういう「ふるさと帰巢」型の人生を思う人びとを「Ｊターン」型と呼んでいる。Ｕ・Ｊ型どちらの人にも「ふるさとの原風景」があって、静かに「ふ

るさと」(大正三年・一九一四年、ちょうど一〇〇年前に作られた)を歌えば、うさぎやこぶな、なつかしい山や川は変わることなく眼の裏に浮かぶ。

「♪いかにいます父母・・」となると、父母はすでになく記憶の中の存在になっている人も多いだろうが、あるいは大正生まれの母上がひとりご健在でおられるかもしれない。

先の大戦ののち半世紀あまり、「ふるさとの現風景」は求めているものと違う姿になっている。ここ二〇年ほどの間に「ふるさと」が失ってしまったものの多いことにも気づく。

得たものといえば――舗装された真っ直ぐな道路。メカニクな騒音。コンビニ、スーパー、駐車場。コンクリート造りの新校舎と新庁舎。郊外のゴルフ場・・そしてマイカーとプレハブづくりのマイホーム・・もちろんまだまだある。

失ったものといえば――安心して歩ける小路。緑ゆたかな雑木の里山や鎮守の森。ヒバリやカエルの声。商店街の活気。わら屋根の篤農家・・そして野外で遊ぶ子どもたちの歓声や腰の曲がったお年寄りの笑顔・・もちろんまだまだある。

ふるさとに「ニシキ」を飾って帰って、しゃれた家を建てて暮らす人もいるだろうが、本稿は帰るのではなく戻って、地元に残っていた仲間とともに「ふるさとの再生と創生」につながる事業に加わる。そういう気構えを持ってUターンする人に「エイジング・イン・プレイス」の意味を見出す。Cさんがそうだ。Cさん夫妻は小・中学いっしよの同郷である。

「帰りなんいざ、田園まさに起こらんとす」

だそうである。休耕田の時代も終わる。Cさんは帰って農業をやる。「TPP」（環太平洋パートナーシップ協定）が海洋大国日本に強い影響力を求めている。「特性ある地域の発展」にむかって、国から地方へと施策も予算も動いている。新しい「地域の時代」が動こうとしている。

「ニシキ族」より地域づくりの仲間がいい

＊子や孫も暮らせる「ふるさと創生住宅」

いま、ふるさとに「ニシキ」を飾って帰って、違和感のある家を建てて、地域と絶縁した暮らし（地閉症）をするような人は期待されていない。「ふるさと生活圏」をともにつくる気構えが求められている時節なのだから。

Cさん夫妻は小・中学いっしょの同郷である。終の棲家をつくるなら、ふるさとに高齢者専用ではなく、都会暮らしをしている子や孫が遊びに来てすごせるような、あるいは孫を呼び寄せて育てられるような二世帯用住宅にする。そして将来、子や孫が、父母が「エイジング・イン・プレイス」とした地に、「父母のふるさと」として戻って暮らせるような。実行は近い。

とくに五〇歳代後半の高齢準備期のみなさんには、Cさん型の人生を選択してほしい、できる人からどんどん進めてほしい人生計画である。国土交通省住宅局（安心居住推進課）と厚労省との共管事業として都市内ですすめられているような「都市型高齢者住宅」への税制上の優

遇は、「地域高齢者住宅（ふるさと創生住宅）」でこそ活かされなければならない。

来年から地方自治体と地域高齢者の協働の場がさまざまに動こうとしている。その実態を当の高齢者が知らない。こんなチャンスを知らないでどうする。

「地域医療・介護推進法」が二〇一四年六月に成立した。その内容が来年四月から実施に移される。医療・介護のほか、子育て、認知症対策、障害者、生活保護、ニート対策などの実務が自治体に移管されることになる。見えている主なものはそれらだが、「まちづくり」の主体が、「国から地方へ」と移譲される。市町村合併後の活動の中心が「国ではなく住民と地方自治体にある」として国が認めざるをえない世論の動向があるからだ。

合併のあと、どれほどの地域がどれほど元気であるかを知るためにおこなわれた調査「地域再生に関する特別世論調査」（内閣府・二〇〇五年六月）がある。少し間をおいたデータだが、その後の経緯に変わりはない。

合併協議は、ご記憶のように、「生活圏の広域化」や「少子高齢化」などを課題としたが、ひと段落したところで、どれほどの地域がどれほど元気であるかを、内閣府が調べたもの。

自分が住む地域に「元気がない」と感じる人（四四％）が、「元気がある」と感じる人（三八％）を上回っていた。「元気がない」と答えた人は、その理由として「子供や若者の減少」（五九％）、「中心街のにぎわいの薄れ」（五一％）、「地域産業の衰退」（三九％）などをあげている。いまのみなさんの実感とそう遠くない。

そして問題はここにある。活動の中心となるのが国（一八％）ではなく、住民（四八％）と地方自治体（三八％）であることがはっきりした。国の一八％というのは、もはや活動の中心が「国ではなく住民のみなさんと地方自治体です」と国がいわざるをえないほど低率だったのである。これも地域で暮らすみなさんに知ってもらいたいが、あまり知られていない。

増えつづける「支えられる高齢者」のための「地域包括支援センター」が来年から充実する。といって同時に「支える側の高齢者」がその気で動かないでは充実がおぼつかない。

高齢者はP P K（ピンピンコロリ）でないかぎり、だれでも健常期のあと、介護期、医療期、入院期、終末期のプロセスを踏んで一生を終わる。ところが、これまでのように治療を病院で受け、重篤になったら入院し病院で死ぬという時代でなくなる。施設完結（病院）型から地域（自宅）完結型に替わるからだ。増える認知症の介護も地域にかかわる。「支える側」にいるうちからの自主的な地域参加が要請される。「ふるさと回帰」をする人にとっては参加しやすい環境が整うことになる。それとともに「子ども・子育て」もまた両親と施設から、地域が助け合って次世代を育てようという政策転換を迎える。可愛い孫を預かって、いなかで育てるのもよい。都市に残った若いふたりは、もう一人産むチャンスを得ることになる。

「子供や若者の減少」には「少子化」があり、「中心街のにぎわいの薄れ」には商品流通の変化がある。そして「地域産業の衰退」には大資本による系列化、グローバル化による生産拠点の海外移転といった事情がかかわっている。自治体は特性を活かした地域産業を支援し、「子育て」

を施策のNO1にして、みんなで次世代が安心して育つ「しくみ」をこしらえる。子どもたちが集まってくるまち。孫たちを呼びよせるまち。いいね、クリックである。

高齢者は、同じ「ふるさと」の地で子どもたちと暮らし、情報源になる街の中心をつくり、地域産業を起こす原動力になればいい。「エイジング・イン・プレイス」としていつも窓口は開いている。都会から地域へという「ふるさと生活圏」への人の動きが、新たな地域を創生する原動力になる。地域問題は人口減少ではない。人生にかかわる住民の選択の問題なのである。

「均衡ある国土」から「個性ある地域」へ

*均衡を基盤に地域特性を重ねる

新幹線の座席でうとうとした後で、身を起こして、列車の窓から外を見る。

「いま、どこさ走ってるん？」

流れ去っていく風景からでは、どこを走っているかの判別がつかない。外国での話ならともかく、わが国の国内での話。利用した人ならだれもが経験していることなのである。次々に展開する田畑も家並みも、どこも同じような風景なのだ。

新幹線の車窓からの風景の中に、「ここはR町 △△が特産」といった程度の看板くらいはあってもよさそうだが、地方特性（特産）がいつこうに立ち上がっていない。「地方の時代」とい

われてずいぶん経つというのに。ふつうにはそう思う。

しかし、これは見方の違いによるのであって、いずれの地も凸もさせず凹もさせずに、「富を等しく分かち合いなから、ともに豊かになる」という、先の大戦後にわが国の先人が選んで目標としてきた「日本的よき均等性」の成果なのである。

「豊かになれる者からなれ」とはせず、個人差や地域差をなくして、等しく成果を分かち合おうと務めてきた善意の人びとによる積年の成果なのだ。その意味でなら、これまでも「地方の時代」だったといえる。東京一極集中の風潮の中で、優れた人材を都市に提供しながら、地方に残った人びとは、「モノと場の平等な豊かさ」のために、たゆまず努力をしてきたのである。

みんなが等しく貧しかった時代、若者たちを大都市へ送り出し、地元に残って貧しさや不便さにも耐えながら辛苦した人びと。いまはその姿は遠く定かでないが、地元のために尽くした先人の努力を無視・軽視しては、現状の公平な豊かさに対する理解の公平さを欠くことになる。

旧市町村長室には歴代の首長の写真がかかっていて、だれもがよい顔をして並んでいた。合併後はどうなったのかはわからないが、それに励まされ力をもって現役の首長はしごとをしていたにちがいない。

新幹線を利用しながらこう語るのは失礼になるが、

「善く行くものは轍迹なし」

という先哲のことばに耳を傾けたい。すべての業績を周囲の人に振り分けて、みずからは轍

の跡を残さず去っていった善意・高邁な人びとの姿を忘れ去るわけにはいかない。

等しく富を享受するという先人の善意から始まった「均衡としての地方の時代」が、時を経て「横並びの安心感」による自立意識の欠如となり、推進力を失ってしまっている。ここでも成果主義といった個人の目先の競争誘因を取り込まねばならない転機を迎えようとしている。

地域の基盤があぶない。そこで、その危機感の表現として政府が掲げたのが、

「国土の均衡ある発展」
から、

「地域の個性ある発展へ」

という「骨太の方針」だった。そういう転機への要請としてわかりやすく表現されている。

ここで大切なので再記するが、注意すべきことは「くからくへ」というのは「くを転換して」ではなく、正確には「くを多重化して」と理解すること。

「特性ある発展」だからといって、「均衡」を一八〇度転換するのではなく、これまで国がリードしてきた「横並びの均等化」によって得た現況に、さらに地元の発想を「多重化」して地域の活力を呼び起こそうということである。

基盤としての「均衡」の上に「特性」を重ねる。そう理解しなければ先人が善意として積み重ねてきた「みんなが平等に」という営為をまるごと無視・黙止することになってしまう。そんなことは後人としてあるまじきことではないか。

「地域に根ざした暮らしの知恵がどこの地方にもあったはずなのだが」

と思いつながら、新幹線の客は、どこかわからないまま車窓から目を戻す。前方の出入り口の上の小さな空間をニュースが流れ、「あと三分でN・・・」というお知らせが流れた。

「特性が息づくわがまち」に住む

＊みんなまで考える「しくみ」と「特産品」

貧しいときは貧しいなりに、豊かになれば豊かさをお互いに分け合う。

この「モノと場の横並びの平等」が、敗戦の惨禍あと、復興事業の基本となってきたことで、地方の人びとにどこにいても安心感を与え事業を支えてきたのだった。

その意味では国のしごとにも携わってきた有能な官僚の半世紀にわたる事業分配の業績といえる。だから新幹線の窓から見ても凹凸が際立たないようなまちづくりが目標とされ、実現されてきた。「モノ」の配分における平等主義のみごとな時代表現である。

その証としてR町のような小さな町でも、隣の大きなN市に劣らず、横並びの「基本課題」を共通して持っており、それを担当する課があり職員がいる。そしてこれまでの地方議員の主なしごとは、各地域に等しく予算と事業を配分することにあった。

だから自治体は、せっかちに従来の課係を解消するような単純な変更は避けなければならない

い。職員も住民も混乱してしまう。新旧ふたつの課題をうまくつないで対応する課をつくり職員を配置することになる。「均衡ある国土の発展」はこれからも基本として継続するからで、新しい課題を設定して担当する部署を構成するわけだから、従来の課係をなくすのではなく、その上に重ねて構成することになる。

すでに各地で活動しているのが、「まちづくり推進課」「子育て支援課」「高齢社会対策課」「伝統産業育成課」などで、そのほかに二課を合わせた部署、たとえば「健康福祉課」「産業観光課」「スポーツ生涯学習課」などが内容を調整しながら活動を推進している。みなさんの自治体もそうなっているはず。これまで地域に関係の薄かった人は、こういう新しい課の窓口をぶらりとたずねてみるとよい。気軽に参加できる活動に出合えるにちがいない。

「シルバー人材センター」は、地域の高齢者むけ求人に応じるだけでなく、シニアのもつ能力を蓄積し活かして、まちの活性化のための新たなしごとをこしらえているところもある。

「地域包括支援センター」は、これまでも地域住民の健康、生活の安定のための支援を、包括して担う中核的機関として機能してきている。保健師、社会福祉士、ケアマネジャーをはじめ自治体職員と社会福祉協議会、NPO、多くの住民の善意と協力を統合しながら地域を支えている。今後さらに高齢者が健丈なうちから関わるしくみが考慮されることになる。

民間団体である「社会福祉協議会」のしごとの範囲は広い。官民協働の活動が次第に多くなり、これまでのプロセスからヒトもおカネも自治体と不即不離の関係を保ってきたから、ここ

に地域活動の人材が集まっている。二万法人あるそうだが、ところによっては自治体からの天
下りの弊害が指摘されるが。住民がどう関わるかで活動の成果に差が生じている。

新たに「地域特性」が息づくまちを創り出すには、まずみんなで手分けして地域特性を掘り
起こす作業がある。均衡ある発展を基盤としながら、その上に「地域特性」を活かしたまちづ
くりをめざす活動が重ねられる。飛び込めば、持っている力を活かす場はいくらでもある。

内閣府の「中心市街地活性化」の基本計画では「特性のあるまちづくり」が指向されている。
地域から練り上げてきたものだから、それぞれ着実に姿を現すに違いない。ここからも汲めど
尽きない地域生き返りの方途を得ることができる。

城下町では「街なか回遊」(彦根市)・「回廊」(会津若松市)、港町では「みなとみらい21・
OLD&NEW」(横浜市)・「港町スクエア」(気仙沼市)・「海DO戦略」(下関市)、そして「ま
るごと博物館」(有田町)、「都市型高感度市街地」(宝塚市)・「体感スポット点在のまち」(久留
米市)、「フアッション・ジュエリー都市」(甲府市)・「リ・ガラスのまち」(水俣市)、「こみせ・
まちづくり」(黒石市)・「詩情公園都市」(小諸市)・「市(いち)の復権」(市原市)、「まちな
かづくり」(臼杵市)・「へそのまちのへそづくり」(富良野町)・・・。

街並みの整備、歩きやすい環境づくり、いこいの場の設置、観光資源や歴史資源の活用、イ
ベントなどに特性を活かしたまちづくりが企図されている。地域再生の場に、地元高齢者の経
験を取り入れながら参考にする事例に事欠かない。

とくに最初の指定都市（平成一九年二月）である「コンパクトシティ」富山市は、また「環境未来都市」構想の指定も受けており、またOEC Dの「ケーススタディ都市」にも選定されている。「高齢者優遇」での展開が「富山まちなかカート」など「歩いて暮らせるまちづくり」への成果としてすでに具体化されている。

全国版の「地域ブランド品」でまちおこし

* 農業の六次産業化とご当地グルメ

身近な実例としては、各地の「特産物グルメ」が話題になる。

農業の「六次産業化」による「ご当地グルメ」や新製品は、競えば競うほど磨かれる。「全国ご当地グルメ祭」も開かれている。

環境に関する「エコ・ライフ」「スロー・ライフ」による活動や居場所づくり。「ホタルの里」や菜の花・レンゲ・コスモスといった「花の里」、「そばの里」「和紙の里」といった各種の地産品の里づくり。そして地元の焼き物・織物の再生。和太鼓・歌舞伎・踊りなどの伝統文化・芸能の復活。民俗・ことばの保存と伝承など「地域特性」を活かした活動の成果が、暗いニュースに割ってはいって明るいニュースとしてテレビで紹介されている。

全国版の「地域ブランド製品」は、お中元やお歳暮の商品対象として、JAのリストなどで

ご存じのとおり。地域で生まれて全国の代表になった製品である。地域名のついた伝統製品は、地域の人びとの並みならぬ努力のたまものである。

みなさんにも親しいものの例を少しあげてみよう。

松前漬、石狩鍋、津軽塗、南部鉄器、喜多方ラーメン、益子焼、桐生銘仙、草加煎餅、安倍川餅、信州蕎麦、岐阜提灯、加賀友禅、九谷焼、瀬戸物、伊勢海老、松阪牛、宇治茶、奈良漬、吉備団子、讃岐うどん、今治タオル、伊予柑、博多人形、伊万里焼、薩摩揚げ・・・。

まだまだあるが、地域の特産の保持のためには、常日ごろからの地元の職人や企業のたゆまぬ努力がある。もちろんそれを支えつづける多くの住民の力に負っている。

いま全国で新たな発展の時期。どんなものが全国征覇にむけて勝ちあがってくるか。

一人の傑出した技能をもつ人が案出して、みんなで協力して展開することもある。しかし、「地域特性」を際立たせるみんなの地道な試行が、「地域の個性ある発展」につながる。それが高齢化に見合った「地域生活圏」達成への道程であることは間違いない。そのために高齢者の知識、技術を活かす「エイジング・イン・プレイス」の現場はいくらでもある。

地域の高齢者が一生のあいだ便宜をえて用いる「地域特産品」を持った「個性あるわがまち」が競いあう。わがまちの製品が周辺地域で勝ち抜いて人気を得られれば、それは「地域ブランド品」として定着する。新地域ブランド品誕生のチャンスなのである。優れたものは、姉妹都市や友好都市を通じて、海外の地域高齢者にも受け入れられる輸出品になるにちがいない。

二 「三世代ふれあい館」なんていいね

気軽に立ち寄れる「居場所づくり」

*「サロン」「コミュニティ・カフェ」「茶の間・縁側」など

平成二六年の「ねんりんピック」(第二七回全国健康福祉祭・一〇月四日～七日)は栃木県でおこなわれた。栃木県は「高齢者の居場所づくり」でも先進的な県といえるだろう。

居場所のタイプはさまざまだが、県では全国社会福祉協議会が提唱している「ふれあい・いきいきサロン」と、さわやか福祉財団が普及に努めている「ふれあいの居場所」を参考にしている。参考にして実例を積み上げてきた。

全国社会福祉協議会が提唱している「ふれあい・いきいきサロン」というのは、地域を拠点に、住民である当事者とボランティアが協同で企画をし、内容を決め、共に運営していく楽しい仲間づくりの活動「(あなたもまちもいきいき!「ふれあい・いきいきサロン」のすすめ)」というもの。また、さわやか福祉財団が普及に努めている「ふれあいの居場所」というのは、「地域に住む多世代の人々が自由に参加でき、主体的に関わることにより、自分を生かしながら過ごせる場所、そこでのふれあいが、地域で助け合うきっかけにつながる場所」(ふれあい

の居場所ガイドブック)である。すでに次の自治体は二〇カ所以上の居場所を開設している。足利市高齢者ふれあいサロン(一〇〇カ所を超えている)、佐野市高齢者ふれあいサロン、鹿沼市ほっとサロン、栃木市はつらつセンター、小山市いきいきふれあいセンター、大田原市ほほえみセンター、那須塩原市生きがいサロン、那須烏山市いきいきサロン。

介護支援ボランティアについても、東京都稲城市の介護支援ボランティア活動を参考にして、小山市や日光市で導入している。また県では栃木県シルバー大学校も経営している。

鳥取県では福祉保健部長寿社会課が、「鳥取型地域生活支援システムモデル事業(居場所づくり)をおこなっている。どこも孤立を防ぎ、人と触れあうことでの課題解決をめざしている。

「居場所づくり」も実にさまざま。新たな活動が各地域の条件のもとですすめられている。

「高齢者」(埼玉県・豊橋市・京都市・高松市)、「子ども」(北海道・帯広市・青森県・練馬区・市川市)、「青少年(中学・高校生)」(神戸市)、「障害児」(横浜市・中津市)、「障害者」(奈良県)、「生活保護受給者」(那覇市)など枚挙にいとまがない。

地域が担う「多子化・高齢化」社会

*「家族総出」の子育て・孫育て

ようやく「女性登用」の順風がこの国にも吹きはじめている。この風はこれから二一世紀は

おろか、二〇〇〇年間は「男尊女卑」（これはパソコン辞書にある）にかわって吹きつづけて「女尊男卑」（これはまだ辞書にない）の時代がつづいて、やがて人類社会は「男女平等」の平衡を保つことになるという大胆な意見すら聞かれる。即座の男女平等なんか平等ではないという。

いずれにしても女性がリードする社会づくりは緒についたばかり。まだ遠慮がちな声は、軽重を問わずに配慮して傾聴せねばならない。気になるのが次世代育成にとつての「祖母」の貢献。子育て期の女性との折り合い次第なのであるが、「祖父母」という存在が孫育ての現場で評価ゼロという現状は、経緯はともかく「祖父」としてはおおいに危惧しているところである。

両親と施設による子育てのなかで、軽視して扱われていても、実際には孫の傍らにいて親の目と違った目で孫をみて、知らないことを教え、暮らしのこまかな技能を伝え、励ましを与え、孫から二重マルの似顔絵をもらう祖父母は数多いのである。

ちかごろは、九月第三月曜日の「敬老の日」に花束をもらったおじいちゃんおばあちゃんは、「孫の日」（一〇月第三日曜日）にお返しをする。過保護や板ばさみを避けながら、社会適応性のある次世代を育てる役割を果たしているのは、おじいちゃんおばあちゃんではないか。

「ひとりじゃないよ、みんな育てる未来に輝く子どもたち」

いいキャッチフレーズである。祖父母からは裏声で、「ふたり（親だけ）じゃないよ・・・」といたいところもある。子育ては「家族総出」がいい。そしてさらには地域みんなで成育を見守っていくことが、もっとも有効な「少子化対策」である。高齢者にとって「孫育て」は優し

い心を生かせる「エイジング・イン・プレイス」の現場である。

地方の家庭では、これまでも、そしていまでも、伝統的な「家族総出」の子育てで、女性の社会進出を支え、子育ての現場を引き継いでいる。子どもたちは初めから、おじいちゃんおばあちゃん存在を当然とし、「うちのじいちゃんね」といって、教えてもらったワル知識やウラ技を仲間に自慢して伝授する。それも「わが家三代の暮らしの知恵」の伝承の意味合いである。

それでもこれ以上に家庭に過大な負担を求めることはできないとして、国は「子ども・子育て法」では幼稚園・保育園を一体化した「認定こども園」で、幼児保育と幼児教育を連携して母親を支援するとともに、元気なお年寄りの地域参加で子どもを守り、企業は「ワーク・ライフ・バランス」で子育て期の両親を支援し、若い家族の負担の軽減を図っている。

できるかぎり「三世代同居」家族を保持しつづけないと、暮らしの知恵の伝承が途切れてしまし、医療が地域（家庭）中心になれば、同居・近居による家族の絆は欠かせない。

日ごろ遠出をしない高齢者は、子どもたちと同じ地域で日々を過ごす。だからここでの「エイジング・イン・プレイス」は「孫世代」との交流である。マンガで育ってすぐキレル子どもに、精細な表現力を身につけさせて、感情のコントロールができる子どもにしようという「読み聞かせ図書館」は重要だし、地元の伝統技術・芸能を伝授する活動などには高齢者の技能と熱意が欠かせない。

三世代の意欲的企画の合流点

*「三世代ふれあい館」なんていいね

世代交流。ことし平成二六年度の内閣府主催「高齢社会フォーラム in 東京」（七月二十九日）には、「多世代からみたシニアの意識改革」と「シニアと多世代がつながるために（ICTの活用）」という分科会が設けられた。

これまでは高齢者による高齢者のためのフォーラムの感があつたが、世代をつなぐことで、みんなが協力して形成する「長寿社会」への視点がうまれる。こんなシニア像が指摘された。

「嫌われシニア」「愛されシニア」「孤独なシニア」「アクティブ・シニア」「プラチナ・シニア」「良いシニア」「困ったシニア」「悪ガキシニア」・・・。

嫌われシニアや困ったシニアは、差別する、空気が読めない、自分のことばかりいうなど。愛されシニアや良いシニアは、潔い、自他がわかる、甘えさせてくれる、など。

「プラチナ・シニア」は渋く輝いている。思いのほか「悪ガキシニア」の評判がいいのは意識しておいていいかもしれない。

これまでの世代間の出会いといえば、地縁組織である「老人クラブ」と「子ども会」との間での交流が知られる。「全老連」（全国老人クラブ連合会）がおこなってきた「地域を豊かにする活動」（旅行や将棋など）がそれで、「伝承活動」や「世代交流」は組織あげての活動の柱にな

っている。力をもつクラブは、地域文化や芸能・民芸や手工芸、郷土史などを子どもたちに伝承している。クラブの若手会員による独自の活動も見られる。

いずれにしても地域の子どもたちが当面している問題は、「老人クラブ」と「子ども会」との間では担いきれないほど山積しており、地域生活圏でもっと広い活動が、次世代育成の事業として必要なものになることはまちがない。

大都市近郊での一例にすぎないが、千葉県柏市では、柏市・東大高齢社会総合研究機構・UR都市機構との協働の成果として、ここをベッドタウンとしてきた高齢世代が動き出し、優れた知識や技術を活かして地域でのしごとづくりをしている。海外勤務の多かった商社マンや技術者が、子どもたちに生きた英語を教え、理科系の知識の伝授に一役二役かっている。

「長寿社会」という新しい社会は、高齢者が次第に存在感を示すことで、三世代が現役の「多重重型社会」を構成することになる。いま創成期の高齢者は、地域活動に参加することで、それぞれの地域の特性や伝統を活かして特産物を育て、篤農家を守り、若者を鍛え、子どもたちに夢を与えられる地域の実績をつくる事業に直面している。自治体は仔細に高齢者の能力を理解して参画を求める。それぞれがこれまでにない次元の「ふるさとづくり」の拠点となる。

車いすでも行動できる環境の整備など、「ユニバーサル・デザイン」に配慮したまちづくりは、厚労省の「バリアフリーのまちづくり活動事業」として各地でさまざまに実現している。

さらに重ねて物産、文化、余暇にわたって、高齢者が、それぞれの立場で暮らしを便利にし、

またお互いの活動を支援し合う「地域シニア会議」が開かれて、さまざまな課題を具体化していく。さらに世代別の要望を実現するための「三世代会議」や、そのための常設の施設「三世代会館」は、将来はどこの自治体にもあってもいい施設である。

まだ先駆的活動のうちではあるうが、地域の青年館や公民館ではなく、活動の場として、「三世代交流館」（大洲市）、「三世代ふれあい館」（土岐市）など「三世代会館」を称するものもみられる。三世代の代表者がそれぞれを代表して交流し、合議する場として運営できるようになるならば、それぞれの立場の活動をお互いに理解し支援しやすくなる。世代別の課題あるいは合同の集会や文化事業の施設として有効に機能するだろう。

三 生活支援コーディネーターを支援

「地域シニア会議」が共生活動の拠点に

*「生活支援コーディネーター」が登場

地域で暮らす高齢者は、大きく三分類される。

まずは中学校を終えて、仲間が都会へ出て行ったあと、ふるさとに残って地域の物産や伝統行事を守り、次世代を育ててきた人びと（Q型）。次がふるさとを離れて都会で活動したあと、

高齢期から終末期を

に戻って過ごす人びと（U型）。そして魅力のある町には、これまで関係を持たなかった人びとも都会を離れて高齢期を過ごすためにやってくる（J型）。

こういうそれぞれに異なった能力と来歴を持つ人びとが、高齢期に地域で出会って、それぞれに蓄積してきた知識や技術や人脈や資産などを有効に活かすために議論する。それぞれが高齢期を過ごす「エイジング・イン・プレイス」で、「地域特性」を活かして、みんなが住みやすいまちにするために能力を提供しあう。

自治体はこうした人的資産を用いないで、いまちづくりができるわけではない。共生・共助のための「しくみ」を提供しなければならぬ。成否はその速やかさ巧みさにかかっている。

ここは「共生の文化をつくろう」という提言をされている「さわやか福祉財団」の堀田力会長が発言に耳を傾けよう。

「共生の文化」というのは、簡単にいえば、定年退職をして家に籠っている。あるいは外へ出ても行く場所は居酒屋程度。家族で旅行はするけれど、近所とのつきあいは一切なく、通りで顔をあわせれば目礼するだけ。こういう暮らし方は「恥ずかしい」とみんなが感じるような風習、それを「共生の文化」と呼びたいと思います。ここまで一生懸命働いて社会に尽くし家庭に尽くしてきて、定年退職したんだから何をしても自由ではないか、という考え方が多数、いまはそういう文化です。だけれども、人と交わり人の喜ぶことをしたほうがもっと良くなる

のではありませんか、そういうことを社会的な自由と考えられないでしょうか、という訴え方をしてきました。それをもう一步踏み出して、「恥ずかしい」と感じるところまで進めようというのが本日の提言であります。」（内閣府「高齢社会フォーラム in 東京」基調講演「あたたかく助け合う地域社会へ」、二〇一四年七月）

堀田さんの提言の背景になっているのは、最近の国の政策の動きで、高齢者の「医療・介護」、子ども・子育て、障害者、認知症、そして生活困窮者対策、といった対策が期せずして地域で支えていこうという方向、「国から地域へ」と動き出していることにある。

そこに地域に住む高齢者が「共生の文化」の証として、自由に、自在に自発的に集まってくる。そういう「しくみ」をここでは「地域シニア会議」と名付けよう。もちろんすでに活動しているところもあるし、呼称も形態も自由だが。活動をよく耳にする「地域協議会」は高齢者だけではなく、全員参加のレベルのしくみである。

ここからは未見の情景である。将来のこととせず、ぜひ付き合っていたきたい。

来年四月から各自治体にひとり、「生活支援コーディネーター」（地域助け合い推進員、有償）が登場する。自治体は「地域医療と介護推進法」の実施にあたって「生活支援コーディネーター」を認定して、官民協働の活動をすすめることになるからだ。その後、地域包括支援センターごとに（ここまで有償）。さらにその後、地域の要望に応じて。

このコーディネーターと協力して、「支える側の高齢者」は活動することになる。この活動の

巧拙によって自治体間に差が生じることになる。

地域の高齢者を「地域シニア会議」がどこまで集約できるかによって、活動の広がりや差が生じる。この「しくみ」の成否が、地域活性化の遅速につながるようになる。「特性あるわがまちの発展」は、「生活支援コーディネーター」のもつ裁量と「地域シニア会議」の結束力にかかっている。地域の活性化なくしては高齢者への敬愛も尊厳も生まれない。まったなしの自治体対抗戦の時期を迎えているのである。

地域の高齢者が語り合い、力を合わせて活動し、テーマ別の活動主体を形成する。健康（認知症や終末期医療も）について、就労について、生涯学習や趣味について、まちの緑化について、孫育てについて、あるいは世代間交流について、男女共生について・・・など。

「エイジング・イン・プレイス」、長い高齢期を過ごすことになる生活圏（中学校区）には家族がおり、友人がおり、かかりつけ医がおり、「地域包括支援センター」がある。長い高齢期を安心してここで暮らして、老いて介護を受けて医療を受けて、最後は施設完結型（病院での死）ではなく、地域や自宅での終末のときを迎える。「人生九〇年」を仲間たちとともに精いっぱい生きて、後人に敬愛されて、「平和の証」としての長寿を享受して去る。

元気なうちに住民として地域事業に参加して、できるかぎりの支援をする。それはいずれの日にか自分にもどってくる共生支援である。それに対して、いずれの日にか「医療・介護」のときだけはやっかいになるうというのでは、やはり「恥ずかしい人生」であろう。

それぞれの地域の自治能力を証明

* 新次元の地域社会を実現する

「生活支援コーディネーター」と「地域シニア会議」の活動のようすを具体的に見てみよう。「地域シニア会議」のメンバーとして想定されるのは、たとえばNPOのリーダー、さまざまな職種の元サラリーマン、元議員、元職員、名誉教授、芸術家（陶芸や園芸など）、農産家、医師、僧侶・など。名誉町民もいる。その活動の総体が「地域特性」を持つまちづくりになる。

町の来歴に長くかかわってきた地元の高齢者、外部で培った経験や知識をもつ新住民である高齢者がともに参加する「地域シニア会議」を構成することになる。

地縁の組織は既存の權益を守るために排他的になってはいけなし、一方で外から加入した人びとも地域の伝統やしきみを見無視・軽視してこれまでの暮らし方を持ち込もうとするのはよくないことだ。お互いの持ち味を組み合わせた「地域シニア会議」が成立してはじめて、「地域特性」を持つまちづくりへの拠点ができたことになる。地縁組織同士の間でも抜き差ししない積年の経緯があって、そうたやすくは立ち位置を変えないだろう。まとめ役の「生活支援コーディネーター」は総力戦の体制をつくらねばならない。この差が地域差を産むことになる。なるようにしかならないだろうが、そこがスタート地点である。

「地域シニア会議」は同時に、まちの将来を担う子どもたちの「青少年期のステージ」（たとえば学校、図書館、スポーツ公園など）。これまで地域を代表して活動している中年世代のため「中年期のステージ」（たとえば企業、団体、商店街など）。それらをよく観察した上で、これまでになかった新たな「高年期のステージ」をこしらえる活動の主体になる。三者がバランスよく機能するまちの態様をつくりあげる「居場所」と「しくみ」の検討がはじまる。

この「地域の三つのステージ」の創出は、「長寿社会」に即応する住民運動であり、それはまた三世代それぞれが推挙したメンバーによる「三世代会議」という新しい活動主体を成立させることで推進される。高齢者側のイニシアティブによってつくられる新たな「しくみ」であり、それ自体が地域の特性を表現したものであり、地域の特性を作り上げる基盤になる。

青少年・中年・高年者層の代表者による「三世代会議」の「高齢者部門」が「地域シニア会議」ということになる。この会議をリードするのも「生活支援コーディネーター」である。

これはこれまで活動してきた「老人クラブ」「婦人会」「社会福祉協議会」「地域包括支援センター」「シルバー人材センター」「生涯学習センター」「地域文化団体協議会」などと人脈が重なりながら、新たなまちづくり事業活動の中心拠点となる。

ここまでのどりついたとき、はじめて「地域シニア会議」は、官制の「生活支援コーディネーター」を支える民間の「地域支援コーディネーター」ともいうべき人びとのたまり場となる。

ここに地域の歴史になかった「歴史をつくる」新次元の活動がはじまる。この「三世代会議」

の設立と運営は、それぞれにキイになる人の立場がたいへん重要になる。

公開でおこなわれる「地域シニア会議」は、地域住民の仔細な要望をしつかり聞きとることができる場となる。たとえば高齢者の日用品の購入から、医院・病院への通院、図書館など公衆施設の利用法、散歩道の整備、地産品情報、四季の伝統行事・風習、人物評など、共通した話題から個別の要請までいろいろである。

公開だから爆笑と拍手と思わぬ展開の議論のうちに会議は進行する。地域の課題を具体的にその解決法まで検討するのが「地域シニア会議」の役割である。

一般的には中学校区で三〇〜四〇人ほどが呼びかけ人になり、幹事会を構成する。課題ごとに七〜九人といった分科会を構成する。「わがまちのベスト・ナイン」か。そこでの他地域と異なる内容が将来の「地域特性のあるまち」をつくる契機となる。自薦、他選、互選、地域の実情を反映したしくみになる。長く暮らしてきた住民ならメンバーを推薦できるにちがいない。

ここまでは未見の情景である。途中を水たまりを飛ぶようにして、ここまでこられた人もあるかもしれない。それでも本稿はこの先を避けて通れない。もう少し先がある。

何より「地域からの本流（地域民主主義）」をおこす潮目の時期だから、ありきたりの発想や表現力の人ではこの難題を乗り切れない。とくに公開の「地域シニア会議」では、未整理なママの住民の意見を的確に整理したり、多様な意見を調整したり、党派的な利害を排して中立を保ったり、民主的な進行のなかで即座に公平な判断ができ、柔軟な表現力のある人の選出が求

められる。「生活支援コーディネーター」（地域助け合い推進員）の歴史的役割なのである。内閣も官僚も、国民の努力によって国際的メンツを保つことになる。くれぐれもわが政策と指導による成果などと思わないことだ。

「地域シニア会議」が中心になって「三世代会議」を呼びかける。「三世代会議」が討議を重ねて作りあげた「地域特性を持つまちづくり」（ふるさと創生二一構想）は、住民をも自治体をも県をも国をも納得させるレベルで、「地方主権」「平和擁護」「民主主義」を具体的に担保する自治能力の表現となるにちがいない。国を守る国民意識の醸成も「地域からの本流」もここから始まる。ここからしか始まらない。そしてこの国の民衆にはそれを成し遂げる民力がある。

「地域シニア会議」は、住民の意向を集約しながら、地域の高齢者や子どもたち、そしてみんなが暮らしやすい生活環境「長寿社会」を具体的に検討していく。できるかぎり多くのテーマについて、これまでの医療、介護、福祉はもちろん、環境や物産や伝統やまちづくりや高齢人材養成といったテーマについても議論を繰り広げていく。

地方議會はこれまでどおり「均衡あるまちの発展」を担い、「地域シニア会議」「三世代会議」が「特性あるまちの発展」に寄与することになる。「人生九〇年時代」を生きる高齢者が、新次元の地域社会を後代に残す「歴史的なしごと」を仕上げることになる。ここまでは未見・先見の情景であるが、実態がすぐ追い越していくだろう。

三 手づくり、まちづくり、仲間づくり

「明治・昭和大合併」での人材養成

*「村立尋常小学校」と「町立新制中学校」

「ヒトづくり」は市町村合併の重要な課題だった。

明治と昭和のふたつの町村大合併のときには、それぞれに新しい自治体が地域発展のための人材養成（教育）を重要な目標の一つとしたことに改めて注目したい。

明治維新後の「明治の大合併」のときには、わが村の「村立尋常小学校」が合併のシンボルとされた。村立小学校は子どもたちに多くの夢を与え、地域を発展させる人材を育成した。その夢はいっしかお国のためとなり、半世紀の後には戦争へと子どもたちを駆り立てていったが。三〇〇〜五〇〇戸の規模で教育、戸籍、徴税、土木、救済などが課題だった。

大戦後の「昭和の大合併」のときには、わが町の「町立新制中学校」が合併のシンボルとされた。子どもたちは町立中学校を卒業すると、多くは都会へ出て行って高度成長の担い手となった。八〇〇〇人規模で、新制中学、消防、保健衛生などが共通した課題だった。

さて二一世紀の新時代をめざした「平成の大合併」では、新しい自治体は将来の地域を担う人材を育成するために、何をシンボルとしただろうか。

今回、国（文科省）は、これまでの生涯学習のほかには明確な指針を示さなかったのである。課題がなかったわけではない。明治の「村立尋常小学校」、昭和の「町立新制中学校」という合併時のステップからいくと、「市立の高等教育機関」であり、それは合併協議の「少子・高齢化」に見合う対策である意味からいって、高齢者が対象の教育機関となるべきものであった。「市立高年大学校」といった態様のものが想定された。すでに各県・各市には六〇歳以上を対象とする「地域生涯大学校」（高齢者大学校・シニアカレッジなど名称は多様）が開設されており、高齢人材教育の多様な成果をあげており、本来なら合併協議の場で、文科省が地域自治体の主導において地域発展のために設置を検討するよう指示すべきだったのである。

本稿の使い分けからすると、生涯学習は年齢にかかわらず「長寿社会」のためであり、「市立高年大学校」は高齢化時代の高齢期（二五年）のための教育機関だったのである。

残念だったのは平成の市町村合併の先駆を担った地方の自治体にはそういう構想がなかったことである。そして文科省にそういう高齢人材養成を推進する強い意向がなかったことである。

「市立高年大学校」（高齢人材養成センター）

* 地域社会をつくる高齢人材を養成する

市町村合併時に検討すべきどういいう構想がありえたのか。

地元の高齢者、地域に帰って過ごす高齢者を対象にする高齢人材養成機関である。対象者は六〇歳以上。これから二〇年以上に及ぶ長い高齢期を安心してすごすための知識・技術を学ぶとともに地域のもつ課題を考える。つまり地域で健康に高齢期をすごし、その能力をみずからの人生の充実と地域の発展のために活用する高齢人材を養成し、同時に生涯の友人を得るための機会とする施設だったのである。

医療・介護・福祉のための「地域包括支援センター」、就労のための「シルバー人材センター」とともに、そして新たに高齢人材を養成する「地域高齢人材養成センター」が構想されて、その中核になるのが「市立高年大学校」である。中学校区規模で希望者全員が修学することを目標にして運営することになる。

「平成の大合併」時の重要な検討課題であった人材養成なのだが、文科省からその提案はなく、省内に担当する部局もつくらずにすぎたことを、地域高齢人材養成期における欠落として受け止めねばならないだろう。もちろん、これからでも遅くはない緊急課題である。

幼児期保育・教育とともに、新たな「長寿社会」に対応する高齢人材養成の教育機関が厚労省・文科省によって検討され、自治体に新設が指示されなければならない時期なのである。高齢者課題は厚労省が担当とする縦割りの理屈は通用しない。

ここは政治課題としての一〇年遅延を認めた上で、なお高齢化が進行するわが国の課題であることを文科省は早急な検討と対処が必要だろう。「生涯学習」だけに固執すべきではない。

「人生六五年時代」から「人生九〇年時代」への意識変革を促し、高齢者に社会参加を訴えたのは、ほかならぬ内閣府の「新・高齢社会対策大綱」（二〇一二年九月、閣議決定）である。六五歳〜九〇歳までの二五年の長い「成熟期の人生」を送るに当たつての知識や技術や生涯にわたる友人はお互いの人生を豊かにすべし必須の条件である。

合併の結果、「個性ある地域の発展」という合併による地方分権の目標とは裏腹に、往年の特性や精気を失って萎えている地域がみられる。「市立高年大学校」（中学校区）の卒業生とその周辺の人びとの活気ある取組みが地域社会の活性化に与える影響は測りしれないのである。

新しい「地域社会」が、高齢者のだれにとっても暮らしやすい姿になるためには、地域社会をつくる高齢人材の養成は不可欠なのである。

生涯の友と「地域カリキュラム」を学ぶ

＊地域特性をまちづくりに活かす

多くの県が「教育立県」を宣言しているのは、何より地元で暮らして地元を豊かにする人材の育成に力を入れているからである。

すでに全国各地で成果をあげている「地域高齢者大学校」（生涯大学校、シニア・カレッジほか名称はさまざま）は、地域活性化を担う人材を養成するために、それぞれに地域性を加味し

たカリキュラムを構成している。

修学するのは六〇歳をすぎた高齢者。これまでの経験に重ねて「人生九〇年時代」の高齢期人生を見据えて、有意義に過ごすための知識や技術を新たに習得し、生涯の学友を得る。その人びとが地域でいきいきと暮らす姿が増えるために「地域カリキュラム」は重要な要素である。

ここで注目すべき実例として、兵庫県の「いなみ野学園」を見てみよう。

全国に先駆けて開設した四年制高齢者大学校で、六〇歳以上が入学資格。週一回の講義で、学科は園芸、健康福祉、文化、陶芸の四つ。クラブ活動には高齢者らしく、ゴルフ、詩吟、ダンス、盆栽、謡曲、表装、太極拳、ゲートボールなどがある。より専門性をもつリーダー養成の大学院も設置。一九九九年の「国際高齢者年」に「いなみ野宣言」を出している。

学科でもクラブ活動でも個人的に夢中になれる「手づくり」作業が重要な要素になっている。

「地域高齢者大学校」は名称もいろいろ。沖縄県は「かりゆし長寿大学校」（一年制）、島根県は「シマネスクくにびき学園」（二年制）、橿原市は「まほろば大学校」（二年制）である。

各地で各様の構想で実施されており、東京の世田谷区生涯大学シニア・カレッジ（二年制）、江戸川区総合人生大学（二年制）、成田市生涯大学院（三年制）などではそれぞれに独自の学科とカリキュラムで模索を重ねながら、個人的な能力開発、地域社会が必要とする多様な能力の養成などの目標を掲げて活動している。

ほかにも栃木県シルバー大学校（二年制）、千葉県生涯大学校（二年制）、鳥取県ことぶき学

園（一年制）、長崎県すこやか長寿大学校（二年制）、明石市あかねが丘学園（三年制）、明石市好古学園大学校（四年制）など、それぞれの特徴を活かして開校している。

自治体主導で官民協働の特徴のある「市立高年大学校」（中学校区規模）の全国展開が、地域活性化のために急がれる時期にある。

地方大学は「多重活用」が生き残り策

*子は昼に親は夜に同学親子の談論風発

地方の公立大学は「均衡ある国土の発展」のために駅弁大学などと呼ばれながらも全国の高等教育機関として成果をあげてきた。全国どこも共通の同じようなカリキュラムを組んできたために地域の特徴を活かすことができなかった。

だが、国の政策が「個性ある地域の発展」へと転回して、地方大学は独自の地域性を取り入れた講座によって変容するチャンスを迎えている。地域経済、地場産業、地方文化・言語・歴史、伝統工芸などといった「地域関連講座」が並ぶことになる。主な受講者はここを「エイジング・イン・プレイス」と定めて人生の第三期を過ごす高齢者。「地方大学高年学部」である。

地方大学が地域の特性を採り入れた課程を強化しているのは、時代に即応した生き残りの手法でもあるからだ。東京では東京経済大学では二〇〇七年四月からシニア対象の大学院を開講

した。出願資格が五二歳以上。立教大学でも開講。早稲田大学は学外キャンパスで開講している。埼玉大学は「充実した第二の人生を埼玉で」ということで夜間コースをシニアに開放した。

地元にもどって高齢期を迎えようとする「Ｕターン」型の人びと、高齢期を迎えて新しい知識を求める地域住民の要請に応じて開講するのが、地方大学の「シニア向けカリキュラム」である。人気テーマには、全国から高齢者が勉強にやってくる。長期滞在し、そのまま定住者あるいは永住者になるかもしれない。地域活性化にかかわる物産情報・地方文化といった講座は人気になるだろうし、大学は人材の集積、発信拠点としての機能をはたすことになる。

そしてなによりも愉快なのは、同じ時期に同じキャンパスで、オヤジやオフクロは「エイジング・イン・プレイス」での夜間「高年学部」で人生第三期のための知識や情報と生涯にわたる友人を得る。そしてムスコやムスメは昼間の大学課程で、人生第二期の社会参加のための専門知識を学び、活動期の友人を得るといふ地方大学の「多重活用」である。

六〇歳をすぎて長い高齢期を視野に入れた「シニア科カリキュラム」でスキル・アップして、前職の経験を合わせて「人生の第三期」をめざすオヤジやオフクロや先輩たちの意欲的な姿が、同じキャンパスでグータラに過ごしていた現役学生に与える影響が大いに期待される。

「大学多重活用」のメリットはもうひとつ。「高年学部」には六〇歳をすぎてなお知識欲の旺盛な人びとが学びにくるわけだから、名誉教授や「シニア教授」のスキル・ブラッシュ、つまり知識のさび止めにも大いに役立つことになるにちがいない。

おわりに 人生の「達人」としての八面玲瓏

— まあ、いいか、でいいか

「現役長生」のステージを迎えたのに

*意識は未熟かまだ半熟のまま

深夜に、愛用のパソコンを前にして、「八面玲瓏」と書こうとした。

無理かなとは思いつながら「れいろう」と打ったら、なんと「冷老」とでた。眠気覚ましにしてはいささかサービス過剰な応答である。パソコンの辞書からは学ぶところも少々はあるが、気ままな応答には多々困らせられる。

「玲瓏」くらい一発で出なくては、辞書として失礼ではないか。

「だれに対しても曇りなく応対できて、処世が円滑である境地を示す」

とあるのは、さすがペーパーの辞書。

棋士の羽生さん（善治。永世名人）が好んで揮毫するそうだが、盤上の争いとはいえ、真剣勝負を前にしての透徹した心境だって示せる、含みの大きいことばなのである。

夜も三更（これも一発では出ない。午前さまのころ）にいたって、日録に「八面玲瓏」と書

こうとしたわけは、ひとりの「人間」として、ひとりの「親」として、ひとりの「働き手」として、また、ひとりの「住民」として、ひとりの「市民」として、ひとりの「国民」として、ひとりの「国際人」として、そして、ひとりの「現代人」として、八面の自分を自省して、だれに対しても曇りなく応対したいと願ったからである。

棋道の達人である羽生永世名人なら、盤の向こうに對面するのはいずれ劣らぬ好敵手であるが、願って人生の「達人」をめざそうといういま、盤の向こうにいるのは、他でもないもうひとりの自分である。もちろん先手はこちらにある。

「おまえが達人？ 丈人までは納得できたが・・・」

そう口撃の先手を打たれて、初手から「挙棋不定」である。コマを手にとって挙げたものの、打つ心が定まらない。打たなければ先へ進まない。

「まあ、いいか」

そこで定石の三六歩にコマを置く。

国民の一人ひとりに対して、これまでの意識を改めて、「人生九〇年」にむかって社会を変えながら過ごしてほしいという要請を出したのは、先にも記したように、内閣府である。

新世紀になってこの一〇年余り、顧みればわかるように、国からそんな指摘や要請があったことはなかった。だから六五歳から支給される「年金」を頼りに長い余生を不安に感じながら生きることに違和感はなかったのである。このたび指摘されたのは、「高齢者意識」の成熟と、

「国民」としてみずからが願うような「モノ・居場所・しくみ」の形成への参加である。ふたつのどちらにも留意してこなかったのは、省みてたしかである。

「高齢者意識」については、多くの「国民」は努めて意識することがなかった。だから成熟どころか、なお未熟でありせいぜいが半熟のままなのである。まずは「高齢者意識」を「人生六五年時代の引退余生」から「人生九〇年時代の現役長生」に改める。この「意識の自立」が先。

このたび自省する機をえて納得したのは、高齢者（六五歳以上）が三二〇〇万人、二五％に達した社会では、これから二五年を越える「余生」を送る四人にひとりの高齢者すべてに、最良の介護・医療を提供しつづけ、穏やかに終末までを看取ることなどできなくなるのは、だれもが当然と理解できるはず。

街へ出てみればだれにでも分かることだが、わが国の社会は実際には三世代がそれぞれに暮らしやすい方向にすすんでいない。高齢者が多いだけの社会は、若者から見ると、やたら目立つ高齢者が何もしないでぶらぶら遊んでいるように見えるのである。

どうすればいいのか。

そのために、八面の自分を自省してみようということである。一人ひとりが、日また一日の暮らしを、「人生九〇時代の現役長生」と捉えなおすこと。その上で一人の「住民」・「市民」・「国民」として、「八面玲瓏」に生きる仕方を自得するしかない。

高齢期の「地域デビュー」は恥ずかしいことではなく、現役時代からの「地閉症」をつづけ

ることのほうが恥ずかしい。まずはひとりの「住民」として動き出さなければ何も変わらない。ここでは生涯にわたって、「自己目標の達成をどこまでも追いつづける人」を「達人」と呼びたい。それなら特定の人物ではなく、だれもが「達人」になれるのではないか。

盤をはさんで、みんなが暮らしやすい地域や職域にする活動にどう参加をしようかと作戦を争っている自分がいる。

高齢者はすべて「社会の被扶養者」として

＊みんなが渡った「霞が関の赤信号」

この国はどうしてこういうことになったのか。

新世紀を迎えたころ、国際的な潮流である「高齢化」（高齢者増加）のなかで、体現者である高齢者層がスムーズに活動し生活できるように、政治リーダーは「日本高齢社会グランドデザイン」を衆議して掲げて、増えつづける高齢者の参画を呼びかけねばならなかったのである。

わが国はもちろんのこと、新世紀の「高齢化」は国際的潮流であり、国連からは各国が「すべての世代のための」高齢社会」を形成するよう要請が出ていたのである。わが国でもこの間には「高齢化」に関する次のような事業活動が立てつづけにおこなわれている。

一九九五年には「高齢社会対策基本法」を制定（村山富市内閣）

一九九六年には「高齢社会対策大綱」を閣議決定（橋本龍太郎内閣）

一九九九年には国連の「国際高齢者年」の記念事業（小渕恵三内閣）を全国的に展開

二〇〇一年には「高齢社会対策大綱」を見直し（小泉純一郎内閣）

二〇〇二年にはスペインのマドリードで第二回「高齢化に関する世界会議」。このスペインのマドリードでの第二回世界会議には、わが国からも代表が参加した。

この重要な時期に、当時の首相は「所信表明演説」（二〇〇一・五・七）で何といったか。将来の高齢者増による「ケア」の負担増を取り上げて、

「給付は厚く、負担は軽くというわけにはいきません」

と言い放つありさま。

それが間違っているというわけにはいかない。だれもが納得できる内容だからである。

しかしここでの問題は、関心が善意の予算とみられていた「高齢者対策」にあり、「高齢社会対策」でなかったことにある。シーリングがかかった予算のなかであって、焦眉の急は個人の

「介護・医療・年金」だったからである。

「元氣ならみずから生きよ」

それが首相ばかりではなく、おおかたの為政者と官僚の時代認識であった。

「高齢社会」にむかう時だからこそ、「給付は厚く、負担は軽くだけは、何としても保っていきたい」と訴えて、将来の国の財政難を説きつつ、これから増えつづける元気な高齢者層に、「自助と自律」の高齢者意識の醸成とともに、高齢者が暮らしやすい社会への参加を求めるのが政治リーダーの構想力というものだったのではなかったか。

その「所信表明演説」を聞いて、天を仰いで慨嘆した学者や官僚や高齢社会活動家や高齢者がいたはずである。わたしもその一人であった。

このままだと、これは記したくないのだが、

「年老いて費用がかさむと考える心優しい高齢者が、善意で死に急いでくれて、日本高齢社会は思いのほかスムーズに形成できました」

なんてことにならざるをえないのではないかと思われた。

一〇年余りの延滞で、その心配がみえている。来たるべき国際的な「高齢化時代」を展望する時、先行高齢化国の日本として、その経緯はあまりにつらすぎる。

新世紀のはじめ、先の「所信表明演説」をしたのは、時の小泉純一郎首相である。

いま「原子力発電の全面禁止」を訴えておられるが、君子豹変して、「高齢社会対策」の延滞をつくった者を代表して展望のなかった過ちを弁明してほしいのである。今世紀はじめに、善意の「社会保障」政策を掲げて、みんなを誘導して「霞が関の赤信号」を渡ったのは、優れた厚生大臣でもあった小泉首相だったのだから。

アベノミクスからは実人生で何の恩恵も受けず、広がった格差の底で、高齢者が、「この国の将来の姿は見たくない、子どもたちに少しでも資産を残せるうちに死にたい」とつぶやくような国をだれが望んだだろう。

今世紀のはじめ、まだ先輩が残してくれた資産（隠し資産も）があったころ、政治リーダーとして、一〇年後の「高齢社会」の姿を構想できなかったのである。「多岐亡羊」というべきか、さがすべき羊がいないほうへ路を渡ってしまったのである。

「高齢者は社会の被扶養者である」

と位置づけて、その上での「医療・介護・福祉・年金」の施策では国際的評価を得たし、平均寿命や健康寿命では世界一となっている。これらは率直に世界に誇るべきことなのである。

しかし、そのとき政治リーダーは「日本高齢社会グランドデザイン」を衆議したか。

先の小渕内閣での「消費税」のとき、「社会保障」のための完全目的税にするため、当時の宮澤蔵相を説いて認めさせた長老政治家は、

「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」

ともらしてくれた。

政権内にそういう動きがまったくなかったわけではない。

二〇〇一年一二月、小泉内閣は五年ぶりの「高齢社会対策大綱」改正を閣議決定しているのである。紙背まで読まなくとも、その記述の中に、優れた官僚と学者によってなすべき対策は

埋めこまれている。政界が「世代交代」の嵐の中にあつたとはいえ、政治リーダーが五年、一〇年先の状況を見抜けなかつたといわれても弁解の余地はないだろう。いやでも仔細な弁明は聞かなければならない。

高齢者の面倒をみるのは、これまでは「騎馬戦」型でいずれは「肩車」型になるといわれる。高齢者の増加と労働人口の減少の先をみて、高齢者扶助での現役世代の負担増をわかりやすく説明した図であるが、こんな実態とちがった図柄はない。

現実の「騎馬戦」図をよく見てほしい。上にいるのはりりしい少年であり、支える側の前にいるのがハチマキ姿の元気なおじいちゃん、両側にいるのが両親である。現実の「肩車」図をよく見てほしい。上にいるのはかわいい孫娘であり、下で支えているのは元気なおばあちゃんではないか。

「平和団塊の世代」（戦後ツ子）が舞台に立つ

*「現役長生」型のニューフェース

ご存じのように、一九四五年の敗戦のあと一九四七〜四九年に生まれた七〇〇万人の人びとを、やや失礼と知りつつ「団塊の世代」と呼んできた。一九七六年に作家の堺屋太一さんが『団塊の世代』を書いて、そのボリュームゆえの社会的影響を指摘して以来の呼び名である。

しかし本稿が用いている戦後ツ子としての「平和団塊」というのは、同じく二〇〇万人余が生まれた一九五〇年と、終戦の翌年である一九四六年生まれの一四〇万人を加えて新世紀を迎えた一〇三七万人（二〇〇〇年一〇月・国勢調査）を指している。

「平和団塊の世代」は「現役長生」型人生のニューフェースである。

「人生九〇年（六五十二年）時代」の第三期二五年のステージを、「引退余生」型ではなく、「現役長生」型の高齢者として過ごそうとしている若き高齢者「平和団塊」のみなさんと「一〇〇歳社会」に先駆けしている高齢女性のみなさんに注目したい。内外の後人は、敬意をもってその歴史的活動を見守っていくにちがいない。

ここで主役になる「平和団塊」のみなさんの横顔をすこし紹介しておこう。

一九四六（昭和二一）年

仙谷由人（一・一五 政治家） 鳳蘭（一・二二 俳優） 松本健一（一・二二 作家） 宇崎竜童（二・二三 歌手） 美川憲一（五・一五 歌手） 北山修（六・一九 歌手） 新藤宗幸（六・二五 政治学） 柏木博（七・六 デザイン） 岡林信康（七・二二 歌手） 堺正章（八・六 TVタレント） 坂東真理子（八・一七 官僚） 田淵幸一（九・二四 プロ野球） 菅直人（一〇・一〇 政治家） 秋山仁（一〇・一二 数学教育） 藤森照信（一一・二一 建築史） 倍賞美津子（一一・二二 俳優）

一九四七（昭和二二）年

橋本大二郎(一・一二 政治家) 衣笠祥雄(一・一八 野球評論) ビートたけし(一・一八 TVタレント) 星野仙一(一・二二 プロ野球) 尾崎将司(一・二四 プロゴルファー) 西郷輝彦(二・五 歌手) 鳩山由起夫(二・一一 政治家) 津島佑子(三・三〇 作家) 千昌夫(四・八 歌手) 上原まり(五・二三 琵琶奏者) 荒俣宏(七・一二 作家) 中原誠(九・二 将棋棋士) 小田和正(九・二〇 歌手) 北方謙三(一〇・二六 作家) 金井美恵子(一一・三 作家) 西田敏行(一一・四 俳優) 森進一(一一・一八 歌手) 池田理代子(一二・一八 漫画家) 布施明(一二・一八 歌手)

一九四八(昭和二三)年

高橋三千綱(一・五 作家) 輪島大士(一・一一 大相撲) 毛利衛(一・二九 宇宙飛行士) 里中満智子(一・二四 漫画家) 赤川次郎(二・二九 作家) 五木ひろし(三・一四 歌手) 赤松広隆(五・三 政治家) 江夏豊(五・一五 プロ野球) 都倉俊一(六・二一 作曲家) 沢田研二(六・二五 歌手) 上野千鶴子(七・二二 女性学) 井上陽水(八・三〇 歌手) 鳩山邦夫(九・一三 政治家) 橋爪大三郎(一〇・二二 社会学) 糸井重里(一一・一〇 コピーライター) 由起さおり(一一・一三 歌手) 舛添要一(一一・二九 都知事) 谷村新司(一二・一一 歌手) 内田光子(一二・二〇 ピアニスト)

一九四九(昭和二四)年

村上春樹(一・一二 作家) 鴨下一郎(一・一六 政治家) 林望(二・二〇 国文学) 海

江田万里（二・二六 政治家） 高橋真梨子（三・六 歌手） 平野博文（三・一九 政治家）
武田鉄矢（四・一一 歌手） 高橋伴明（五・一〇 映画監督） 萩尾望都（五・一二 漫画家）
ガッツ石松（六・五 ボクシング） 矢沢栄吉（九・一四 歌手） 佐藤陽子（一〇・一四 バイオリニスト） 堀内孝雄（一〇・二七 歌手） 松崎しげる（一一・一九 歌手）
森田 健作（一二・一六 政治家） テリー伊藤（一二・二七 演出家）

一九五〇（昭和二五）年

残間里江子（三・二一 プロデューサー） 舘ひろし（三・三一 俳優） 和田アキ子（四・一〇 歌手） 坂東玉三郎（四・二五 歌舞伎俳優） 東尾修（五・一八 プロ野球） 中沢新一（五・二八 宗教学者） 池上彰（八・九 ジャーナリスト） 姜尚中（八・一二 政治学者） 八代亜紀（八・二九 歌手） 辺見マリ（一〇・〇五 俳優） 塩崎恭久（一一・七 政治家） 梅沢富士男（一一・〇九 俳優） 岩合光昭（一一・二七 写真家） 綾小路きみまろ（一二・〇九 漫談家） 神田正輝（一二・二一 俳優）

この一〇〇〇万人の一人ひとりをも、敗戦後のきびしい生活環境の中で生み育てた両親の思いを想起して、本稿は新世紀の国際平和を支える高齢社会の主役として「平和団塊世代」と呼んで注目しつづけてきた。「団塊世代」では即物的にすぎて、また「平和世代」では理念的にすぎて、いずれも不満であるかもしれないが、あわせて「平和団塊世代」と呼ばせていただくのをお許しねがいたい。

先進諸国の同世代の人びととともに、この「平和団塊の世代」（戦後ツ子）が、平和裏にみずから安心して後半生をすごせる社会を形成し、長寿を全うすることが、前世紀の戦争の惨禍と混乱の中で両親が希い求めた「平和に生きる」ことの証にちがいないからである。

わが国の高齢者の一人ひとりが世紀をまたいで、人類の普遍の願いである長寿を体現している。こんな役回りは願っても求めても得られるものではない。

そして二一世紀半ばの二〇四五年、「日本国憲法」は平和に徹した高齢化先進国の日本が持ちきたった誇るべき「世界平和の証」となる。一〇〇年保持しつづけて「百寿」で迎える「日本国憲法一〇〇周年」は、国際社会からスタンディング・オベーションを受けて迎えられることになるだろう。世紀のドラマまで、あと三四年である。「平和団塊」のみなさんは、そのときの証人として参加するために、「人生一〇〇年」をめざして歩むことになる。

二 住民・市民・国民として

熟成期を共有する「地域シニア文化圏」

*何万という水玉模様が存在のかたち

本稿では「地域シニア文化圏」ということばを、強い把握力をもつ高齢期キーワードとして

位置づけている。

「シニア文化圏」というのは、「人間六〇年」を過ごして、それぞれに個性的にわが道での業績を積み上げてきた高齢者が、異なった成果を得た人びとと出会い、お互いに経験や業績を語り合い、高齢者同士でなければ味わい得ないレベルの理解を共有することを目途として集った場（高齢期の文化拠点）といった程のところ。高齢者の「家庭外の居場所」といつてもいい。

少し排他的に言えば、「利」を望まずに、あるいは望んでも優先せずに、「文を以って友と会す」といったところ。少し加えていえば、青少年や中年の存在を脇に置いて、「おとながおとなの文化を語っておとなの文化を感じる場」といったほうが分かりやすいかもしれない。

そう気づいていないだけで、すでにさまざまな形で存在しているから、とくに新しいことを言い出しているわけではない。ここではそれを高齢期を意識した視点から捉え直すことになる。「あ、これはシニア文化圏だ」と意識することで、高齢社会のなかにそれぞれに個別な特色をもって重なった水玉模様のような印象の存在として見えてくればいいのである。

語られる「シニア文化の内容」とはどういうものか。

「環境」とか「文化」というと、どうにでも広くも狭くもなるが、狭く考える必要はないだろう。学術的な領域から芸能・スポーツ、暮らしの知恵に至るまで、万般にわたってみんなが共有しているもつとも広い意味での「文化」のイメージでいい。語りあっている内容を「文化」と意識すること。少し限定するとすれば、六〇歳を経た高齢期にある人が関心をもって考え、

語り、感じとり、作り、表現した事象・事物を主に対象とする、ということぐらい。

二〇一二年三月に亡くなったが、同時代人として並みならぬ思索の根っこを持つていた吉本隆明さんのような人の、一九六〇年代の状況下でロゴス（統一法則を内包することば）の混乱にまきこまれながら柔軟で示唆的であった『共同幻想論』などから、思索の根っこをそのまま曝した『老いの流儀』などの近作にいたるまでの、中年期と高年期の作品を合わせて採り上げてみるのもおもしろい。また『蓮如』を書いた五木寛之さんは、古代インドの「四住期」から想をえて人生のありようを説く『林住期』を書き、最近には『新老人の思想』を書いた。個人の生き方のありようを話しあうにはいい。井上靖さんの『孔子』や瀬戸内寂聴さんの『釈迦』といった史上の人物についての作品は、作者の生き方と重ねて、さまざまな角度から語り合える素材となる。曾野綾子さんも『人間にとって成熟とは何か』で終末期への心がまえをていねいに説く。こんな著作から和食や認知症対策まで経験と知識が飛び交えばいい。

文化圏の「圏」としての大きさは、どうだろう。

テーマや参加する人にもよるだろうが、「最小規模の多数」である七〜一人といったところが基本だろうか。私的な仲間の会としてみかける四、五人の会では、少ないために変則や異見といった「文化を生じる」要素を含み込みずらいが、時にゲストを呼んでみることで新たな「文化圏」になるだろう。

また多すぎると散漫になる。メンバーが多い場合には七〜九人を代表発言者とし、テーマや

時間を限って質疑などを通じて全員が参加するシンポジウム方式が有効のようである。

わかりやすい例としては、多くの会議や学会の総会そのものも高齢者が中心の「シニア文化圏」ではあるが、むしろその後の「二次会」のほうを基本型と考えたらどうだろう。二次会なら五、七人でも談論風発、結論を出す必要もなく、話題はさまざまに移っていく。ひとつのテーマをめぐる場合もあるが、意見が二つに割れたり三つになったり、二つの話題が混ざって語られたり、また一つにもどったりする。その自在性の中に「最小規模の多数」による発見と味わいがある。

高齢者同士が自由自在に「文化を語って文化を生じる場」が「シニア文化圏」であり、高齢期の人生の成熟とともに実感しあえる愉快な「高齢期の居場所」なのである。

高齢期になって親しくつきあえる人といえ、だれでも「学友」と「同僚」と「親族」の三点セットのうちに、幾人もの信頼する相手を持っているだろう。

しかし実はこの三点セットだけでは長い高齢期の人生を充足して送るには心もとないのである。心もとない理由は、どれも高齢期になって自らが選んだものではなく、与えられた環境下で得た人びとであり、外に閉じた仲間だからだ。

高齢期に心躍る人生の充足を得るには、さらに地域や目標とする分野からあらたに加えて五つ七つの「シニア文化圏」での活動が、高齢期の人生に変化と厚みのある成果を刻んでいくことになる。

「シニア文化圏」だからといって「青少年」や「中年者」を排することではない。中心になる構成メンバーが高齢者であり、中心テーマが高齢者が対象とするものということであって、とくに次の成員となる中年の人びとには開かれたものでいい。ほどよい「シニア文化圏」の存在が、一人ひとりの「第三期ステージの人生」の充足と重なるであろうことは確かである。

多岐にわたる高齢者活動

*リードする「昭和丈人層」の人たち

昭和生まれの高齢者層が、あるべき存在感を示していないわけではない。わが国の「高齢者活動」は湧出期にあつて、その中心にいて主導しているのは、まぎれもない昭和生まれのみなさんのからだから。長い苦闘の経緯をもつ高齢者ケアとしての「福祉」「医療」「介護」の分野はもちろんのこと、高齢者活動は、実にさまざまな領域へと広がっており、際立つ分野だけでもこれほどにある。

各種の生涯学習（趣味、生きがい、健康）。

虐待防止、遺言相談。後見人相談。

高齢者雇用、起業支援。

年金、貯蓄・投資、マーケット情報、保険。

シニア向け新商品開発、介護福祉機器・電化製品、車・乗り物などの製造・販売。
ショッピング、通販、宅配。

ファッション、料理、食品、レストラン、居酒屋。

ケア付き住居、いなか暮らし、住宅改修（バリアフリー）、家具・用具。

パソコン教室・通信、カルチャー講座・セミナー・シンポジウム、イベント。

シニア向け新聞・雑誌・広告、テレビ・ラジオ番組。

短歌・俳句・川柳、ナツメロの会、自分史、楽団、手づくりクラフト。

ゲートボール、テニス、ゴルフ、太極拳・ヨガ、碁・将棋、ゲーム。

環境美化、伝承活動、世代交流。

国際交流、海外ツアー、旅行、ホテル、国民宿舎。

・・・などなどである。

組織の名称はといえば、「シニア」が圧倒的に。「老人」や「シルバー」といった先輩格のもの、しつかりと根をはって活動している。

「老人」ということばは、老練、長老、老師など経験を積んだ高齢者をもいうのだが、どうも旗色が変わるのは、長く「老人ホーム」や「敬老会」などが随伴してきたために「高齢弱者」をねぎらうというニュアンスが働いているからだ。

「敬老」には「敬老尊賢」という味わいのあるすつくと立ついいことばもあるのだが。そのあ

たりの欠落をフォローするために本稿の「丈人」が意味合いをもつことになる。

「老人のつく活動組織」での代表は「老人クラブ」である。敗戦後間もない一九五〇（昭和二五）年に発足して以来、自治体と連携しながら地域の高齢者の生きがいと健康づくりに貢献してきた。「全国老人クラブ連合会」（全老連）には、一〇万余クラブ、約六六七万人の会員が参加。「友愛訪問」「伝承活動」「環境美化」「世代交流」といった幅広い活動に乗り出している。

本稿が「老人力」やことし亡くなったなだいなださんの「老人党」の活動に関心を持ちながらも、新しい「高齢化」の活動にあえて「丈人論」を展開しているのは、既成の活動が収容しきれない高齢者活動に注目しているからで、決して他を否定的にみているわけではない。個人的には、「高年期の人生は明日をも知れないことに実感がある、九〇歳なんて結果であって意味がない」という生き方もある。高齢期の生き方は多彩であっていい。高齢者みんなで何かをというのは、いささかキツイ話だからである。といって、みんながみんな内向的になってしまうのは、社会の姿として困ったことになる。

湧出する「第三期シニア・ステージ」

*「シニア」ほか多彩なカタカナ団体名

「シルバー」・「アクティブ・シニア」

「シルバー」は、グリーンやブルーといった「アシッド・カラー」（柑橘類の色）などに対する色彩の比較から生まれた和製語である。

高年者を「シルバーエイジ」としてとらえて、活動的なイメージを付加して、運動・旅行・講座などの研究所や教室が用いている。高齢者の能力を活用する「全国シルバー人材センター事業協会」や「シルバーサービス振興会」などは定着している。

ここで確認しておきたいことは、「だれもが（ユニバーサル）」とともに、それよりも優先して「高齢者自身のため」を意識した活動であっていいということである。

高齢者の活動の湧出期にあたって、さまざまな分野で「アクティブ・シニア」が先行して新しい活動を進めている。そこでカタカナ語の団体・協会が続出している。

「アクティブライフ」は、活動的な暮らしをめざすことで、高年者主体のボランティア・グループが用いている。「ニッポン・アクティブライフ・クラブ」など。

「エイジド」・「エイジング」・「エイジレス」

「エイジド」や「エイジング」などは、それぞれに年輪を刻んで到達した営みが意識されて使われている。

「エイジド」は、ワインやギターやコーヒー豆での利用が優勢だが、経験を積んで熟成した意味で、これも高齢者を支えるボランティア組織やNPOが用いている。

「エイジング」は、老化がすすむことを意識して「アンチエイジング」として医療や美容外科

など、もっと広く「わかづくり」ほどの意味で用いられる。「ウエルエイジング」や「アクティブ・エイジング」として高齢期を積極的に受け入れる立場を示している。「エイジング総合研究センター」や「日本ウエルエイジング協会」は歴史をもつ活動をおこなっている。

「エルダー」は、旅好きのおとなのための「エルダー・ホステル」が世界一〇〇カ国に開設されていて、学習と旅をあわせた高齢者対象の活動をしているのが目立つ。「日本エルダー協会」や「エルダーホステル協会」など。

「エイジレス」は、年齢にとらわれないという意味で「エイジレス・デザイン」「エイジレス商品」「エイジレス・ライフ」などとして広く用いられている。

「ユニバーサル」

一方に、高齢を意識しながら人生に年齢は無関係であり、それを超えたものであるという意味での「ユニバーサル」が知られる。

「ユニバーサル」は、だれもがという意味合いで、とくに「ユニバーサル・ファッション」が、高齢者にも障害者にも快適で喜ばれるファッションとしてバリアフリーが意識されて用いられている。「ユニバーサル・ファッション協会」など。

まだまだあるのだが、ここでやや立ち入ってカタカナ語に触れたのは、高齢者活動は、さまざまな方向でそれぞれの立場で、熱心に活動している人びとと組織に支えられているからで、どれかひとつとはいかない。それどころか多いことはいいことなのである。

「高齢者活動団体」

活動の広がりを見るために紹介がカタカナ語に片寄ってしまったが、とくに福祉を核としながら活動している「高齢者活動団体」は枚挙にきりがない。

その推進役になっていく組織・団体の存在を見落として先にいくことはできないので、ここはその場ではないからほんの一例の紹介にかぎるが、紹介しておきたい。

福祉・介護・市民後見人の「さわやか福祉財団」や高齢者・加齢学研究の「東京都健康長寿医療センター」（東京都老人総合研究所と東京都老人医療センターが統合）、高齢者雇用の「高齢者雇用開発協会」、「高齢社」、高齢女性の「高齢社会をよくする女性の会」、「ねんりんピック」によって活力ある長寿社会をめざす「長寿社会開発センター」、生涯学習の「生涯学習開発財団」、住宅に関する「高齢者住宅財団」、高齢活動人材養成の「高齢社会検定協会」・など。そして一九九九年の「国際高齢者年」の国民運動を機に設立された「日本高齢社会NGO連携協議会」（JANCA）にはNGO（非政府組織）・NPO（特定非営利活動法人）を中心にした数多くの活動団体が参加して運動を支えている。

そして何より心づよいことは、「高齢社会」形成の主役を体現しながら活動する組織を支えているのが、先の大戦の惨禍と戦後の混乱を知っている昭和前期・中期生まれの人びとであることである。この欄、失礼があればお恕しねがいたい。

日本型本線は「多子化・高齢化社会」

*有史以来という「少子化・高齢化」に対処

わが国の「総人口」が減少に転じたという。

個人の身のまわりで感じられるものではないが、統計として示されれば納得せざるをえない。日本だけが特別というわけではなく、ドイツもロシアも減少国である。人口統計によれば、二〇〇五年の一億二七七七万人をピークにして二〇〇六年から減少。有史以来のことという。

高齢者が増えつつけているのに、総人口が減少に。とすれば高齢化はいっそう足早になる。「高齢化」は高齢者が四人にひとりとなって目の前で実感が持てる。「少子化」も想定できる。「総人口減少」の事態に対しては、減ってもよいという意見があるようで、しばらくならぬに減るにまかせて、相応に対応するのがよいというもの。明治のはじめには三〇〇〇万人であったが、大正のはじめには五〇〇〇万人に、戦後直後は七〇〇〇万人に、そして昭和四二（一九六七）年には一億人に達した。

いまや年間一〇〇万人の出生数に減ったが、戦後には二五〇万人も生まれたのだし、産児制限までして減らそうとした時期もあって、急激な人口増加による「過剰人口」への対応が政策課題とされたころもあった。だから「過剰高齢人口」という事態は同様に政策課題として避けられない。そこで一過性のものとして通過を待とうというのである。一〇〇〇年で三倍になった

人口増に耐えてきたインフラは人口減少によって楽になる。住宅などは空家をどうするかという段階を迎えている。

しかし、高齢社会を論じる立場からは許すわけにはいかない。

「少子・高齢化」を政策担当者の側が、既定の姿として引用するのは許すわけにはいかない。「少子化」を常態のことで、「高齢化」を一過性とするのは逆である。政策としては「少子化」を一過性として「多子化」をめざし、「高齢化」を常態として確固とした高齢社会を形成する政策を保持するものでなければならぬ。「長寿を生き延びるために」という善意の高齢者の実人生を傍観するものになる。国家の衰弱、滅亡へむかう論理であり、許されない。

国は将来の活力維持のために、人口増につとめ、「少子化」に歯止めをかけねばならず、そのためには高齢化対策にも努めて、同時に「多子化・高齢化」を指向することだ。

国は若年者支援の細かな対策を、自治体や企業の現場に求めているが、「多子化・高齢化」を、「エイジング・イン・プレイス」(子どもの成長期と高齢者の成熟期の居場所)での同時課題とすべきなのである。

現状を説明するに当たって、無策のまま人口減少の統計的な将来予測を述べる現役の担当官僚がいるのは咄然とするばかりである。一方の当事者である高齢者の存在が、「多子化社会」の推進のためにどれほどの役割を持っているかに思い及ばないのである。

「長寿社会」はすべての世代の課題

* 少年期も青年期も「長寿」へのプロセス

わが国の「高齢化」のプロセスはどうだったか。

高齢化率七%の倍数である一四%までを「高齢化社会」と呼び、この間は余生型の高齢者の姿が街にちらほらという段階である。国も自治体も社会の功労者として、介護・医療・年金といった高齢者個人を支える「社会保障」に力をそそぐようになる。

ここからさらに増えて二一%までが「高齢社会」である。高齢者がお互いに高齢者の存在に気がつく段階で、高齢者のための「居場所・モノ・サービス」が工夫され、「高齢者による高齢社会」形成の段階である。国や自治体は介護・医療・年金という「高齢者三経費」の増加に財政上のやりくりがむずかしくなりはじめる。

さらに高齢者が増えて二一%を超えたところからを「超高齢社会」と呼ぶ。「本格的な高齢社会」であり、ここからは高齢者ばかりでなく、三世代みんながそれぞれに暮らしやすい新たな社会「長寿社会」を共有するための議論や活動がすすむ。高齢化率の進み方は異なっているが、どの国も二一世紀初めには、すべての世代が参加する「超高齢化社会＝長寿社会」の時期を迎える。わが国はその先頭にいるということになる。

一九七〇年にわが国はすでに七%の「高齢化社会」に達している。そして一九九四年には「高

「高齡社会」の一四％に。この間わずか二四年だった。そのあと一九九五年に「高齡社会対策基本法」の制定し、一九九六年に「高齡社会対策大綱」を閣議決定した。世紀をまたいで高齡化率は二〇〇七年には二一％に達している。この間が一三年。いまや「高齡化率」が世界最速最高の二五・九％にまで達している。世界で最速で高齡社会を迎えているという実感は、個人的には理解しようもないが、それを体現して暮らしていることだけは確かなのである。

「高齡化社会」から「高齡社会」となるのに二四年だった。フランスの一一五年はともかく、イギリスが四七年、ドイツが四〇年というから極端に短い。その後わずか一三年の二〇〇七年には「超高齡社会」（長寿社会）に達している。

この早さは一億の人口をもつ国としては稀有の例なのである。国の施策は「介護・医療・福祉・年金」など「高齡者対策」で精いっぱい。「しくみ・居場所・モノ・サービスづくり」など「高齡社会対策」までは手が回らなかったのだが、それを非難できる立場はだれにもどこにもない。しかし歴史的な視点で見れば、やはり政治リーダーにその構想力がなかったということになる。それは高齡者である国民みずからの責任である。自分たちの人生を他に預ける「余生」型人生がもたらしたもので、これでは後世代への負担となる。

こんなことは、ふつうに暮らしているかぎり、高齡者個人にはわからない。「長寿社会」はすべての世代のテーマである。生まれた子どもが八〇歳まで生きられるというのは、子どものときから八〇歳になってもきちんと歩ける体力をつくっておくことを心がける

ということである。女性も若い時に痩せようとして、「こんにやくダイエット」などをして、骨が弱い、なんてことでは平均までたどりつけなくなる。八〇歳の健康体の骨格は二〇歳までにつくっておかなければならないからだ。

ああいう国になりたいという国の姿

＊さまざまな立場の高齢社会構想

すでにある述べてきたが、「高齢者が新たな歴史をつくるとき」である。
いまこそ、この人たちの声を聴こう。

ここで紹介している方々は、それぞれにたしかこの国の将来像をお持ちであり、紹介するだけでその姿が見えてくるとともに、話されている声が聞こえてくるように感じられる親しい方々ばかりである。(web『月刊丈風』本年八月号を開いていただきたい)

まず「さわやか福祉財団」の堀田力会長。

ことし七月二九日、内閣府主催の「高齢社会フォーラムin東京」での講演で、堀田さんの声は囁れていた。この夏は東奔西走、「毎日が月月火水木金金」といった忙しきで、全国の自治体をまわって講演をしておいでだからである。「支えられる高齢者」のための介護などの事業が来年から現場の地域自治体に移行する。「地域医療・介護推進法」の成立(二〇一四年六月)と

ともに「支える側の高齢者」の自主参加が求められるからである。

とくに「毎日が日曜日」の暮らしに慣れた退職後の男性たちに「共生の文化」を説いている。住んでいる地域に関心が薄く、自分と家族のためにだけ余生を過ごし、いずれは介護・医療だけは地域に頼るといふ暮らし方が「恥ずかしい」と感じるような風習を、堀田さんは「共生の文化」と呼んで、地域の元気な高齢者への提言としている。

住み慣れた地域での高齢者の「医療・介護」を包括的に確保する「地域包括ケアシステム」が、自治体の主導で充実されることになる。「支えられる高齢者」のための最善の姿をもとめる実務側の厚労省原老健局長の「医療と介護の一体化」についてのくわしい説明とともに「支える側の高齢者」にむけた堀田会長（七月に財団会長に就任）の「新地域支援構想会議」（全社協、日生協など一四団体参加）を代表しての講演は、ことし三月に全社協のセミナーでなされたが、この国の高齢社会のありかたを同時に訴えかけている。双方への理解と対応が、安心して地域で暮らすための高齢者の側の務めであろう。

「高齢社会をよくする女性の会」の樋口恵子理事長の将来像は、歴史上で初の「人生一〇〇年社会」である。昨年の講演（「高齢社会フォーラム in 東京」・七月）は、この国の高齢社会を形成する活動のプロセスと将来像を理解する上での、まぎれもない歴史的文書である。

女性リードで「一〇〇歳社会」をめざす樋口さんご自身は「傘寿期」に到達したばかり。初代としてお仲間とともに「人生一〇〇年社会」の到達点を見据えている。一〇〇年を差し引いて

内閣府が「人生九〇年」としたのは男性型であると評しながら。

「いまわたくしたちは、「人生一〇〇年社会」へという、人類の歴史のなかで初めての長寿を普遍的に獲得した社会を生きる。そしてそれにのっとった地域であろうと国であろうと、生きる主人公は人間であります。その人間の幸せのために、わたくしたちは初代として今日も一歩一歩努力をしているのだと思うと、「なかなかいい時に生まれちゃったじゃないか」と、わたくしなどはよろこばしく思うわけでございます」（内閣府「高齢社会フォーラム in 東京」基調講演「シニアの社会参加で世代をつなぐ」二〇一三年七月）

と明快に述べておられる。

元東大校長の小宮山宏プラチナ構想ネットワーク会長は、「産業革命からプラチナ革命へ」を説く。わが国は江戸時代にはすでに近代への準備を終えていたアジア唯一の先進国であったこと（途上国でなかったこと）、いまや大量生産時代を終えて新しい価値QOLである「省エネ時代」にはいつていること、を具体例によって示しておられる。

東大高齢社会総合研究機構の秋山弘子特任教授は、高齢社会活動の成功事例を集めた「リソースセンター」の設立を提案しておられる。東大リーディング大学院での国際的人材育成や今年九月に第二回をおこなった「高齢社会検定試験」（高齢社会検定協会）、柏市でのまちづくり、RESEXでの「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」の領域総括などを通じて成果を積み上げておられる。「ああいう国になりたいという国」がつくれるかを課題として。

政界の長老、クオータ制でもつくって参議院議員として残っていたきたい高齢政治家のおひとりである藤井裕久民主党顧問は、「戦争のない社会を守りつづける政治」「歴史に学ぶ政治」の課題を実践しておられる。引退したあとの民主党近代史研究会のオーブンフォーラムはその実現の現場のひとつ。三谷太一郎、加藤陽子講師などを呼んで「昭和初期の歴史」に「戦争」への萌芽をさぐっている。安倍政権の「歴史に学べない」方向に危惧を深めながら。

わが国は「人生六五年」引退余生」時代のあと、世界に先がけて「人生九〇年」現役長生」時代を迎えているというのに、高齢者の意識も暮らし方も変わっていない。国の骨格を中年層がしっかりと支え、若者の新たな力が加わり、女性の登用がすすむとともに、渋く輝く高齢者の参加が必要である。

待つのではなく、高齢者が自主的に社会参加しないかぎり、「高齢社会」の形成は遅延しつづき、公助の負担は増え、後進世代からは「自助」の要請が強まることになる。いまこそ「地域参加」という互助のしくみづくりにみずから立ち上がる好機といえる。

九割中流の「大同」の社会に近かったころの情景を思い出してほしい。

車中では、客はだれもが等しく話し合っていた。席を離してとるなどは考えられなかったことである。公園では、だれもが仲良く遊んだ。草野球のメンバーが足りなければ飛び入りで加わった。子どもたちは、だれとも親しく話をしていろいろなことを学んだ。あのころの日本は、経験したものの心の底に息づいているはずである。

一人ひとりが日々を楽しむ長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成と、アジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」とは、ふたつながら平和の証であり、日本高齢者の課題であり、本稿の目標である。

「高齢社会グランドデザイン」を衆議し掲げよう

＊政治リーダーの構想力が問われる

世界の注視のもとで、「先進的高齢社会」を成し遂げるべく、いまそのプロセスを体現しているのが、わが国の高齢者である。

とはいうものの、これまでのところではなお「高齢者社会」であって、さまざまに各地各界で繰り上げられるはずの「モノ・サービス」づくり、「居場所」づくり、「世代交流のしくみ」づくりなど、高齢者が保持している知識・技術・資産を活かした高齢化活動が渋滞している。高齢者みずからの暮らしやすい生活圏の達成にむかってスムーズに動いていない。なにより高齢者が「高齢社会」づくりを意識して参加し、その成果を享受しているという実感や共感を持つことができないでいる。

それはなぜか。

何度も述べてきたが、「日本高齢社会グランドデザイン」が掲げられていないからだ。

国政にかかわる政治リーダーが、産・官・学・民間の衆知をあつめて構想せねばならず、それを推進するのが国のしごとであり、平和戦略であり、それにふさわしい政治体制、専任の高齢担当大臣が内閣府にどっしりと座していなければできないことである。

ここでの欠落は「高齢者対策」ではなく「高齢社会対策」であり、それを推進する政治リーダーである。政治は「社会保障」の財源を用意してくれたが、肝心の「日本高齢社会グラウンドデザイン」を衆議して掲げることをしてこなかった。先にも記したが、「消費税」導入のとき、「社会保障」のための完全目的税にするために務めてくれた長老政治家は、「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」と率直に述懐しておられる。

「先行高齢者国」が「先進高齢社会」をどう成し遂げるかの構想は、国内はおろかアジア地域どころか世界規模で注目されており、まずはこの「高齢社会グラウンドデザイン」を公開し、その達成にむけたプロセスと成果を国際発信することによって納得され達成されるのである。そういう時期なのに現状はそういう姿に向かっていない。

二〇一二年一月から二〇一三年八月まで、「社会保障制度改革国民会議」が検討したのは、「医療・介護・福祉・年金・少子化」であり、そのうち年金は結論を出していない。つまり本格的な「高齢社会構想」の議論には踏み込んでいないのである。座長を務めた清家篤慶応義塾大学塾長は、「高齢社会対策大綱」を検討し改訂した有識者会議でも座長をつとめており、その

あたりのことは熟知しているはずであるが、多数意見を尊重する立場上、発言されない。

一九九五年の「高齢社会対策基本法」制定以来、来年は二〇年になる。推進の中心に担当大臣を置いて、衆議して「日本高齢社会グラウンドデザイン」構想を掲げるべきときである。

どっしりかまえた専任大臣のもとで

＊内閣府に「高齢社会対策」担当の太い動線を

最近の「高齢社会対策」の担当大臣を見てみよう。

毎年出されている『高齢社会白書』（内閣府刊行）の閣議への提出者をみると、平成二一年度版は野田聖子大臣が、二二年度版は福島みずほ大臣が、そして二三年度版は蓮舫大臣、二四年度版は小宮山洋子大臣、二五年度版は森まさこ大臣が閣議決定時の担当大臣となっている。連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせ担当する人選であり兼任であり、それも「少子化対策」の方が主であることが知られる。

民主党政権時代だけで九人の担当大臣がいた。そのことを議員どころか閣僚どころか本人すら意味合いを知らなかったのではないか、と思われるほどなのである。参考までだが、九人というのは、福島みずほ、平野博文、荒井聡、岡崎トミ子、村田蓮舫、細野豪志、村田蓮舫（再）、岡田克也、中川正春各議員。時節がらその重要性を知っていれば、少時とはいえ内閣改造時に

兼任で担当となった岡田副総理は、おそらくそれ相応の対策をとったことだろう。

これは記すのをためらうが、改訂した「高齢社会対策大綱」を閣議決定した野田総理も、高齢者の活動がいまの社会にもたらす有意な影響には触れているが、それが高齢者自身の実人生を活発にし新しい社会の形成に向かうことには気づいていない。若き総理（五五歳）には理解が及ばなかったようである。それは六〇歳の安倍総理にもいえることだが。

これはいったいどうしたらいいのか。

しごとも少なく、予算も少なく、組閣時に「高齢社会対策担当大臣」として辞令も出ないために、恒例の組閣後の記者会見でも関連する質問が出ない。いまや「日本高齢社会」の形成は国際的・歴史的事業なのに、国のリーダーは、その重要性を理解しないままにいる。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当している。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員がいるにはいるが、兼務だったりするから、「高齢社会対策」を担う太い動線が内閣府内に整っているとはいえない。要するに主要な職務として扱われなくなっているのである。

「高齢化」を一過性のものとし、「少子化」を恒常的なものとする逆の施策は、この国の将来を二重に誤ることになる。遅れを取り戻すには、内閣府内に「高齢社会対策」を担当する太い動線を形成して、高齢社会推進のしごとを進めねばならない時期にある。「スポーツ庁」よりも「高齢社会庁」の設置が先。国際評価につながる「高齢社会対策」が必要なにもかかわらず、国

会議員は、その不在になお気づこうとしない。

ここは三二〇〇万人の高齢者が、声を合わせて衆口一詞、

「高齢社会対策の専任大臣と強力な部局を！」

「日本高齢社会ブランドデザインを掲げよう！」

と叫ぶ必要がある。

「日本高齢社会」形成への新たな烽火である。

世界初の「長寿社会」達成をめざす

*高齢者を中心にすべての世代の参加によって

高齢化先行国として「日本高齢社会」の形成事業は、一九九五年に「高齢社会対策基本法」を制定していいスタートを切った。その後二〇年、まことに残念なことに延滞しつづけてきたのである。いまそのことを責め立てても後悔しても仕方がない。

「日本高齢社会」形成の事業は、世界初ゆえに、二〇年の準備のあと、「高齢化率」二五%となるのを待って、「四人にひとり型の高齢社会」のモデル事業として本格化すると考えて実行にかかれればよい。戦後っ子「平和団塊」の世代一〇〇〇万人の若き高齢者層の参加を待って、という好事情もある。今からなら成功事例をつくることは可能である。このまま何もしないで過

ごせば国際的な失敗事例となる。

そんなことはあつてはならない。

一九九九年の「国際高齢者年」のあと、この国のありようをつぶさに見察してきた本稿は、「団塊の世代」が定年を迎えるとき、高齢者の老後が穏やかな姿になっていないだろうことを予測してきた。善意の「お仕着せユニバーサル・デザイン」はたいせつだが、みんなが従うところでの課題としている「存在感のある日本高齢社会」の創出を担う主体者が見当たらなくなってしまうことも危惧してきた。

「日本型高齢社会」は、この国で暮らす高齢者一人ひとりによる意識的自発的な活動なしには成り立たない。その総体的な姿を推察するのはむずかしいが、その達成に向かうとき、この国にどのような変化をもたらすか。

それは行く先明るい展望でなければ意味がない。

二〇二〇年（東京オリンピック開催年）ころまでの内輪な推測としてだが、高齢者の意識的自発的な社会活動によって、次のようなことが達成されていなければならぬだろう。

・一過性の「アベノミクス」効果が衰落して収束にむかう日本経済を救済するであろう。

・「超一〇〇〇兆円」の財政赤字の解消、つまりプライマリーバランスは、持続的な「高齢化社会経済」の推進によって大幅な縮小ができるであろう。

・「超一四〇〇兆円」といわれる家計黒字は高齢社会形成のための投資に向かうであろう。

- ・「アジアの先進国」として途上国が範とする日本でありつづけるであろう。
- ・「少子化」に歯止めをかけ、子育てで繁忙な女性の就業支援ができるであろう。
- ・「好事門を出でず、悪事千里を行く」という世相を防止できるであろう。
- ・「高齢弱者」の不安を払拭してだれもが安心して暮らせる「長寿社会」をもたらすであろう。
- ・世界がモデル事例とする「日本長寿社会」が姿をみせているであろう。
- ・数多くの国際機関を招致し、常態として各種の国際会議・イベントが行なわれ、世界の人びとが「一生に一度は訪れたい国」として評価されているだろう。

のちの歴史書は、誇らかに、こう記すであろう。

「二一世紀初頭の日本は、先行国としてアジアの近代化（モノの豊かさの共有）に貢献し、世界大戦ののちに平和の証として灯した「平和憲法」を一〇〇年護持して「高齢社会」を世界に先駆けて実現した。互助、共助、公助のしくみを持つ地域社会のありようは、後進諸国のモデル例を提供し、宗教にも民族にも男女にも貧富にも、そして年齢にも差別をしない民主主義国家を達成した」

国際的にも注目され納得されるような、「長寿社会Ⅱ日本型高齢社会」の形成は、高齢者としてすべての世代の参加によって達成され、後を追って高齢化を迎える途上国や後人にとって、「日本型モデル」となるべきものである。

二 そして国際人として

国民性としての「ホスピタリティー」

＊自然にあふれ出る「おもてなしの心」

二〇二〇年のオリンピック東京招致が決まったが、二〇〇二年六月の日韓共催のサッカー「ワールドカップ」の折りの国際的な熱気はなつかしい。

ホスト国として、参加各国チームの選手たちを迎え入れ、みごとな「ホスピタリティー」（おもてなしの心）を発揮した二八市町村。日本各地の人びとには、世界中から訪れた人びとに競技場の内外で示したように、おのずから溢れ出る親和の感性によって、国際交流を友好的にすすめることができる潜在力があることを、世界に証明したのだった。

「アリガトー」は世界語になる勢いだったし、街の清潔なこと、花の多いこと、礼儀ただしこと、どこにも温泉があること、列車が時刻通りに動いていること、スシが「トテモ、オイシイ」など、物価高を除けばホスピタリティーは十分に実証されたのだった。

子どもたち、女性、高齢者が、それぞれの地域でみせた国際交流での「お国ぶり讃歌」であった。とくにアフリカのカメルーン・チームを迎えた大分県の中津江村と、昨年二〇一三年に引退した人気NO1だった「ベツカム様」がいるイングランド・チームを迎えた兵庫県の名津名

町が話題にはなったが。

おのずから表れる「ホスピタリティー」（おもてなしの心）はどこから生じるのか。

長く鎖国した島国であったことで、地域に潜んでいる国際交流への期待感には、計り知れないものがあるように思われる。これこそが地域の資産として生かされるべき地域パワーなのではないか。「地域から地域へ」のつながり、とくに海外の都市とのヒトとモノの交流には、労苦をはるかに越えた成果が穏和なプロセスのうちに実現される可能性が見えている。

「アベノミクス」による円安効果で、海外からの旅行者が増えている。とくにアジアからのお客が多いという。

日本企業は海外進出で、アジアの民衆の暮らしの近代化、豊かさに貢献している。アジアの人びとが「暮らしの先進国化」を成し遂げたわが国に来てくれることで、いつそう「平和の国」の評価がアジアの人びとに理解されることがうれしいではないか。

わが国の地域の「ホスピタリティー」（おもてなしの心）を支えているのは、四季の移ろいをじょうずに受け入れながら温和な感性を大切にして暮らしている人びと、だれに対しても等しく親切な高齢者のみなさんである。

その心の深い層に培われている繊細さや優しさは、四季折り折りに変化する風物との出会いがもたらしてくれた自然の恩恵（天恵）といえるものに違いない。何度となく繰り返される季節との出会い・・・。

- ・ 春は桜前線（三月～五月）が北上し、秋には紅葉前線（一〇月～一二月）が南下する。
- ・ 南からは春一番が吹き荒れ、北からは木枯らしが吹き抜ける。
- ・ 八十八夜の晩霜を気にかけて、二百十日の無風を祈る。
- ・ 南の海に大漁を伝えていわし雲が湧き、北の海にぶり起こしの雷鳴が轟く・・・。

わが国の自然は、みごとに四季の変化に調和がとれている。それはまた海の幸・野の幸・山の幸を豊富にもたらしてくれる。「平分秋色」、秋には収穫を等しく分け合い、奪うよりは譲り合い、見捨てるよりは助け合う、といった「国民性としての和の心」（温和、穏和、調和、親和、平和、協和、総和・・・まだある）が、自然のうちに育まれている。と、これは海外の日本研究者が等しく指摘するところ。

だれかれの分け隔てなく萎えた心を励まし、痛んだ身を癒してくれる風物とくに温泉や特産物に事欠かない。それとともに、各地には先人が貯えてくれた歴史・伝統遺産も多く残されている。

二〇一三年は富士山が世界文化遺産に登録された。自然遺産ではなく、文化遺産であることに納得がいく。また「和食」が世界無形文化遺産に登録された。「和食」は、さまざまな知識や技術が人から人へと受け継がれ磨きあげられて、「地場産業」や「お国ぶり」として暮らしを豊かにしてきたのである。

だれかれの分け隔てなく等しく親切な高齢者。「日本高齢社会」は高い国際評価を受けるであ

ろうし。年長者への敬愛の情は、他国からも与えられるだろう。

自治体が産み出す「国際貢献」

＊リピーターに「国土を四倍に見せる法」

いま自分が住んでいる自治体が、海外にふさわしい相手を見出して、住民同士が親しく行き来し、異質な文化交流や特産品の共同製作を競う姿を思い描いてみよう。

わが国の高齢者が持つ「モノづくり」の能力と「親和」の心情は、「シニア海外ボランティア」のみなさんや海外進出企業の高齢社員の実績が示すように、途上国の人びとにとっては発展の原動力となるものだ。

常に開かれた不凍港のように頼りがいある存在としてのわが国の小村、小都市。海外との交流は将来かならず双方の個性や豊かさを生み出す源泉となる。

いま「姉妹・友好自治体」は約一五〇〇ほどあるが、多くはない。合併企業や物産の共同開発といった経済活動や個別分野のさまざまな交流が進めば、数も内容的にもおおいに広がることが予測される。

とくに長い民間交流の歴史をもつ日本と中国の場合には、国家間の不和・齟齬の時期を乗り越えて、すでに三〇〇余の「友好都市」があり、信頼をつなぎ、友好の成果をもたらしてきた。

太い交流のパイプになっている。戦後これまでに研修生として訪れた中国の多くの若者が、いまや各地の都市で第一線で活躍している。

いくつか例をあげれば、首都の東京（各区も）と北京（各区も）、近代港湾都市の大阪・横浜と上海、歴史文物の京都・奈良と西安をはじめ、勝沼とトルファン（ぶどう）や須賀川と洛陽（牡丹）、富士と嘉興（紙）といった特産物、そして留学生魯迅のふるさと紹興と先生藤野厳九郎の生地あわら、亡命期の郭沫若にちなむ市川とふるさと樂山、中国国歌の作曲者聶耳の終焉の地である藤沢と生地昆明といった人物を介した絆による交流まで幅広い関係を持つ。

そしてそれを地道に支えているのは、長い日中交流の歴史を思い、大戦時の不幸な記憶を忘れずに信頼を積み上げてきた両国の高齢世代のみなさんである。

「国際交流課」が設けられている県、市、大学は少なくない。K市の市役所にも「国際交流課」が設けられていて、現地のことばに堪能な職員「国際交流員」が常駐して対応している。市に滞在している外国人滞在者には、各分野の研修者や留学生や企業人などがいて、さまざまな国際交流圏をつくって暮らしている。多くはないが結婚して定住している人びともいる。なんとも活き活きした国際交流の情景ではないか。

海外の姉妹・友好都市から友好・参観にやってきた人びとは、まず県都で交流の時をすごし、地方を代表する文化に接する。それから市町村にはいる。

海外からの客人たちは、それぞれの「友好市町村」を訪れて、目的である文化やスポーツや

物産に関する交流の時をすごす。各地にある温泉施設に案内されて、日本式のもてなしを受けることになる。これが楽しい。

市町村が設けるのは、四季折り折りの美しい風物や料理や温泉を活かした「地域の国際交流施設」である。海外からの訪問者は、「一生に一度は行ってみたい」と心躍らせてはるばるやってくる。

「人生っていいな。日本ってすばらしいな。別の季節にまた来たいな」

と、野天風呂につかって暮れなずむ異郷の空の星を眺めながら、母国語でつぶやいてくれる。

そして「和食」のおもてなし。宿のおかみさんをはじめ、地元の高齢者のみなさんがだれも等しく親しく迎える姿は、海外から訪れた一人ひとりの友人の心に、母国の暮れなずむ星空を見上げるたびに、「アリガトー」とともに一生のあいだ輝きつづけていることだろう。

これはとくに重要な視点であるが、迎える側のみなさんが、四季を「四つの変化」として際立たせることによって、遠来の客人たちは春・夏・秋・冬（新年）の四回は訪れる楽しみを持つことになる。いうなれば、四季を時節の刻みとして活かす高齢世代の人びとの暮らしの知恵が、ここでは「優れた小国」の知恵として「国土を四倍に見せる法」となるのである。

そして何より喜ばしいことは、海外の市町村との地道で実質的な交流活動が、わが国が「恒久平和をめざしている優れた文化大国」であることを、海外各地からの発信によって明らかにしてくれることである。「文化大国」なら大国意識を競っても誇ってもいい。

「国際高齢者年99」が新世紀へのメッセージ

*「高齢者のための五原則」が共通の意識

新世紀に迎える地球規模での潮流として「高齢化社会」を予測し、一九九二年に国連が一九九九年を「国際高齢者年」(International Year of Older Persons)と定め、そのテーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのは一九九五年のことだった。

前世紀末近くにそんなことがあったことを知っている高齢者がどれほどいるだろうか。

国連の善意の提唱者が、テーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのは、世代を越えた人びと(エイジレス)の賛同と参加を期待したためであつたらう。活動の中心となるのは、世紀の初頭に高年期を迎えるわれわれであり、最初に迎えることになる先進諸国であり、なかでも大型で最速で進む「日本」が台風の目となる立場にある。

一九九〇年代から新世紀にかけてのそういう明確なメッセージが、警鐘にも似た強い風圧としてしっかりと受け止められていたならば、この国で高年期を迎えている人びとの「この一〇年」の取り組み方もその結果も大いに異なっていただろう。

各国が新世紀に迎える「高齢化社会」にむかってスムーズに移行できるよう、国連から次々に取り組みが提案され、世紀末の一九九〇年代を通じた国際的テーマとなっていたのである。

一九九〇年の総会で、毎年の一〇月一日を「国際高齢者デー」(International Day of Older Persons)と定めたあと、運動の展開への願いを込めて、

自立 (independence)

参加 (participation)

ケア (care)

自己実現 (self-fulfilment)

尊厳 (dignity)

という五つの「高齢者のための国連原則」を採択したのが九一年であり、そして「高齢者に関する宣言」とともに九九年を「国際高齢者年」と決定したのが九二年のことだった。

一九九九年の「国際高齢者年」には、わが国も総務庁を中心に各自治体、民間団体も参加して全国的な活動を展開した。参加した記憶をもつ人も少なくないはずである。現在の高連協(高齢社会NGO連携協議会)が結成されたのもこの時である。それに先立つ一九九五年には「高齢社会対策基本法」が制定されている。

だれあろう、毎年一〇月一日の「国際高齢者デー」に、他国に先んじて活動を展開し、実質的な成果を積み上げて国際的に公開するのは、この国の高齢者の役割だったのである。

一九九九年の「国際高齢者年」をきっかけとして、新世紀へむかって「日本型高齢社会」への構想が提案され、高齢化対応の具体的な取り組みが新世紀にはいつて次々になされてきたな

ら、高齢者意識もまた広く醸成されていたことだろう。

自治体によっては、すでに九〇年代に、たとえば東大和市、春日市、枚方市、新居浜市、柳川市など先駆的に「高齢者（高齢社会）憲章」を定めたところもあったのだった。「長生きは命の芸術品」ではじまるのは、「南国市高齢者憲章」である。が、全国的な活動にまでは進まなかった。これは明らかに構想力を示せなかった政治側の責任である。団体でも個人でも国連の「高齢者原則」の五つのうち、ひとつでも意識して活動することが「高齢化国際人」なのである。

わが国の場合は、「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」の国連五原則のうち、わずかに「ケア」だけは実体をもって推進されてきたといえる。内閣府の組織は「国際高齢者年」の記念行事が終わったあとと縮小してしまっただが、高連協の中核を支えてきた福祉関係の団体はその後も一貫して活動を継続してきたからだ。

九〇年代から新世紀を通じてのこの一〇年余、高齢者みんなが「わたしの高齢期」を意識して、みずからの暮らしを充足させる家庭や地域生活圏の「モノや居場所」をこしらえるために活動して、「優れた高齢化用品」や設備や施設を実現させていたならば、企業や組織もまた「高齢化対応のリストラ」にも努めていたことだろう。

そして新世紀を迎えて、国民運動として着実に推進されていたなら、わが国の高齢者自身が生かされて苦難を強いられることにはならなかったのである。

全国で催された「国際高齢者年記念事業」

*石原都知事も主催者のひとりだった

一九九九年、この国の「国際高齢者年」の記念事業は、総務庁（当時）のもとで、民間の福祉団体の活動者を中心におこなわれ、国も自治体も努力はしたものの、肝心の一般高齢者がわがこととして理解しなかつたのである。

記念行事は総務庁を主催者として取り組まれ、各省庁をはじめ、都道府県（三八九事業）、市町村（六九五事業）が展開された。

一〇月一日「国際高齢者デー」の「国際高齢者年フェア・IN・TOKYO」（記念式典）では、四月に就任したばかりの石原慎太郎都知事も主催者のひとりとして、

「どうか皆さん、これからますますお元気で、この国を持ち直し、結果として周囲からも尊敬される日本の社会をつくり直していくよう、お互いに頑張りましょう」

と挨拶していたのである。八〇歳代になった石原さん、村山（富市）さん、野中（広務）さんなどの「ベテラン議員の会」のなすべき第一は、「日本高齢社会」の推進である。

高齢者年NGO連絡協議会（現在は高齢社会NGO連携協議会Ⅱ高連協）による「高齢者憲章」が、一九九九年九月に発表されている。この憲章の内容はいまなお課題のありかを伝えて新しい。あまり知られていないが、兵庫県の高齢者大学校「いなみ野学園」も一月に「いな

み野宣言」を残している。

その後、まことに残念なことだが、本来の主役である一般の高齢者の不参加のまま過ぎていった。二〇〇九年は「国際高齢者年」の一〇周年に当たったが、際立った活動は見られずに終わった。国連の藩基文事務総長のメッセージが虚しく響くほどだった。

この間、国際的な活動としては二〇年ぶり二〇〇二年にマドリードで「第二回高齢化に関する世界会議」（第一回は一九八二年にウィーンで）が開かれている。

「高齢化に関する国際行動計画二〇〇二」を採択し、世界の多くの地域で平均余命が伸びたことを人類の大きな成果とし、世界的に前例のない人口転換が生じていること、二〇五〇年までに六〇歳以上の人口が約二〇億人に増加し、人口比率では二一％に倍増する見通しであり、すべての国に対して、「高齢者が潜在力を発揮して生活のあらゆる側面に参加する」ことができるような機会の拡大を要請した。

「第三回 高齢化世界会議」を日本に招致しよう

*「第三二回 東京オリンピック」とともに

二〇二〇年には、世界の若者たちが力を競うスポーツの祭典「第三二回東京オリンピック・パラリンピック」が開催される。それに向けて組織委員会が設置され、各界から選ばれた一七

○人の顧問会議も決まって、一步を踏み出した。

それと重ねて、第一回（一九八二年・ウイーン）、第二回（二〇〇二年・マドリード）に次いで二〇二二年の「第三回 高齢化に関する世界会議」（World Assembly on Aging）を、「高齢化マラソン」のトップランナーである日本へ招致し開催するのは、国際的役割だろう。

二一世紀の国際的な潮流である「地球丸ごと高齢化」という課題を取り上げ、各国の政府関係者、専門家、経済人、報道人、NGO、市民の代表が一堂に会して、成果を共有し、将来構想を討議する機会とする。わが国の高齢者の知識と経験による「すべての世代のための高齢社会」形成への活動を公開しながら、世界から招いた優れた友人とともに、「国際平和と普遍的長寿社会」の証としての新たな構想を掲げることが、平和国家・長寿社会のリーダーとしてのわが国の責務であり、誇りうる歴史的事業である。

会議は「高齢者に関する国連五原則」にうたわれた「自立、参加、ケア、自己実現、尊厳」の精神を基調に、一人ひとりの高齢者のだれもがどこでも充実した人生を享受できるように、新たな行動計画を練り上げることとなる。世代間・民族間・男女間の協調を実現する会議の成功は、「人類の平和的共存」の将来を明るくするだろう。

会場としてはアクセス、施設、これまでの活動経緯（千葉県房総長寿社会憲章）などを考慮して、首都圏を候補地とする。

「会議名」

- I 第三回「高齢化に関する世界会議」(World Assembly on Aging' WAA) 2022
 - ・国内会議としての「高齢化に関する国内会議(都市と地方)」2016
 - ・地域会議としての「高齢化に関する東アジア地域会議」2018各国に取組事例に関する情報収集・リソースセンターの設置を要請
- 第三回 WAA の中心議題を「高齢化と社会経済の革新」とする
- II 「世界高齢者会議」―人類平和共存への道― 2022
 - 世界大戦後の「平和日本」を知る各界代表者および元大統領・首相・学者・宗教家ほか国際的な高齢者リーダーを招へいする(この会議は日本で継続して開催)
- III 「世界高齢社会活動者会議」―すべての世代のために― 2022
 - NGO など高齢社会活動の実践者・市民が地域の成果を語り合う
- IV 本会議にむけた準備会議・地域会議など。

国際平和の証としての「日本高齢社会」

* 二一世紀初頭になすべき国際貢献

二一世紀の国際社会が、なお平和裏に推移するかどうかはわからない。国連は、新世紀が「平和と非暴力」にむかうことを願って、「文明間の対話」を課題とし、二〇〇一年を「文明間の対

「話年」としたのであった。

ところがそれに逆らうように、ニューヨークの「九・一一テロ事件」、そして二〇〇二年三月の「イラク戦争」を引き起こし、報復テロの恐怖が世界を覆うことになってしまっている。アメリカ国民は、史上初めて身近に戦争の恐怖を実感したことになる。

そんな中で、日本は「人道支援」という名目で自衛隊を海外の戦場へ送り出した。それでも一兵も失うことなく、現地の人びとに受け入れられて作業を遂行できたのは、「平和憲法をもつ国からの自衛隊」だったからであり、イラクはもちろん国際的にもそう評価されていることの実証例となったのである。

そして「平和日本」の評価は、なによりも戦争と戦禍を体験した国民の一貫した平和への強い意志を置いてほかにない。そしてその向こうには、戦場となったアジアの隣国とそこに暮らしている人びとの戦乱と戦後の経緯があることを忘れてはならない。

いまグローバル化という時流に乗って近代化をすすめるアジア途上国の人びとが、日本のようなモノと日本人のような豊かな暮らしを望んできいていま実現している。

その姿をみると、戦後の復興に身を挺して粒粒辛苦してくれた先人の姿に重ねて、アジアの将来のために平和を守りぬく覚悟を固めるときなのである。

歴史から学ぶなら周辺国のようにすを知ることだろう。

昭和のはじめには、中国もソビエトも革命期にあり、アメリカは太平洋国家ではなかった。

その隙間を縫って日本帝国は極東で動いた。いまや中国・ロシアとも自立した大国であり、アメリカ軍は日本国内に基地をおく。こんな三大国に囲まれて、国粹主義、軍国主義、軍需産業化はなりたない。

ここは国際平和主義である。戦後の目標だった「東洋のスイス」のような国際機関を置き、常時に国際会議が開かれ、世界から観光客が訪れる国（やおよろずの神々のご加護によって平和裏に）。そして海洋大国としての活動。

ひとりの人間にとっても、人類にとっても最重要である多重性は「戦争」と「平和」であり、国も国民も「平和への心火」を現実に灯もしつづけることである。

先の大戦から半世紀余り、この国の戦争の悲惨を知っている人びとの髪は大方は白くなった。そして日本はその間「干戈を見ず」に過ごしてきた。二〇世紀の「戦争の惨禍」を先人が引き受けてくれたことで得た平和の期間。それをどこまで引き継げるかは残された者たちの「平和への心火」の継承にかかわる。

その平和期を実感しながら、老若男女がそれぞれに自分たちの手でつくりあげた生活環境で憩い、衣食住にもほぼ満ち足りている姿がある。「世界一の長寿国」として、長寿者が周囲のみそんなに敬愛されている姿こそ、なにより世界に誇つていい「平和の証」なのである。

その理念として「日本国憲法」（とくに九条）を掲げつづけるとともに、地域に根ざした「日本高齢社会」を達成することが、新世紀初頭の国際社会でなすべき日本の貢献なのであり、歴

史に学んだ誇るべき国民運動といえるのである。

不戦不争の灯かりを伝えて

*「平和憲法」施行一〇〇年を祝う

「恒久平和」を掲げた「日本国憲法」は、原子爆弾という人類をも破滅させることもできる可能性をもつ武器が登場した先の大戦で亡くなった人びとへの「哀悼のモニュメント」（歴史的記念碑）であり、とくにその「九条」は先人の心火によって燃えつづけている「不戦の灯」ともいべきものである。

半世紀を越え、新世紀を迎えて一〇年、その経緯を確認し、党派性を排して「衆議」して引き継ぐべき貴重な歴史文化遺産である。したがって二〇四五年、制定一〇〇年までは「そのまま残すべきもの」である。

国際紛争は絶えることなくつづき、世界の軍事技術は仮想敵国を想定しながら自己増殖をつづける。それは朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争で、その恐るべき一端をみせつけた。局地戦は絶え間なくつづいている。

改憲？ そんな悪夢のような企てを押し止めるのが、大戦後に平和を託されて生まれたベビーブーマーである一〇〇〇万人の「平和団塊の世代」のみなさんであり、体現する「日本高齢

社会」である。それがそのまま歴史的な「世界平和へのメッセージ」となることに希望がある。

想像力の深度も構想力の精度も足りない現代の若手政治家は、先の大戦によって被害者となり加害者となるに至った戦争の惨禍への経緯を繰り返さないために掲げた「日本国憲法」を改変する能力も立場もないことを知らねばならない。

わが国の先人がどういふプロセスを踏んできたかの論議を尽くすにはいい機会だが、自分が納得できるレベルの認識で改憲を実行しようとすれば、必ず過ちをおかすことになる。

憲法は今ある人びとのためのものであるが、今ある人びとのものではない。

「自主憲法」と称して根幹を傷つけるとすれば、先人にも後人に対しても、これほど恥ずべき行為はない。いま確認すべきことは、憲法の条文の文言の改変をおこなうことではなく、条文の裏に燃えつづけている平和への「先人の心火」を感得し、灯を引き継ぐことである。その地点から戦争の惨禍を想起する想像力を培うことである。

若手の政治家が謙虚になすべきことは、平和を希求する憲法の趣意を「国際世論」とするために努めて、三四年ののちに迎える「平和憲法施行一〇〇年記念」を国際平和のもとで祝えるように保ちつづけることである。国会での議論がどのようになろうとも、最後に国民投票での決定権をもつ日本国民として、「歴史に学んだ」国民として、国際的に評価される判断を冷静にくだすことになる。

国際的に先行してたどる「日本高齢社会」形成への歩みを、「世界平和へのメッセージ」とし

て対置すること。天年（天寿）を全うする一人ひとりの高齢者の日また一日の生命の灯を、戦争への兆しがあるかぎり、歴史を貫いて流れる「不戦不争の叡智」に託して「戦争放棄・恒久平和」の明かりとして灯しつづけること。

「日本国憲法」の「不戦不争」の明かりが途絶えたとき、わが国はまた半世紀あまりを積んで得た国際的な評価を閉ざし、歴史的な輝きを失うことになる。耳をすまして過ぎこし百年の声を聞き、目を見開いて来たるべき百年を見透かせば、選ぶべき道はおのずと明瞭なことである。

そして「寿終正寝」（天寿）を全うする

*平和主義の国際性は「地域」にあり

国民が穏やかに生き、天寿を全うできる「寿終正寝」を願わない国などありえない。

市民が穏やかに生き、天寿を全うできる「寿終正寝」を願わない市町村などありえない。

自分が穏やかに生き、天寿を全うできる「寿終正寝」を願わない人などありえない。

だからお互いに「天寿を全うする」ことが、二一世紀が「平和の世紀」であることの国際的な証となる。

だから世界の高齢者が先行するわが国に期待するものは、紛争地に支援に向かう国防軍ではなく、「恒久平和」を掲げた憲法の下で、全国各地どこでもおだやかな人生を享受することが

できる「日本高齢社会」の実現であり、その形成へいたる仔細なプロセスである。

古来わが国は「君子の国」として、「譲るを好みて争わず」と伝えられてきた。とはいえ「自衛の力」は、独立国であるかぎり、他に脅威を与えず、他から脅威を受けない可能な範囲で、他に劣らない質の武力を自ら保持し常備しないわけにはいかない。

とくに抑止力になる「平和利用」の科学技術の保持もそうである。「人工衛星」や「原子力発電」（安全を確認した一部）といった平和利用の技術がそれである。「原発」も全面廃棄は理想だが、抑止力になる「平和利用」は保持せねばならない。

常日ごろの訓練によって培った他のいかなる国にも依存しない自衛のための「不戦の軍事力」と、常日ごろの鍛錬によって培った相手を説得しうる外交のための「能戦の文化力」と、それを支える安定した「経済力」とは、常に整え備えるべき三位一体の「国防力」なのである。

歴史にまれな平和の時代に、「日本高齢社会」を構成するひとりとして加わり、みずからが充足して長く生きて天年（天寿）を全うすることが、そのまま国際的な信頼を引き継ぐ「平和へのメッセージ」となることを確信することである。

かくして地域で尊厳をもって「寿終正寝」（天寿）を全うする。

外交的に孤立してまでも「国防軍」を保持するために「憲法改正」をし、世論がそれを支持するとなれば、日本は「歴史に学ばない国」という批判がいつそう強まることになる。これらの動きは戦争の被災各国にとっては、かつてたどった過去を想起させるものとなる。

一四年にわたった先の戦争は、軍の独断専行ではじまり、世論を味方につけて強行し、国際的に孤立し、ついに振り子は極限まで振れて敗戦によって終わった。だから戦禍と敗戦によって得たいまの「平和」は、みずからの手でかちとったものではない。

外交努力と国民の冷静な世論によって国際的孤立を避け、国防軍依存とそれを無批判に進める激した世論の醸成を阻止し、議論をつくして「平和憲法」を守りきってはじめて、日本は「歴史に学んだ国」として「平和をつくる民主主義」をみずからの手にすることになる。

いま「歴史に学んで歴史をつくる」政策は、「国から地域へ」である。「特性を活かした地域の発展」への国民運動が国を護る意識を醸成し、平和の礎と民主主義を強くすることになる。国から地方へむかうことによる国防意識の醸成、これを推進するならどこの国からも批判を受けることはない。「国から地域へ」の国民運動がわが国の「平和主義」を伝える国際性を持つ。

高齢者は戦争体験をしているところに特徴がある。どんな辛い目に遭ったかを体験者の生の事実として伝えると同時に、憲法を議論するにあたっては、平和の側からの論理を構築して、若い国民を説き、「平和憲法」保持の基盤を強めることも大切になる。

戦争の悲惨さを繰り返さない立場から制定された「平和憲法」（とくに九条）は国際平和の旗じるしであり、実態として平和の証となるのが「高齢社会」である。

高齢者であること、高齢者になることが誇りであり、後人を思い後人に敬愛されて安心して暮らせる「高齢社会」の達成が、二一世紀初頭の国際的潮流となっており、先行するわが国は、

「平和憲法」のもとでの「平和の証」の体现者であることを意識して、高齢期を生きることになる。一人ひとりの人生それ自体が「平和国家」保持という歴史的使命を負っているといえるのである。「平和団塊」のみなさんは、「平和の証」として一〇〇年を生き抜いて、大きな波濤となって「憲法一〇〇年」をめざしてほしい。

東アジアの平和のために、戦後七〇年の来年は三国共催で、記念行事を行なわなくてはならない。もちろん、世界に向かってである。

「知韓派」といわれる習近平主席の七月訪韓の際には、中韓両国の世論は、第二次大戦での軍事的侵略と慰安婦問題に対する日本政府の言動を批判し、漢風と韓流をつなぐ意味をこめた習主席の「風好正揚帆」という呼びかけを後押しした。経済・文化交流への蜜月ぶりも際立つ。

来年に両国は、「戦勝七〇年」を記念する行事を共同で展開することを決めている。安倍政権の「集団的自衛権」の推進は、七〇年の和平を破る「強詞奪理」として受け取られている。

本来なら、三国の政府が共催で、欧米に立ち遅れていた東アジアの近代化の進展と経済・文化交流の成果を、「アジアの勝利」としてともに祝うことが東アジアの民衆みんなの願いなのである。なぜそうできないのか。

まあいいか、でいいか。

止

・三世代年表 生年別の人口（男・女）、流行語、流行歌 制作・堀内正範

◇これより「中年期」（三〇歳～五九歳）

◇「而立期」（三〇～三九歳） 総務省統計局

生年 干支 年齢 人口（男・女）万人 流行語・流行歌

| | | | | |
|------|------|------|----------|-------------------------|
| 一九八四 | 昭和五九 | 甲子三〇 | 七三・五七一・五 | くれない族。イツキ飲み。「涙のリクエスト」 |
| 一九八三 | 昭和五八 | 癸亥三一 | 七四・四七二・六 | おしん。気くばり。フオーカス。「矢切の渡し」 |
| 一九八二 | 昭和五七 | 壬戌三二 | 七四・五七三・〇 | 逆噴射。ネクラ・ネアカ。「悲しい色やね」 |
| 一九八一 | 昭和五六 | 辛酉三三 | 七五・六七三・九 | フルムーン。熟年。ブリッ子。「ルビーの指輪」 |
| 一九八〇 | 昭和五五 | 庚申三四 | 七九・〇七七・二 | クリスタル族。「奥飛騨慕情」「恋人よ」 |
| 一九七九 | 昭和五四 | 己未三五 | 八八・一七九・〇 | インベーター。ダサイ。「贈る言葉」「関白宣言」 |
| 一九七八 | 昭和五三 | 戊午三六 | 八四・五八二・五 | 不確実性の時代。サラ金。竹の子族。「UFO」 |
| 一九七七 | 昭和五二 | 丁巳三七 | 八六・六八四・六 | ルーツ。カラオケ。「津軽海峡冬景色」 |
| 一九七六 | 昭和五一 | 丙辰三八 | 九一・〇八八・七 | 記憶にございません。灰色高官。「北の宿から」 |
| 一九七五 | 昭和五〇 | 乙卯三九 | 九五・二九二・八 | 複合汚染。乱塾。「およげ！たいやきくん」 |

◇「不惑期」（四〇～四九歳） 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年 干支 年齢 人口（男・女）万人 流行語・流行歌

- 一九七四 昭和四九 甲寅四〇 一〇〇・三九七・九 物価。超能力。ベルばら。「昭和枯れすすき」
- 一九七三 昭和四八 癸丑四一 一〇一・九九九・八 省エネ。日本沈没。福祉元年。「神田川」
- 一九七二 昭和四七 壬子四二 一〇〇・一九七・七 列島改造論。未婚の母。恍惚の人。「瀬戸の花嫁」
- 一九七一 昭和四六 辛亥四三 九七・四九五・五 脱サラ。ゴミ戦争。ピース。「また逢う日まで」
- 一九七〇 昭和四五 庚戌四四 九四・六九二・八 大阪万博。ウーマンリブ。「知床旅情」
- 一九六九 昭和四四 己酉四五 九三・〇九一・七 エコノミック・アニマル。「黒ネコのタンゴ」
- 一九六八 昭和四三 戊申四六 九〇・九八九・九 昭和元祿。ゲバルト。「恋の季節」「星影のワルツ」
- 一九六七 昭和四二 丁未四七 九〇・八八九・五 中流。核家族。アングラ。「真赤な太陽」
- 一九六六 昭和四一 丙午四八 七〇・七七〇・三 丙午。交通戦争。「君といつまでも」
- 一九六五 昭和四〇 乙巳四九 八七・五八六・九 期待される人間像。しごき。「女心の唄」

◇「知命期」(五〇〜五四歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

| 生年 | 干支 | 年齢 | 人口(男・女) | 万人 | 流行語・流行歌 |
|------|------|------|----------|------------------------|---------|
| 一九六四 | 昭和三九 | 甲辰五〇 | 八二・〇八一・二 | 俺についてこい。ウルトラC。「お座敷小唄」 | |
| 一九六三 | 昭和三八 | 癸卯五一 | 七九・九七九・五 | 三ちゃん農業。「高校三年生」 | |
| 一九六二 | 昭和三七 | 壬寅五二 | 七七・三七七・〇 | 人づくり。スモッグ。「いつでも夢を」「王将」 | |
| 一九六一 | 昭和三六 | 辛丑五三 | 七六・一七五・八 | プライバシー。不快指数。「上を向いて歩こう」 | |

一九六〇 昭和三五 庚子五四 七六・六七六・六 安保闘争。声なき声。「誰よりも君を愛す」

◇「パラレルゾーン期」(五五〜五九歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年 干支 年齢 人口(男・女)万人 流行語・流行歌

一九五九 昭和三四 己亥五五 七七・八七八・一 ご清潔でご誠実で。がめつい奴。「黒い花びら」

一九五八 昭和三三 戊戌五六 七五・七七六・三 団地族。ハイティーン。イカす。「港町十三番地」

一九五七 昭和三二 丁酉五七 七三・六七四・三 神武景気。よろめき。「有楽町で逢いましょう」

一九五六 昭和三一 丙申五八 七七・三七八・一 もはや戦後ではない。太陽族。「ここに幸あり」

一九五五 昭和三〇 乙未五九 八〇・〇八〇・八 ノイローゼ。三種の神器。「南国土佐を後にして」

◇これより「高年期」(六〇歳〜)

◇「高年期(還暦期)」(六〇〜六九歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年 干支 年齢 人口(男・女)万人 流行語・流行歌

一九五四 昭和二九 甲午六〇 還暦 八〇・〇 八一・一 死の灰。空手チョップ。「五木の子守唄」

一九五三 昭和二八 癸巳六一 八四・七 八六・六 家庭の事情。八頭身。「街のサンドイッチマン」

一九五二 昭和二七 壬辰 六二 八九・三 九一・七 黄変米。ワンマン。「芸者ワルツ」

一九五一 昭和二六 辛卯 六三 九四・七 九七・三 逆コース。「高原の駅よさようなら」
 一九五〇 昭和二五 庚寅 六四一〇一・八一〇四・九 特需。金へん糸へん。「白い花の咲く頃」
 一九四九 昭和二四 己丑 六五一一一・一一一五・一 ニコヨン。「青い山脈」「長崎の鐘」
 一九四八 昭和二三 戊子 六六一一〇・〇 一一四・四 斜陽族。ノルマ。「湯の町エレジー」「異国の丘」
 一九四七 昭和二二 丁亥 六七一〇四・四 一〇八・八 不逞の輩。ゼネスト。「鐘の鳴る丘」
 一九四六 昭和二一 丙戌 六八 六四・八 六八・四 象徴。タケノコ生活。「東京の花売娘」
 一九四五 昭和二〇 乙酉 六九 六八・七 七四・〇 敗戦。ピカドン。一億総ざんげ。「リンゴの唄」

◇「高年期（古希期）」（七〇〜七四歳） 人口は二〇一〇年一月一日。「国勢調査」総務省統計局

| 生年 | 干支 | 年齢 | 人口（男・女）万人 | 流行語・流行歌 |
|------|------|----|----------------|--------------------------|
| 一九四四 | 昭和一九 | 甲申 | 七〇古希 八三・〇 九〇・三 | 鬼畜米英。学童疎開。「同期の桜」「お山の杉の子」 |
| 一九四三 | 昭和一八 | 癸未 | 七一 八〇・〇 八七・四 | 撃ちてしまん。学徒出陣。「若鷺のうた」 |
| 一九四二 | 昭和一七 | 壬午 | 七二 八一・六 八九・八 | 欲しがりません勝つまでは。「南から南から」 |
| 一九四一 | 昭和一六 | 辛巳 | 七三 七八・八 八七・三 | 八紘一字。国民学校。「めんこい仔馬」「里の秋」 |
| 一九四〇 | 昭和一五 | 庚辰 | 七四 七〇・一 七九・四 | 月月火水木金金。「暁に祈る」「紀元二千六百年」 |

◇「高年期（喜寿期）」（七五〜七九歳） 人口は二〇一〇年一月一日。「国勢調査」総務省統計局

| 生年 | 干支 | 年齢 | 人口(男・女)万人 | 流行語・流行歌 |
|------|------|---------|-----------|-------------------------------|
| 一九三九 | 昭和一四 | 己卯 七五 | 六〇・八 | 六九・一 複雑怪奇。靖国の母。「上海の花売り娘」 |
| 一九三八 | 昭和一三 | 戊寅 七六 | 六三・八 | 七三・九 相手とせず。大陸の花嫁。「麦と兵隊」「支那の夜」 |
| 一九三七 | 昭和一二 | 丁丑 七七喜寿 | 六四・三 | 七五・七 国民精神総動員。「別れのブルース」「海ゆかば」 |
| 一九三六 | 昭和一一 | 丙子 七八 | 六三・〇 | 七五・七 今からでも遅くない。「ああそれなのに」 |
| 一九三五 | 昭和一〇 | 乙亥 七九 | 五八・六 | 七二・三 人民戦線。暁の超特急。「二人は若い」「野崎小唄」 |

◇「高年期(傘寿期)」(八〇〜八四歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

| 生年 | 干支 | 年齢 | 人口(男・女)万人 | 流行語・流行歌 |
|------|-----|---------|-----------|-------------------------------|
| 一九三四 | 昭和九 | 甲戌 八〇傘寿 | 五三・八 | 六八・〇 明鏡止水。「赤城の子守唄」「国境の町」 |
| 一九三三 | 昭和八 | 癸酉 八一 | 五一・九 | 六七・八 転向。ファシスト。「東京音頭」「島の娘」 |
| 一九三二 | 昭和七 | 壬申 八二 | 四八・九 | 六五・四 話せば判る。欠食児童。「影を慕いて」 |
| 一九三一 | 昭和六 | 辛未 八三 | 四五・一 | 六二・四 生命線。酒は泪か溜息か。「サムライニッポン」 |
| 一九三〇 | 昭和五 | 庚午 八四 | 四〇・六 | 五八・四 エロ・グロ・ナンセンス。「祇園小唄」「酋長の娘」 |

◇これより「長命期」(八五歳〜)

◇「長命期(米寿期)」(八五〜八九歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

| 生年 | 干支 | 年齢 | 人口(男・女) | 万人 | 流行語・流行歌 |
|------|----|------|---------|---------|-------------------------------|
| 一九二九 | 昭和 | 四己巳 | 八五 | 三七・二 | 五六・〇 大恐慌。大学は出たけれど。「東京行進曲」 |
| 一九二八 | 昭和 | 三戊辰 | 八六 | 三三・九 | 五三・〇 狭いながらも楽しい我が家。「波浮の港」「君恋し」 |
| 一九二七 | 昭和 | 二丁卯 | 八七 | 三〇・四 | 四九・八 何が彼女をさうさせたか。「ちやつきり節」 |
| 一九二六 | 昭和 | 一丙寅 | 八八 | 米寿 二七・一 | 四七・三 文化住宅。モガ・モボ。「ヨサホイ節」「この道」 |
| 一九二五 | 大正 | 一四乙丑 | 八九 | 二二・四 | 四二・五 軍教。ラジオ放送。円タク。「あの町この町」 |

◇「長命期(卒寿期)」(九〇〜九四歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

| 生年 | 干支 | 年齢 | 人口(男・女) | 万人 | 流行語・流行歌 |
|------|----|------|---------|---------|-------------------------------|
| 一九二四 | 大正 | 一三甲子 | 九〇 | 卒寿 一七・八 | 三七・〇 憲政の常道。メートルデー。「からたちの花」 |
| 一九二三 | 大正 | 一二癸亥 | 九一 | 一三・八 | 三三・五 大震災。流言蜚語。「船頭小唄」「復興節」 |
| 一九二二 | 大正 | 一一壬戌 | 九二 | 一一・三 | 二九・九 恋愛の自由。民衆芸術。赤化。「馬賊の唄」「砂山」 |
| 一九二一 | 大正 | 一〇辛酉 | 九三 | 九・二 | 二六・〇 悪家主。プロレタリア。「七つの子」「赤とんぼ」 |
| 一九二〇 | 大正 | 九庚申 | 九四 | 八・〇 | 二三・七 国調。示威運動。「聞け万国の労働者」「叱られて」 |

◇「長命期(白寿期)」(九五〜九九歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

生年 干支 年齢 人口(男・女) 万人 流行語・流行歌

| | | | | | | | | |
|------|----|---|----|----|-----|------|--------------------------|--------------------------|
| 一九一九 | 大正 | 八 | 己未 | 九五 | 五・四 | 一六・六 | デモクラシー。サボ。「背くらべ」「靴が鳴る」 | |
| 一九一八 | 大正 | 七 | 戊午 | 九六 | 四・五 | 一四・八 | 平民宰相。米騒動。赤い鳥。「浜辺の歌」「宵待草」 | |
| 一九一七 | 大正 | 六 | 丁巳 | 九七 | 三・六 | 一二・四 | きょうは帝劇、あすは三越。「さすらひの唄」 | |
| 一九一六 | 大正 | 五 | 丙辰 | 九八 | 二・八 | 一〇・四 | 民本主義。是々非々。「サンタルチア」「電車」 | |
| 一九一五 | 大正 | 四 | 乙卯 | 九九 | 白寿 | 二・〇 | 七・八 | 御大典。ナツチョラン。「恋はやさし」「乾杯の唄」 |

◇これより「百寿期」(一〇〇歳) 人口は二〇一〇年一〇月一日。「国勢調査」総務省統計局

| 生年 | 干支 | 年齢 | 人口(男・女) | 万人 | 流行語・流行歌 | | |
|--------|--------|----------|--------------------|-------|-------------------|------------------------|--------------------------|
| 一九一四 | 大正 | 三 | 甲寅 | 一〇〇 | 一・五 | 六・二 | 大正琴。「カチューシャの歌」「朧月夜」「故郷」 |
| 一九一三 | 大正 | 二 | 癸丑 | 一〇一 | 一・〇 | 四・六 | 薩関。新しい女。「鯉のぼり」「海」「早春譜」 |
| 一九一二 | 大正 | 一 | 壬子 | 一〇二 | 〇・七 | 三・三 | 大正維新。閥族打倒。「都ぞ弥生」「春の小川」 |
| 一九一一 | 明治四四 | 辛亥 | 一〇三 | 〇・四 | 二・二 | 元始、女性は実に太陽であった。「二宮金次郎」 | |
| 一〇〇歳以上 | | | 〇・六 | 三・八 | 四・四万人(二〇一〇年一〇月一日) | 「国勢調査」 | |
| 一〇〇歳以上 | 男七五八六人 | 女五万一二三四人 | 五万八八二〇人(二〇一四年九月四日) | 厚労省調査 | | | |
| 一九一〇 | 明治四三 | 庚戌 | 一〇四 | | | | 主義者。小学唱歌。「春が来た」「われは海の子」 |
| 一九〇九 | 明治四二 | 己酉 | 一〇五 | | | | 馬鹿な奴じゃ。マラソン。「ローレライ」「菩提樹」 |
| 一九〇八 | 明治四一 | 戊申 | 一〇六 | | | | 浮華軽佻。耽美派。「人を恋うる歌」「ハイカラ節」 |

| | | | | | |
|------|------|-------|--|--|--------------------------|
| 一九〇七 | 明治四〇 | 丁未一〇七 | | | 自然主義。美顔術。キリン。「旅愁」「故郷の廢家」 |
| 一九〇六 | 明治三九 | 丙午一〇八 | | | 黄禍論。成り金。無政府主義。「青葉の笛」 |
| 一九〇五 | 明治三八 | 乙巳一〇九 | | | 天気晴朗なれど波高し。二〇三高地。「戦友」 |
| 一九〇四 | 明治三七 | 甲辰一一〇 | | | 軍神。君死にたまふことなかれ。「日本陸軍」 |
| 一九〇三 | 明治三六 | 癸卯一一一 | | | アジアは一つなり。人生不可解。魔風恋風。 |

改元

明治 45 || 大正元 一九 12. 7. 30

大正 15 || 昭和元 1926. 12. 25

昭和 64 || 平成元 1989. 1. 8

(2 0 1 4 . 9 . 1 5 修正 堀内正範)

気軽に立ち寄れる「居場所づくり」

*「サロン」「コミュニティ・カフェ」「茶の間・縁側」など

平成二六年の「ねんりんピック」(第二七回全国健康福祉祭・一〇月四日～七日)は栃木県でおこなわれた。栃木県は「高齢者の居場所づくり」では、先進的な県といえるだろう。

居場所のタイプはさまざまだが、栃木県では全国社会福祉協議会が提唱している「ふれあい・いきいきサロン」と、さわやか福祉財団が普及につとめている「ふれあいの居場所」を参考に実例を積み上げてきた。

全国社会福祉協議会が提唱している「ふれあい・いきいきサロン」というのは、地域を拠点に、住民である当事者とボランティアが協同で企画をし、内容を決め、共に運営していく楽しい仲間づくりの活動「(あなたもまちなもいきいき!「ふれあい・いきいきサロン」のすすめ)

というもの。また、さわやか福祉財団が普及につとめている「ふれあいの居場所」というのは、「地域に住む多世代の人々が自由に参加でき、主体的に関わることにより、自分を生かしながら過ごせる場所、そこでのふれあいが、地域で助け合うきっかけにつながる場所」（ふれあいの居場所ガイドブック）である。二〇カ所以上の高齢者サロン等の居場所を開設している自治体を挙げておこう。

足利市は一〇〇カ所を超えている。足利市高齢者ふれあいサロン、佐野市高齢者ふれあいサロン、鹿沼市ほっとサロン、栃木市はつつセンター、小山市いきいきふれあいセンター、大田原市ほほえみセンター、那須塩原市生きがいサロン、那須烏山市いきいきサロン。

介護支援ボランティアについても、東京都稲城市の介護支援ボランティアを参考にして、小山市や日光市で導入している。また県では栃木県シルバー大学校も経営している。

鳥取県では福祉保健部長寿社会課が窓口で、「鳥取型地域生活支援システムモデル事業（居場所づくり）をおこなっている。

「居場所づくり」も実にさまざま。新たな活動が各地域の条件のもとですすめられている。

「高齢者」（埼玉県・豊橋市・京都市・高松市）、「子ども」（北海道・帯広市・青森県・練馬区・市川市）、「青少年（中学・高校生）」（神戸市）、「障害児」（横浜市・中津市）、「障害者」（奈良県）、「生活保護受給者」（那覇市）など。

